

宇佐別府道路・日出ジャンクション関係 埋蔵文化財調査報告書

安心院町 広谷遺跡
山香町 口野尾遺跡
目久保第1遺跡
目久保第2遺跡
須久保遺跡
日出町 尾形第1遺跡
エゴノクチ遺跡

大分県宇佐郡安心院町・速見郡山香町・日出町所在遺跡の調査

1993 年 3 月

大分県教育委員会

宇佐別府道路・日出ジャンクション関係 埋蔵文化財調査報告書

安心院町 広谷遺跡
山香町 口野尾遺跡
目久保第1遺跡
目久保第2遺跡
須久保遺跡
日出町 尾形第1遺跡
エゴノクチ遺跡

大分県宇佐郡安心院町・速見郡山香町・日出町所在遺跡の調査

1993 年 3 月

大分県教育委員会

序 文

大分県教育委員会は、昭和62年度から平成4年度に北大道路建設に伴い宇佐別府道路・日出ジャンクション区間内の埋蔵文化財の調査を実施してまいりました。宇佐別府道路は建設省と日本道路公団が建設にあたっておりますが、本書は、その道路公団関係の部分と同じく道路公団が関係する日出ジャンクションの工事に先立ち発掘調査した遺跡の報告書です。発見された遺跡は、旧石器時代から縄文時代・弥生時代・古墳時代・中世の各期に渡った貴重な内容を含んでいました。

本書を通して文化財に対するご理解をいただくとともに、学術的な貢献ができれば幸いです。

最後に、調査のご指導をいただきました諸先生方をはじめ、調査にご協力いただきました関係各位および地元の方々に対し、深く敬意を表すとともに、厚くお礼申し上げます。

平成5年3月31日

大分県教育委員会
教育長 宮 本 高 志

例 言

1. 本書は、昭和62年度から平成2年度に実施した宇佐別府道路建設に伴う広谷遺跡（安心院町）・口野尾遺跡（山香町）・目久保第1遺跡（同）・目久保第2遺跡（同）・須久保遺跡（同）の発掘調査、および平成2年度から平成4年度に実施した日出ジャンクション建設工事に伴う尾形第1遺跡（日出町）・エゴノクチ遺跡（同）の発掘調査報告書である。
2. 広谷遺跡の遺物の実測は、銭貨を後藤幹彦、その他を小柳和宏が担当した。須久保遺跡の石器の実測を牧尾義則、その他を小柳和宏、エゴノクチ遺跡の石器の実測は、旧石器関係を高畠 豊、細石器関係を綿貫俊一、その他縄文時代関係を高橋信武、鎌田洋昭・池田朋生（別府大学学生）が担当した。その他は高橋が担当した。
3. 本書の執筆は第3章－1（広谷遺跡）の銭貨は後藤、その他を小柳、第3章－5（須久保遺跡）は石器関係を牧尾、その他を小柳、第3章－7（エゴノクチ遺跡）の旧石器の項を高畠が整理し、荻 幸二が担当し、細石器の項は綿貫俊一が担当した。その他を高橋が担当した。

また、第3章－4（目久保第2遺跡の火山灰分析）は竹村恵二氏（京都大学地球物理学研究施設助教授）に原稿をいただいた。
4. 遺構実測図に使用した方位は磁北である。
5. 本書の編集は高橋が行った。

目 次

第1章 はじめに	1
第2章 調査遺跡の位置と環境	5
第3章 各遺跡の調査	9
1. 広谷遺跡	9
2. 口野尾遺跡	15
3. 目久保第1遺跡	33
4. 目久保第2遺跡	60
目久保第2遺跡土壌中火山ガラス抽出分析（竹村恵二）	76
5. 須久保遺跡	89
6. 尾形第1遺跡	119
7. エゴノクチ遺跡	128
写真図版	439

第 1 章 はじめに

1. 調査経過

大分市と福岡県北九州市とを結ぶ北大道路は高速道路に準ずるものとして計画され、現在大分県・福岡県とも建設工事が進行中である。北大道路は大分県側では、中津バイパス・宇佐バイパス・宇佐別府道路・日出ジャンクションに区分され、大分県教育委員会では昭和55年から調査に着手した。本書で報告する遺跡のうち、広谷遺跡・口野尾遺跡・目久保第1遺跡・目久保第2遺跡・須久保遺跡は宇佐別府道路の区間内のうち安心院町～山香町にあり、尾形第1遺跡・エゴノクチ遺跡は日出ジャンクション（速見インターチェンジから大分自動車道の十文字原交差点まで）内の遺跡である。発掘調査は日本道路公団福岡建設局（宇佐別府工事事務所）の委託事業として大分県教育委員会が、昭和62（1987）年から平成4（1992年）に実施したものである。

路線内の埋蔵文化財の取り扱いについては、日本道路公団福岡建設局宇佐別府工事事務所と適宜協議をおこなってきた。道路建設の計画段階で分布調査を行い、その結果に基づき実際に用地買収が行われた段階で試掘調査を実施していった。しかし、現実には用地買収が遅れることが多く、時間的制約の関係で約半数の遺跡では試掘調査からすぐに本格的発掘調査にとりかかった（目久保第1遺跡・目久保第2遺跡・エゴノクチ遺跡・尾形第1遺跡）。なお、試掘調査の結果、埋蔵文化財を確認しなかった地区（矢頭池周辺地区・須久保入口地区・尾形第2地区）もあった。

各遺跡の調査期間は次のとおりである。

広谷遺跡……………1987. 8～12

須久保遺跡……………1988. 4～1990. 4

口野尾遺跡……………1989. 6～1990. 2

目久保第1遺跡…1989. 6～1990. 8

目久保第2遺跡…1989. 6～11

エゴノクチ遺跡…1990.10～1991.11

尾形第1遺跡……………1991.11

2. 調査組織

広谷遺跡の調査・昭和62（1987）年度

調査 主体 大分県教育委員会

調査 指導	賀川 光夫（別府大学教授・県文化財審議会委員）
総 括	嶋津 文雄（教育長）（教育次長）・後藤 昭六（文化課長）・徳丸 欽也（同課長補佐）・後藤 宗俊（同主幹）
庶 務	
調査 主任	渋谷 忠章（埋蔵文化財第 2 係長）
調査担当者	小柳 和宏（同主事）

須久保遺跡の調査・昭和63（1988）年度

調査 主体	大分県教育委員会
調査 指導	賀川 光夫（別府大学教授・大分県文化財保護審議会委員）
総 括	嶋津 文雄（教育長）・千手 章夫（教育次長）・小代 基雍（文化課長）・阿部 正博（同課長補佐）・後藤 宗俊（同）
庶 務	今永 一成（庶務係長）・神 昭雄（同主事）
調査 主任	渋谷 忠章（埋蔵文化財第 2 係長）
調査担当者	小柳 和宏（同主事）・友岡 信彦（同主事）・吉田 寛（同主事）・清原 史代（同嘱託）

口野尾遺跡・目久保第 1 遺跡・目久保第 2 遺跡の調査・平成元（1989）年度

調査 主体	大分県教育委員会
調査 指導	賀川 光夫（別府大学教授・大分県文化財保護審議会委員）
総 括	嶋津 文雄（教育長）・千手 章夫（教育次長兼管理部長）・後藤 正二（文化課長）・仁部屋 忠一（同参事兼課長補佐）・後藤 宗俊（同課長補佐）
庶 務	今永 一成（庶務係長）・山口 淳史（同主事）・青木 磨（同）
調査 主任	渋谷 忠章（埋蔵文化財第 2 係長）
調査担当者	高橋 信武（同主任）・清原 史代（同嘱託）
調査補助員	山口 （京都女子大学学生）・早瀬 貴代（同）・高田 里美（同）

目久保第 1 遺跡・エゴノクチ遺跡の調査・平成 2（1990）年度

調査 主体	大分県教育委員会
調査 指導	賀川 光夫（別府大学教授・大分県文化財保護審議会委員）
総 括	宮本 高志（教育長）・釘宮奈良雄（教育次長兼管理部長）・後藤 正二（文化課長）・徳丸 欽也（同参事）・林 英輝（同課長補佐）
庶 務	今永 一成（管理係長）・山口 淳史（同主事）・原 浩一（同）

調査 主任 渋谷 忠章（埋蔵文化財第2係長）
調査担当者 高橋 信武（同主査）・染矢 和徳（同嘱託）・山本健太郎（同嘱託）

エゴノクチ遺跡の調査・平成3（1991）年度1990.10～91.11

調査 主体 大分県教育委員会
調査 指導 賀川 光夫（別府大学教授・大分県文化財保護審議会委員）
総 括 宮本 高志（教育長）・坂本陽一郎（教育次長兼管理部長）
庶 務 秋葉 正嗣（文化課長）・林 英輝（同課長補佐）・今井 義人（同管理係長）・山口 淳史（同主事）・原 浩一（同）
調査 主任 渋谷 忠章（同埋蔵文化財第2係長）
調査担当者 高橋 信武（同主査）・綿貫 俊一（同主事）・山本健太郎（同嘱託）・須原 緑（同）
調査補助員 柏木 健一（別府大学学生）・阿南 亨（同）・志摩 紀郎（同）

尾形第1遺跡の調査・平成4（1992）年度

調査 指導 賀川 光夫（別府大学教授・大分県文化財保護審議会委員）
総 括 宮本 高志（教育長）・坂本陽一郎（教育次長）・清瀬 和弘（教育次長）・秋葉 正嗣（文化課長）・衛藤 伸一（同課長補佐）
庶 務 姫野 守正（課長補佐兼管理係長）・山口 淳史（同主事）・原 浩一（同）
調査 主任 渋谷 忠章（主幹兼埋蔵文化財第2係長）
調査担当者 高橋 信武（同主査）

なお、調査にあたっては安心院町教育委員会・山香町教育委員会・日出町教育委員会の協力を得た。

調査作業員

渡辺マト子・土師芳子・岩尾政子・岩尾慶子・岩尾直美・林時枝・安部房子・安部幸子・菅原富美子・渡辺洋子・原山省二・是永千里・是永千津子・是永敦子・佐藤せつ子・永井君子・永塚忠子・小川妙子・後藤つや子・後藤みち子・吉弘幸子・阿南亨・菅原京子・宮崎こずえ・松本スギ子・石川つるえ・井上京子・岩下ヨシ子・熊崎サチ子・田口和秀・末松千里・町田道治・姫野三郎・田中源雄・狩生勝子・松本笑子・加藤巧・山口瑠璃子・成松ユリ子・今留一二三・他



第 2 章 調査遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置

調査遺跡の所在地は以下のとおりである。

広谷遺跡（大分県宇佐郡安心院町大字佐田字広谷）

口野尾遺跡（大分県速見郡山香町大字久木野字口野尾）

目久保第 1 遺跡（大分県速見郡山香町大字久木野字目久保）

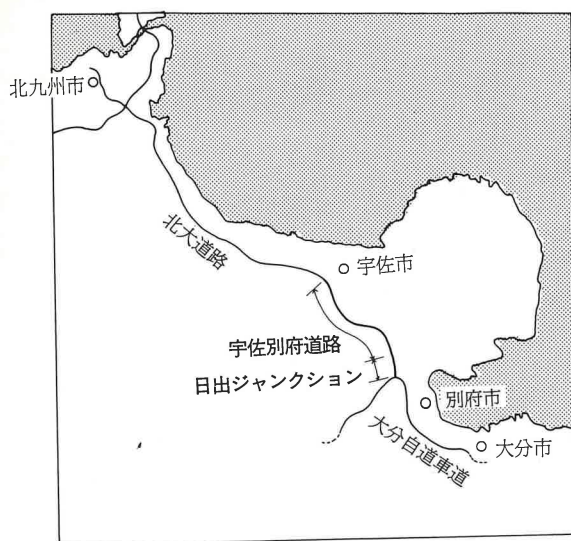
目久保第 2 遺跡（大分県速見郡山香町大字久木野字目久保）

須久保遺跡（大分県速見郡山香町大字久木野字目久保）

尾形第 1 遺跡（大分県速見郡日出町大字南端）

エゴノクチ遺跡（大分県速見郡日出町大字南端）

これらを包括する大分県北部の地形は、全て火山活動によって出現したものである。別府湾北西側の鶴見岳・由布岳を代表とする火山群の北側には、周防灘と別府湾に注ぐ河川によって侵食された結果できた南北方向に細長い多数の丘陵が広がっている。この付近では人口密度が低く、畑地や果樹園として利用されている部分よりも、雑木や杉林となっているところの方が多い。宇佐別府道路はこの地域を南東から北西に貫くもので、九州横断道路とは日出ジャンクションによって結ばれる。

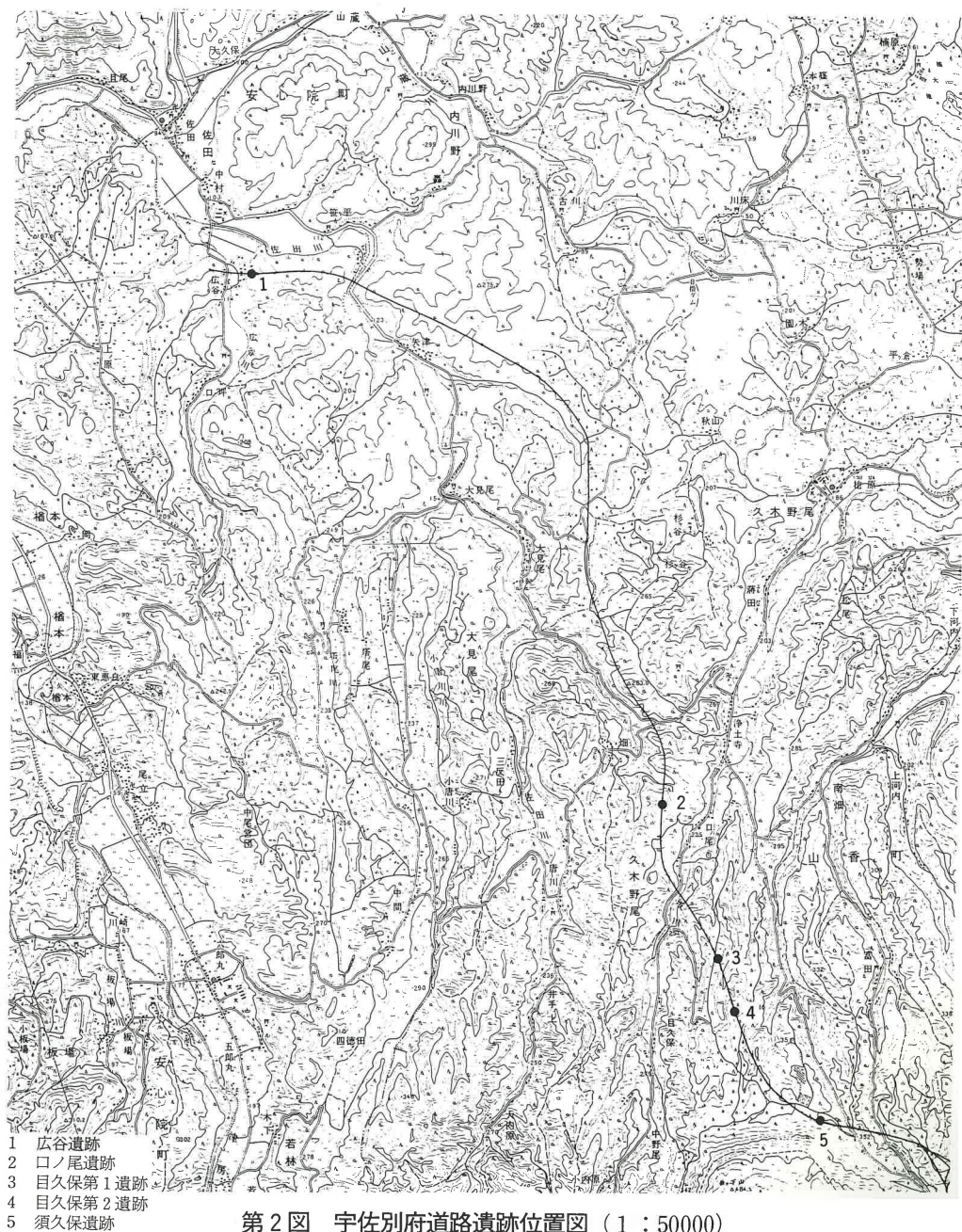


第 1 図 北大道路路線図

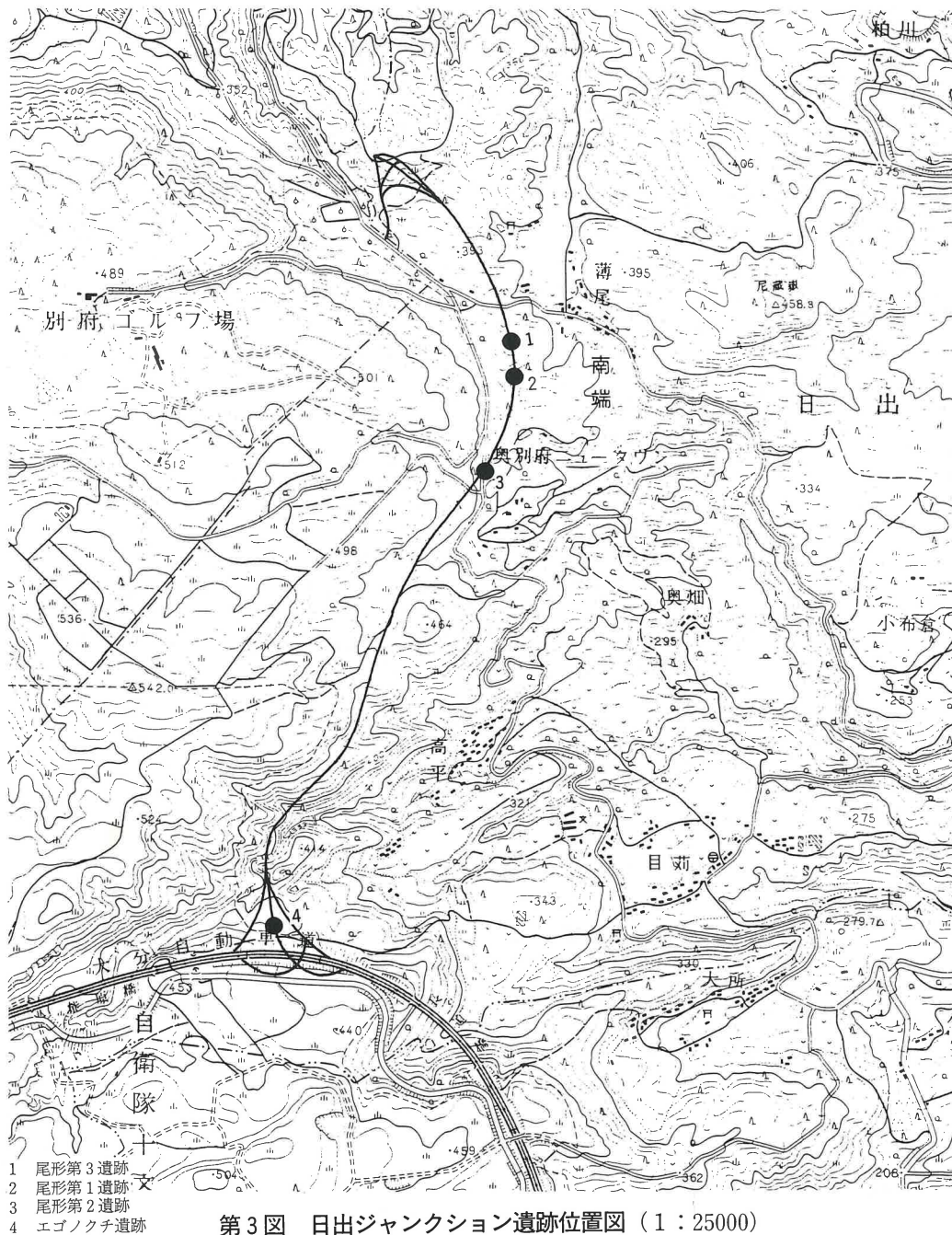
広谷遺跡は駅館川上流の佐田川流域の丘陵上に位置する。佐田川流域にそって細長く延びる沖積地と丘陵との比高差は約70mあり、このような丘陵が主に南から東の方向に標高約200~300mで広く分布している。口野尾・目久保・須久保遺跡は別府湾北部に流れ込む八坂川の上流域にあたるが、地形的には広谷遺跡周辺の丘陵に連続している。このあたりになると谷の幅が狭まって、加耕地の主体は丘陵上に移る。尾形第 1 遺跡とエゴノクチ遺跡は、別府湾に注ぐ三川上流域に位置する。

2. 歴史的環境

第2図に示す範囲では、旧石器時代の遺跡はこれまで知られていない。縄文時代では早期の遺跡として、飯田二反田（註1）・十文字原第1（註2）・小畑原A・鳥屋・柏川遺跡があり押



形文土器が出土したり採集されている。松ノ木台遺跡（註3）では手向山式土器が出土している。十文字原第1遺跡からは土坑の周辺に大小の礫を配した墓が3基発見されている。別府湾北部の沿岸には、日出町早水台遺跡（註4）や杵築市稻荷山遺跡（註5）・山香町川原田遺跡（註6）その他早期の遺跡が多いことが知られているが、これと同じ傾向を示す。空白期間の後、



後期には飯田二反田遺跡から小池原上層式・鐘崎式・北久根式の頃の竪穴住居跡 5 基が出土し、晩期は土器が宮ノ原遺跡から少し出土している。(註 7)。

弥生時代になると、安心院盆地を望む台地上にある宮ノ原遺跡において前期から中期の貯蔵穴群中期の甕棺・土坑墓、後期古墳時代前期の住居跡・甕棺・石棺が調査されている。小原南遺跡(註 8)から前期を中心とした貯蔵穴が出土している。同様の地形の上の原遺跡では銅剣が採集されていたが、近年中期の集落が調査されている。この他、常磐・園木・下山・重永遺跡からは弥生式土器が採集されている。西戸方遺跡(註 9)では弥生時代終末頃の石棺・石蓋土坑墓・土坑墓等と平安時代の土坑墓が出土した。古墳時代の遺跡では、畑古墳(円墳・消滅)や台古墳(円墳・横穴式石室・鉄斧・滑石製模造品)・戸方山横穴群などの墓地、散布地として園ノ木・下山遺跡がある。中世では日指城跡・鹿鳴越城跡や烽火の七ツ石遺跡がある。

以上、これまで知られている遺跡を簡単にみてきたように、この地域では北西部の安心院盆地周辺と北東部の八坂川中流域、南東部の別府湾周辺域に遺跡が多い。今回調査の対象となった北大道路・日出ジャンクションは、これまで遺跡の少ない地域と見られていた地域を通過しているわけである。

註 1 松本 康弘 「一般国道10号宇佐別府道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ」大分県教育委員会 1990

註 2 牧尾 義則 「九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(2)」大分県教育委員会 1990

註 3 牧尾 義則・江田 豊 「九州横断自動車道建設に伴う発掘調査概報・十文字原遺跡群」大分県教育委員会 1983

註 4 八幡一郎他 「早水台(39年調査)」大分県文化財調査報告書第10輯 1965

註 5 橘 昌信他 「稻荷山遺跡調査報告」大分県文化財調査報告書第18輯 1970

註 6 岩尾 松美・酒匂 義明 「速見郡山香町大字広瀬川原田洞穴の調査」大分県地方史34

第 3 章 各遺跡の調査

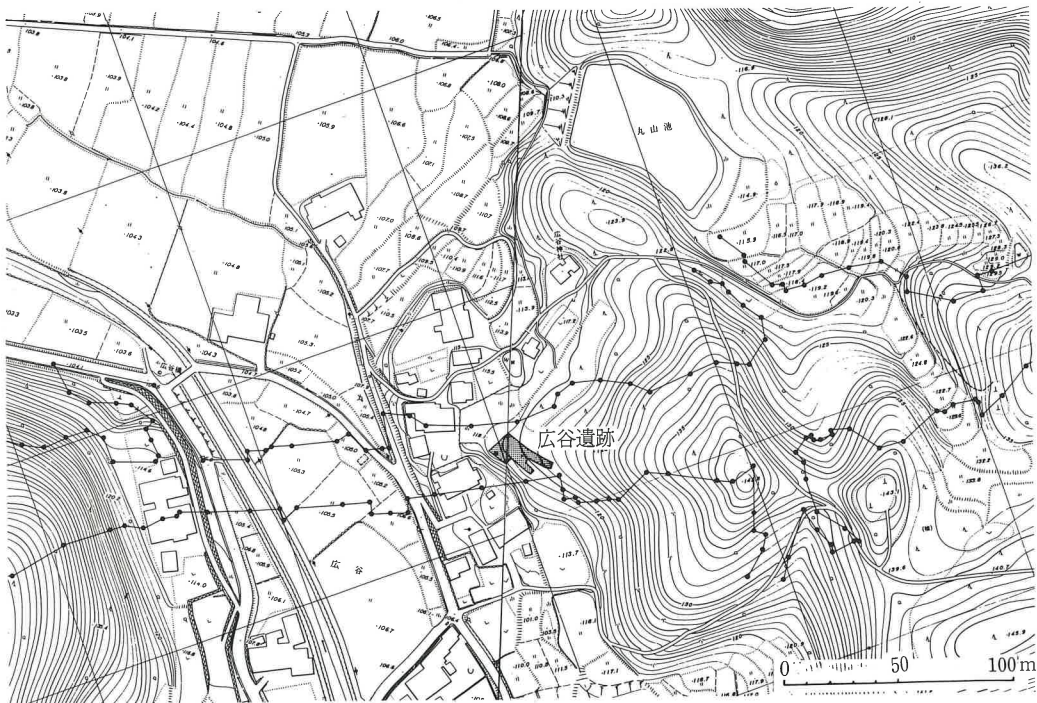
1 ひろ たに 広 谷 遺 跡

第 1 節 遺跡の立地と環境

駅館川の支流、広谷川と佐田川が佐田の沖積地で合流する地点を見下ろす丘陵端部に遺跡は立地する。北緯33°26、東緯131°24の宇佐郡安心院町大字広谷にあたる。

ここは、各時代の遺跡が集中する約2^{キロ}四方の盆地である安心院盆地の中心部から、丁度真東に3.7^{キロ}の地点である。

標高130^{メートル}は、沖積地から比高約20^{メートル}で東西に約1^{キロ}ほど延びる丘陵の北裾部を自動車道がかすめるため、谷部を除く丘陵上はほぼ調査対象となるが、遺構が検出されたのはその西端のみであった。本来、調査中は広谷H区と呼称していたが、他に遺跡が検出されなかったため、遺構の検出された部分のみを広谷遺跡とする。ここは、標高120^{メートル}で沖積地からの比高差は約10^{メートル}の地点にあたる。



第 1 図 広谷遺跡位置図 (1/3000)

周辺の遺跡としては、弥生時代から古墳時代の上の原遺跡や中村遺跡、中世の笹ヶ平遺跡などが知られる。さらに広谷遺跡のある丘陵の西側の上ノ原台地では、昭和39年に中広銅矛が7本発見されている。直線距離にして約1キである。

第2節 遺構と遺物

約600㎡ほどのテラス状の部分が調査対象となるが、中世に属する土壌墓1基の他は、近代の溝1条、時期の不明な溝2条が検出されたのみであった。

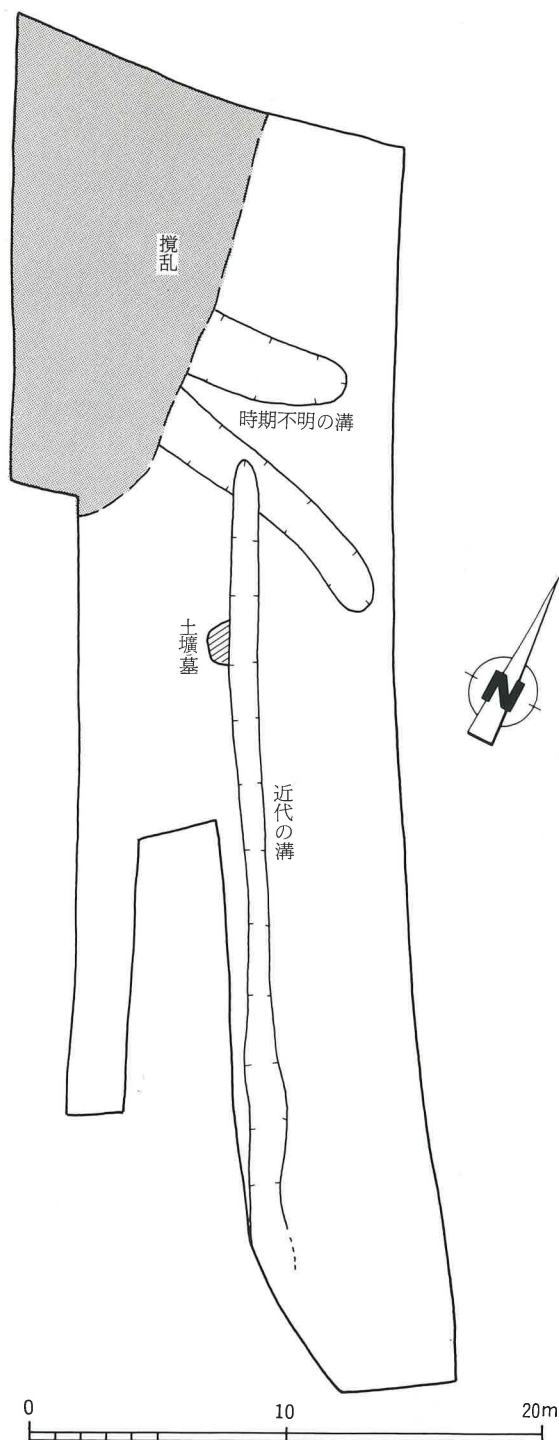
土壌墓（第3図）は、後世の溝によって一部破壊されているが、残存長約1.6㍍×1.1㍍、推定で径約1.6㍍のほぼ円形を呈すると考えられる。深さは検出面から30㌢である。

遺物は、瓦器坏3、銭貨10枚、不明鉄片1である。

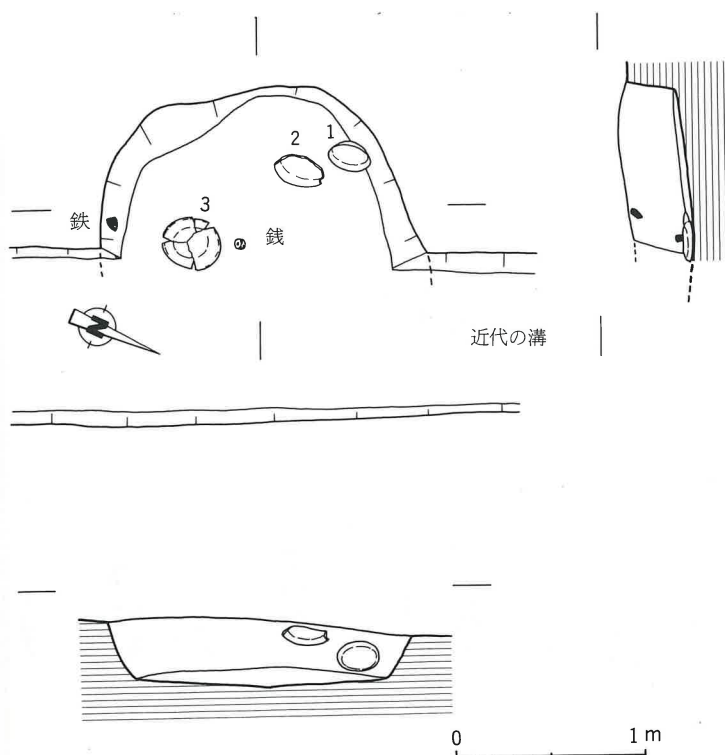
瓦 器（第4図1～3）

1は口径13.2㌢、器高3.0㌢。底部は糸切り放しで板状圧痕を付す。胎土は赤色粒、礫を含むが良好。2は口径13.8㌢、器高2.7㌢。内外面とも摩耗が激しいが、底部に僅かに糸切りの痕跡が窺える。胎土には赤色粒、礫、角閃石を含む。3は口径13.2㌢、器高2.9㌢。内外面とも摩耗が激しく、底部の切り離しは不明。胎土は赤色粒、礫を含む。

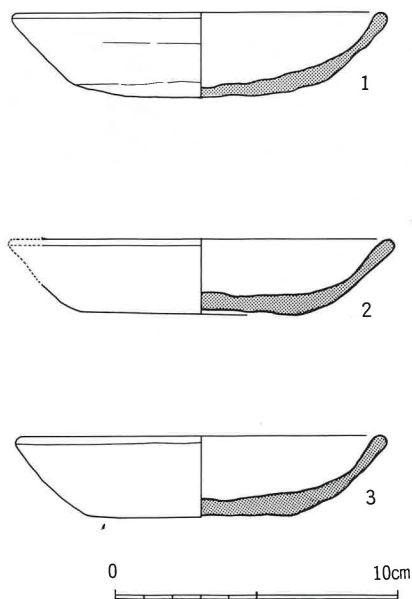
1から3は同形態の瓦器で、平安時代から続く瓦器碗の最終形態と考えられる。



第2図 広谷遺跡遺構配置図 (1/300)



第3図 広谷遺跡土墳墓 (1/40)



第4図 広谷遺跡土墳墓出土瓦器 (1/3)

銭貨

(第5図1～10)

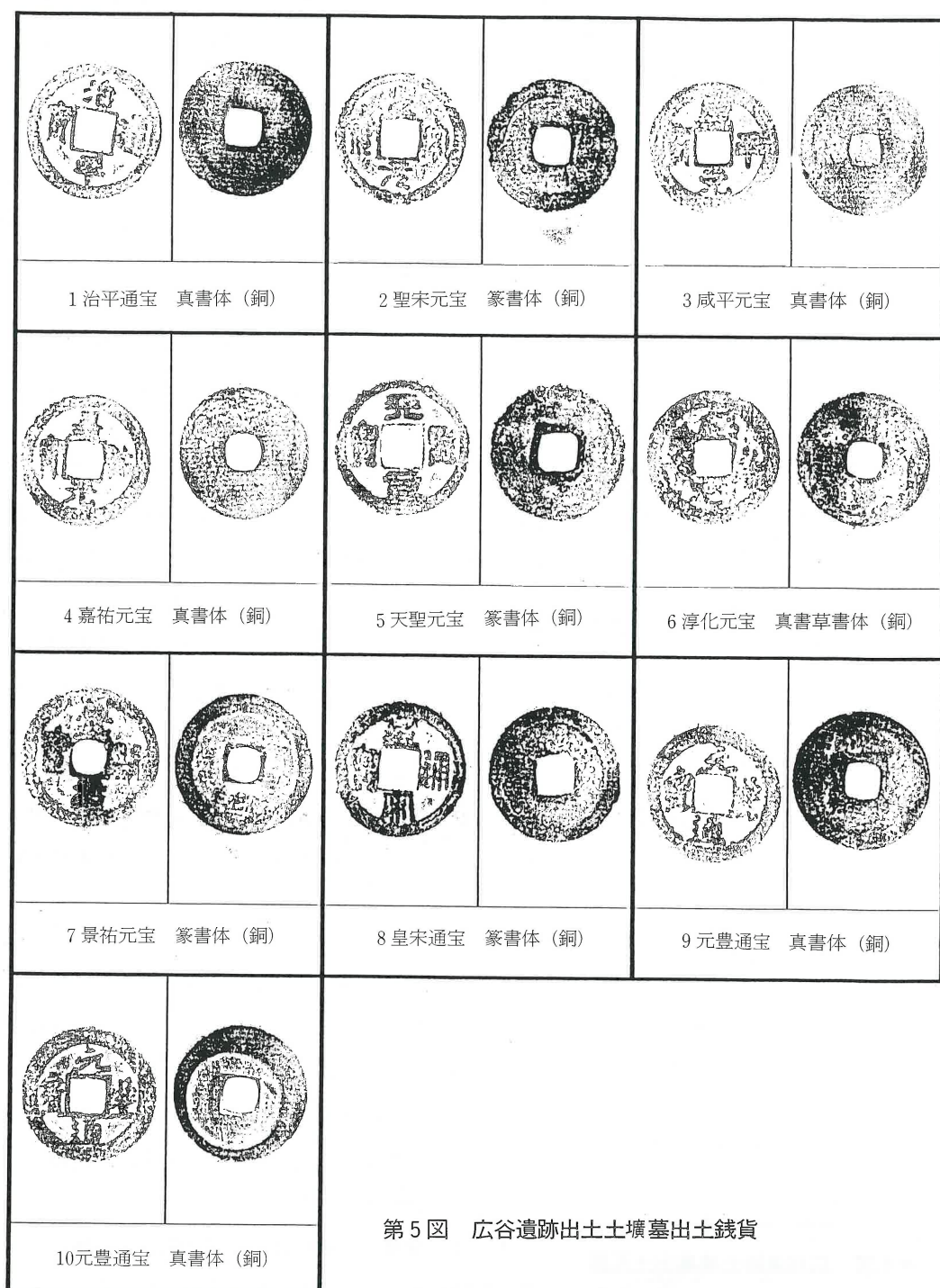
1は治平通寶で保存状態は良く刻字の判読は容易である。2は聖宋元寶で保存状態はやや悪いが刻字の判読は可能である。3は治平通寶で保存状態はやや悪く、特に「銅」の部分の判読困難である。4は嘉祐元寶で保存状態はやや悪いが刻字の判読は可能である。5は天聖元寶で保存状態は良く、刻字の判読は容易である。6は淳化元寶で保存状態はやや悪いものの刻字の判読は可能で

あるが、もともとの鑄造状態が悪く刻字が時計まわりに約25°ずれている。7は景祐元寶で保存状態は悪く刻字の判読は困難である。8は皇宋通寶で保存状態は良く、刻字の判読は容易である。9は元豐通寶で保存状態は良く刻字の判読は容易である。10は元豐通寶で保存状態は良く刻字の判読は容易である。

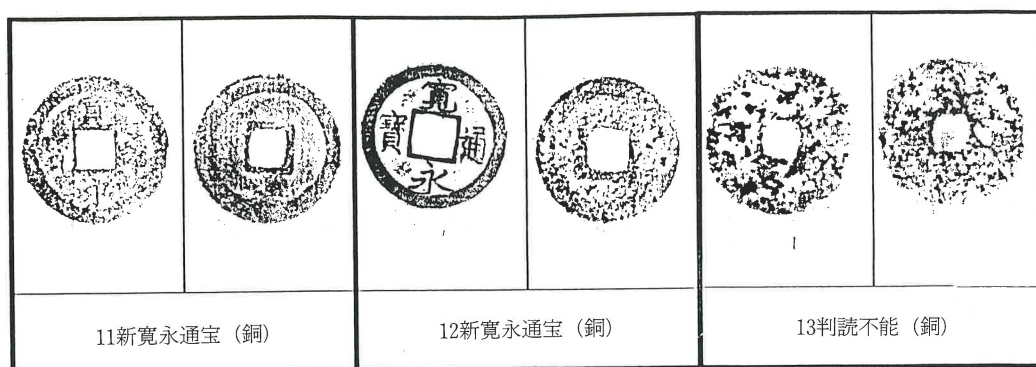
これらの銭貨は一般に六道銭と呼ばれるものである。九州地方における六道銭は中世墓からの出土はあまり多くなく同様の近世墓と比べると半数にも満たない(墓の数ではなく遺跡数)。また六道銭はその名の通り6枚セットで副葬される例が多く、全国の発掘例の中でも42%以上を占めている。逆に10枚以上副葬されている例は11%程度である。

また本土墳墓出土銭貨は、全て北宋銭で初鑄年の年代(西暦990～1101年)も比較的集中している。これが

偶然であるのかそれとも埋葬者の意図が存在しているのかは不明である。さらにこれらの銭貨から想定される遺構の年代は12世紀初頭以降であり、瓦器の年代とも矛盾しない。



第5図 広谷遺跡出土土墳墓出土銭貨



第6図 広谷遺跡出土銭貨

（銭貨の項後藤幹彦氏執筆）

第3節 ま と め

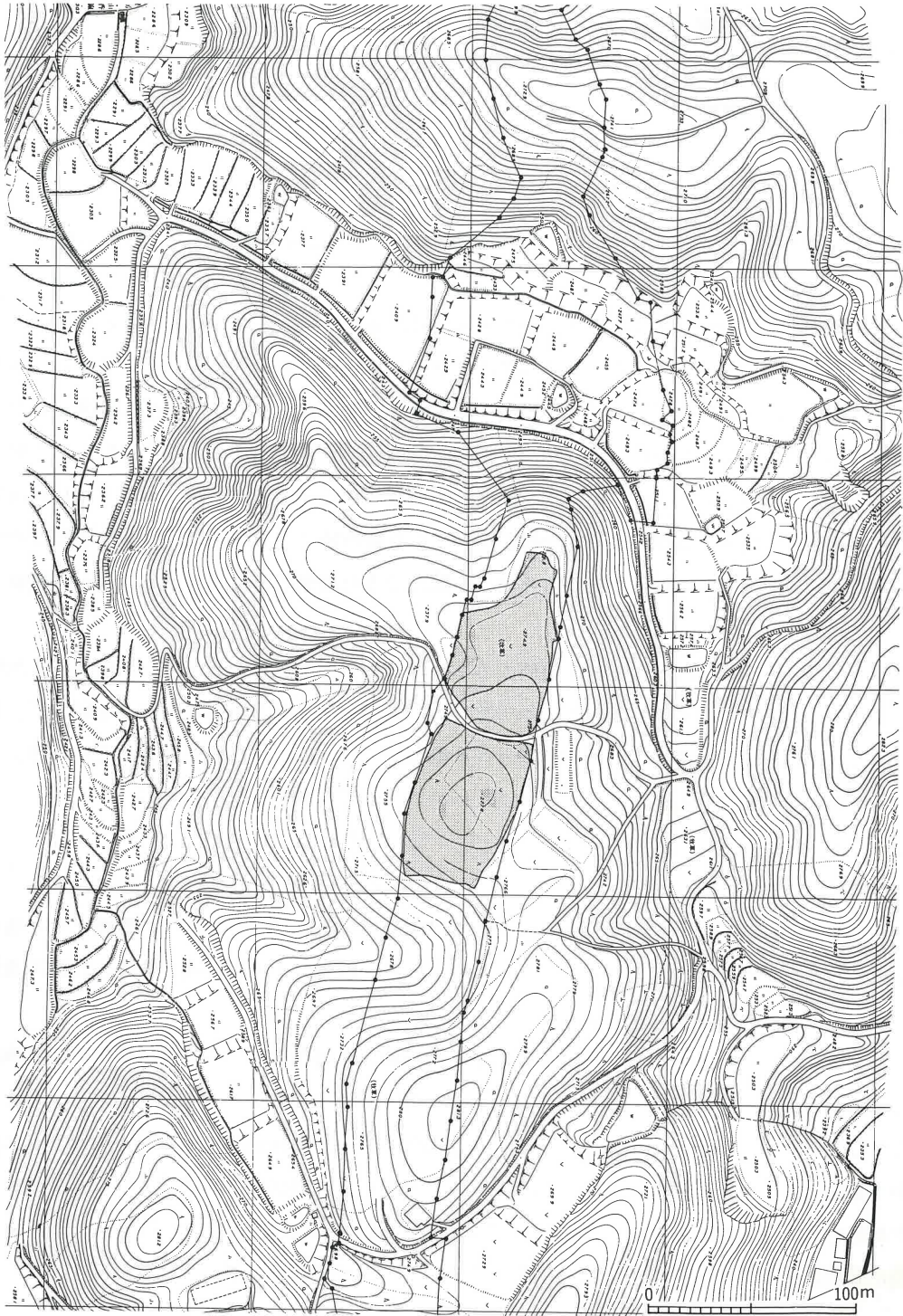
丘陵上は平坦地が少なく、全く遺構は検出されなかった。唯一丘陵西端斜面のテラス状の部分で、中世の土壇墓が1基発見された。これも後世の造成によりテラスを作りだしているとしたら、他に遺構が存在した可能性もあり、遺跡の性格を云々するのは憚られる。しかし、この地が居住地でないことは確実であり、一般的に言って居住地背後の墓地とする事はできそうである。

土壇墓は壁の被熱の痕跡は認められず、規模から言って土葬墓である。副葬品には10枚のいわゆる六道銭と、瓦器坏3がある。瓦器は終末形態を示しその年代観は15世紀代である。一方六道銭として埋納された銭貨は全て北宋銭で、瓦器の年代観とは大きな開きがある。瓦器の年代観が動かないかぎり、六道銭の選定にあたって何らかの意図が働いたと見做さざるを得ないであろう。

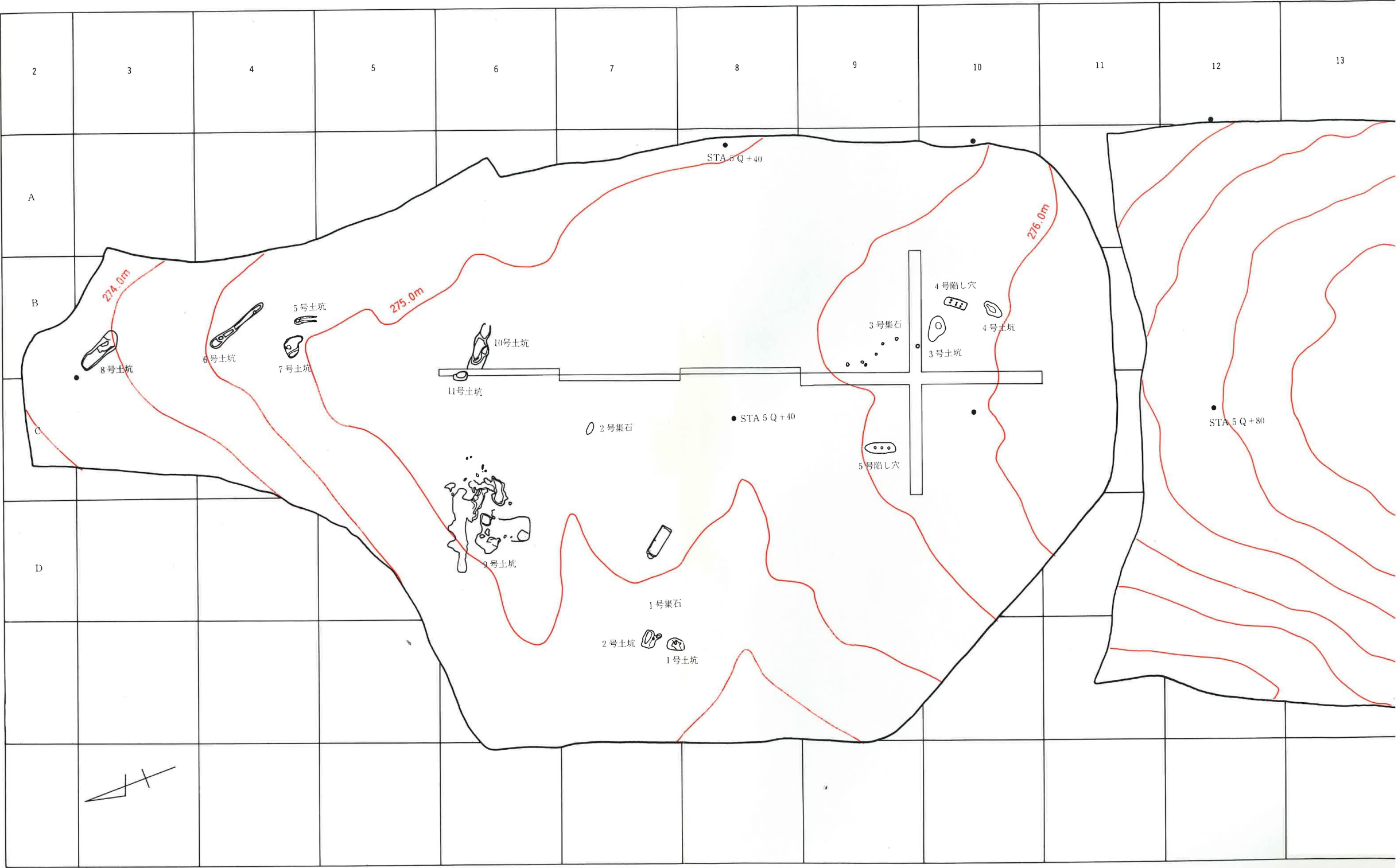
註1 櫻木 晋一 「九州地方における中・近世の銭貨流通－出土備蓄銭・六道銭からの考察－」

『九州文化史研究所紀要』36号 1991年

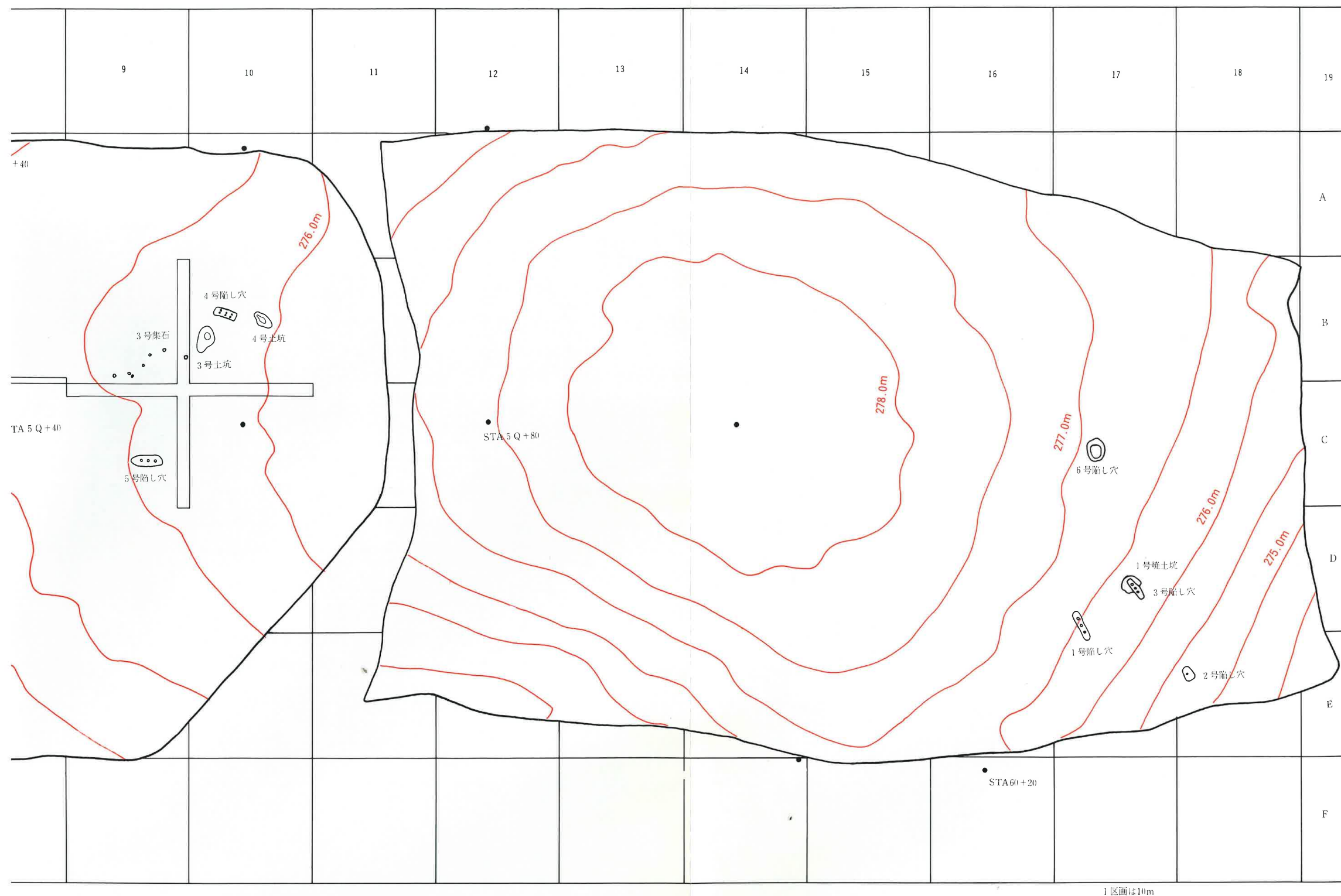
註2 鈴木 公雄 「多数の銭貨を有する六道銭について」『史学』□号 1993年



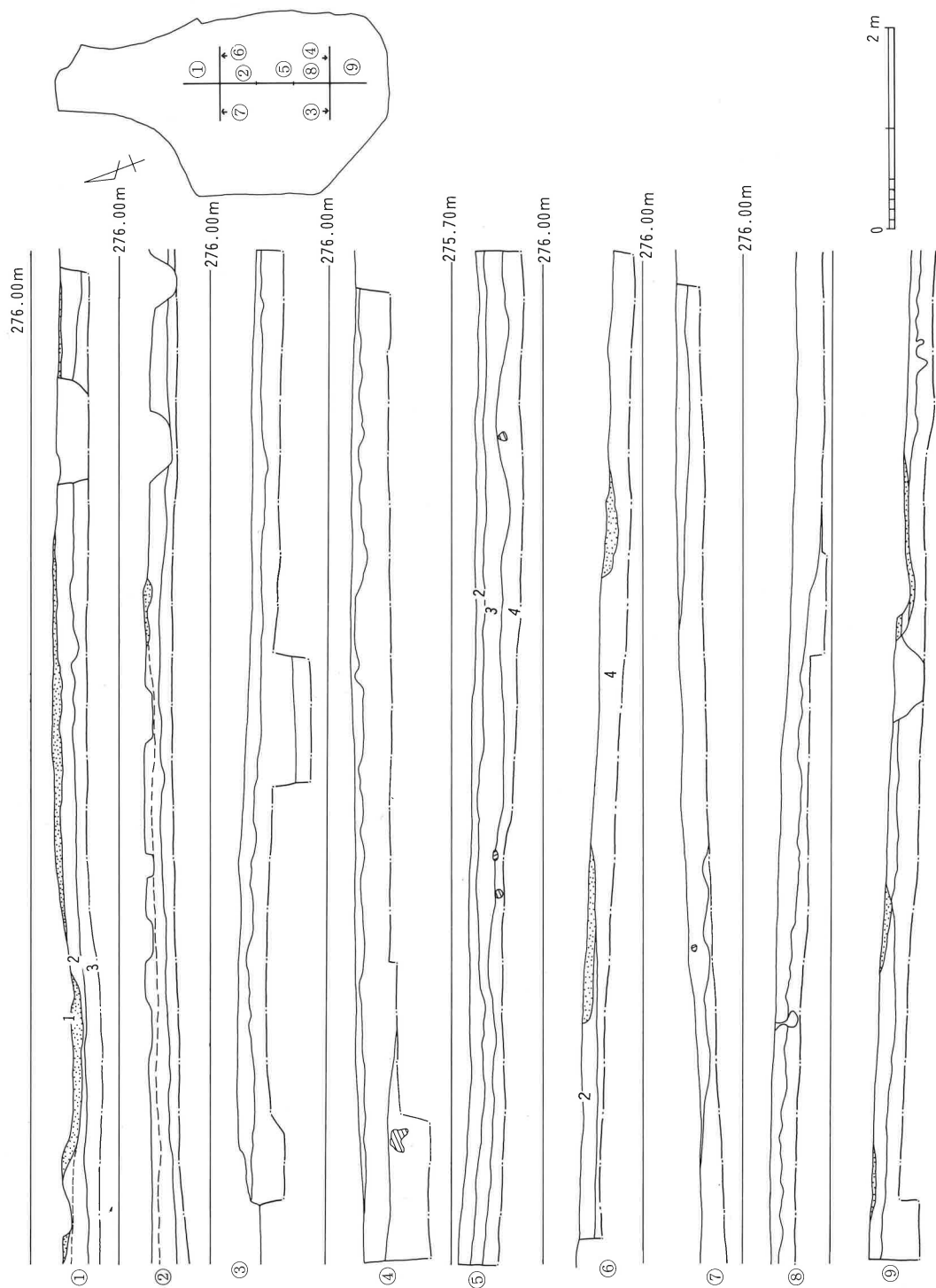
第1図 口野尾遺跡の調査区位置図



第3図 口野尾遺跡の遺構配置図



第3図 口野尾遺跡の遺構配置図

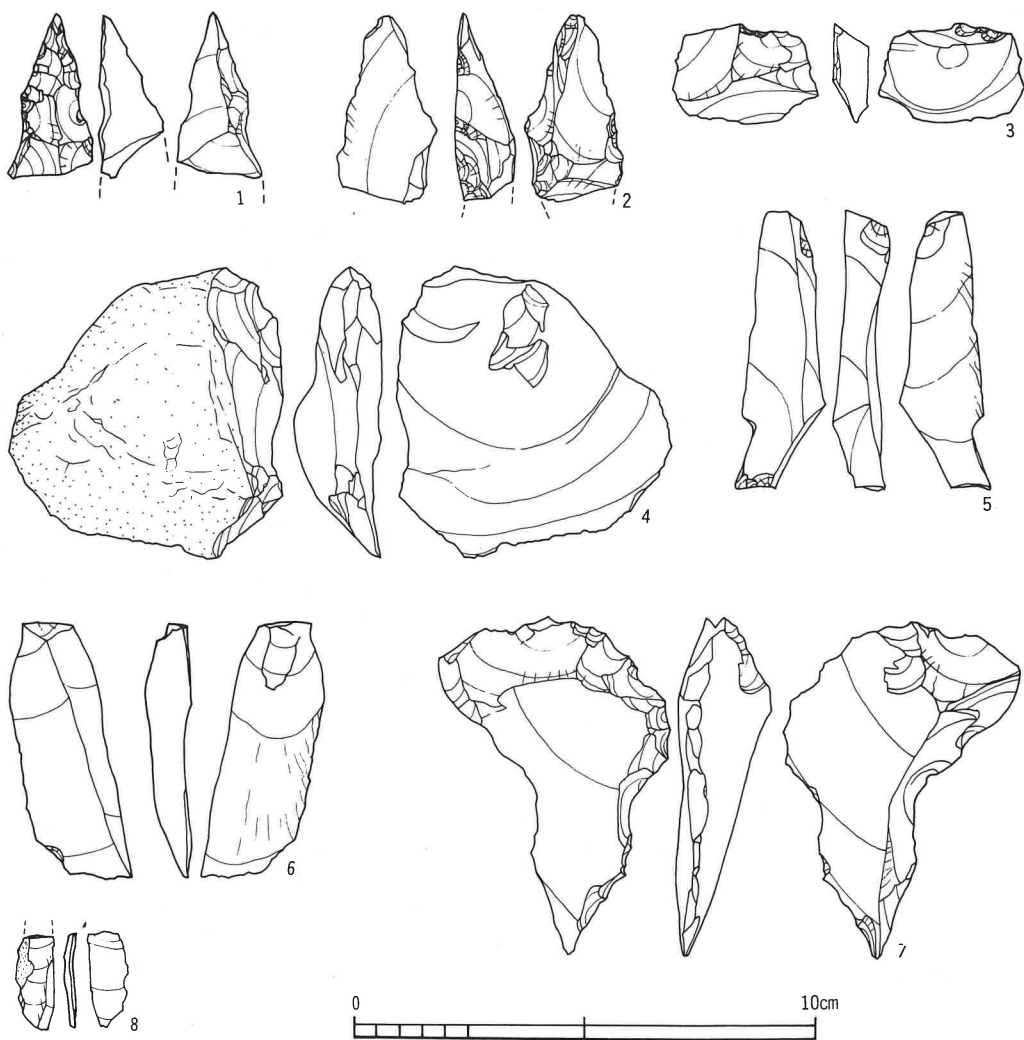


第2図 口野尾遺跡の土層図

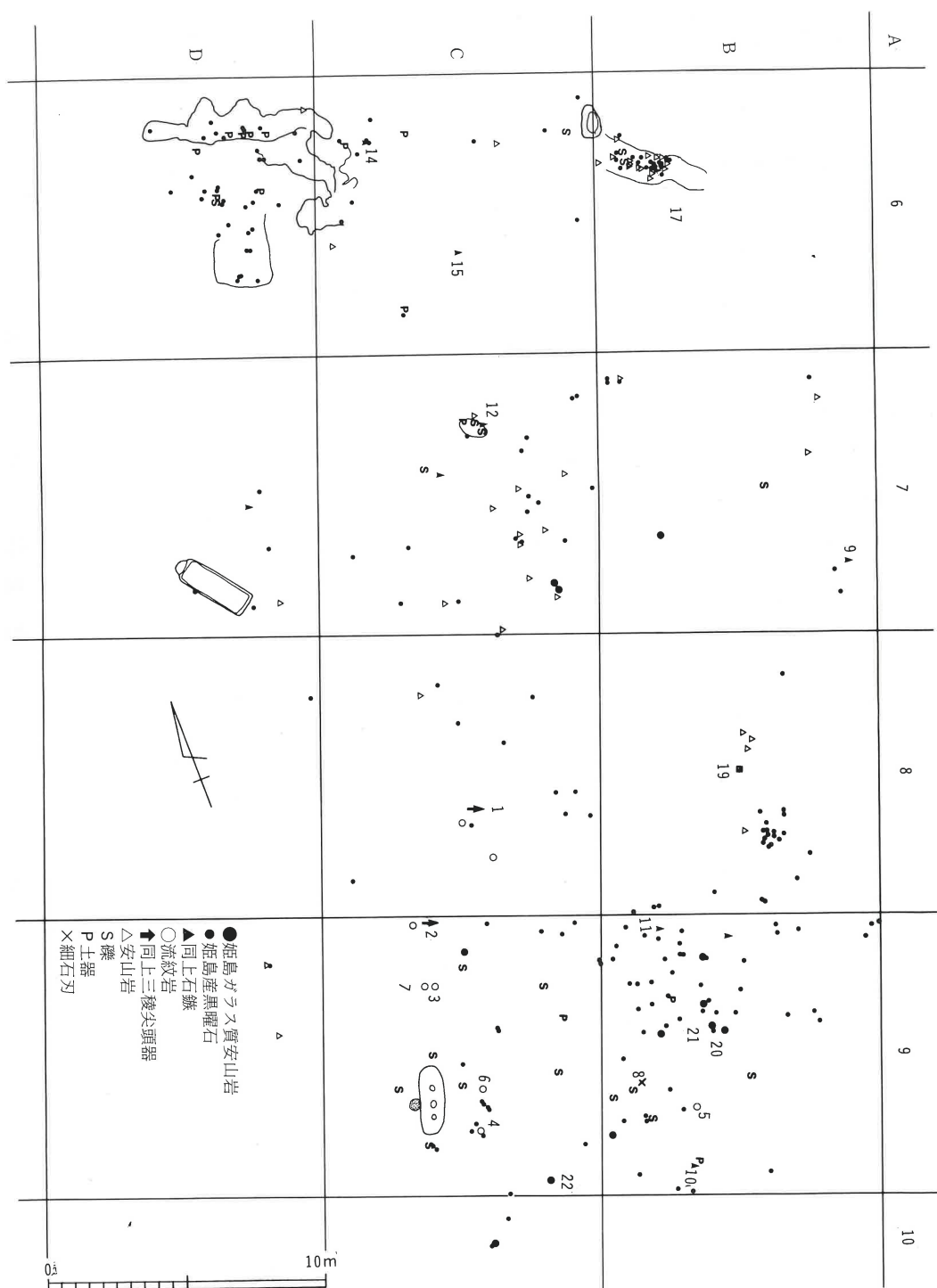
第2節 検出した遺構と遺物

1. はじめに

調査の結果検出した遺構は集石3・土坑11・陥し穴6・焼土坑1・炭焼き窯1があり、A・B両地区に分布していた。これらは縄文時代・弥生時代・近世のもの等である。遺物はこれらの時期のもののほか、旧石器時代の石器が出土している。遺構のなかには時期の明白でないものが少なからずあるので、旧石器・各遺構の順に説明していく。



第4図 口野尾遺跡の旧石器



第5図 口野尾遺跡の遺物分布図

2. 旧石器 (第4図1～8) (表1)

旧石器時代の遺物として扱うのは、流紋岩を石材とする石器類と黒い黒曜石製の細石刃である。合わせて11点出土している。分布範囲は8C区(3点)・9C区(6点)・9B区(2点)だけであり、特に9B区中央部に横長に集中する。第2層が旧石器包含層である。

三稜尖頭器 (第4図1)

三稜尖頭器が1点出土している。1は利用した剥片の打点が生ずるような形に調整し、その剥片の主要剥離面側からの二次調整を行って断面三角に整えている。

ナイフ形石器 (第4図2)

ナイフ形石器も1点出土している。2は横長の剥片を調整し、片側の側縁部全体に刃潰し加工をおこない反対側の側縁は基部近くに調整加工を加えている。

使用痕のある剥片 (第4図3～6)

使用痕のある剥片が4点出土している。3は横長の剥片である。打面には打面調整のような小剥離がふたつある。4は厚く幅広い剥片で、片面に原礫面を残す。打面は単一の面をなす。5は縦長の剥片で断面は三角形となる。裏面にはこの剥片の主要剥離面とは反対方向からの打撃による二つの剥離面がある。6は単一の剥離面を打面とし、やや斜め方向に縦長となった剥離片である。主要な剥離面および反対側にある二つの剥離面はどれも同じ方向からの打撃を加えられた結果である。

二次加工のある剥片 (第4図11)

二次加工のある剥片が1点出土した。7は厚い剥片に対して主に主要な剥離面とは反対側から二次加工を加えて整形した剥片石器である。打点とは反対のほうを尖らせている。

細石刃 (第4図8)

8は黒い黒曜石製の細石刃である。片面には一部原礫面を残し上方向からの打撃による剥離面が二つある。主要剥離面の剥離もやはり上方向からの打撃によっている。打点側の上端は折れている。

3. 集石遺構 (第6図)

集石遺構は3基検出した。いずれもA地区の中央部から東・南に分布していた。1号集石は7D区の南部の第2層で検出したもので、29個の石が同一レベルに集中したものである。一般的な縄文時代早期の集石遺構とは思いが、土器や石器の伴出がなく層位的にも旧石器時代のものとの区別ができなかった。2号集石は7C区で検出した。4個の石と土坑から成り立つ。平面形は楕円形で長さ115cm・幅53cm・深さ9cmと浅い。土坑の内部に4個の8cm大の石が、すぐ外側に1個あった。3号集石は9B区にあり16個の石からなる。特に分布の中央部には11～12個の石が集中する。

4. 土 坑 (第7～9図)

土坑は11基あるが調査時点で縄文時代のものと理解していたものがA地区の南部とB地区寄りに計4基ある。

1号土坑と2号土坑はA地区の南部、1号集石遺構のすぐ南側において検出した。1号は長さ148cm・幅95cmのいびつな楕円形で、床面の中央部分は一段低く検出面からの深さは約40cmである。

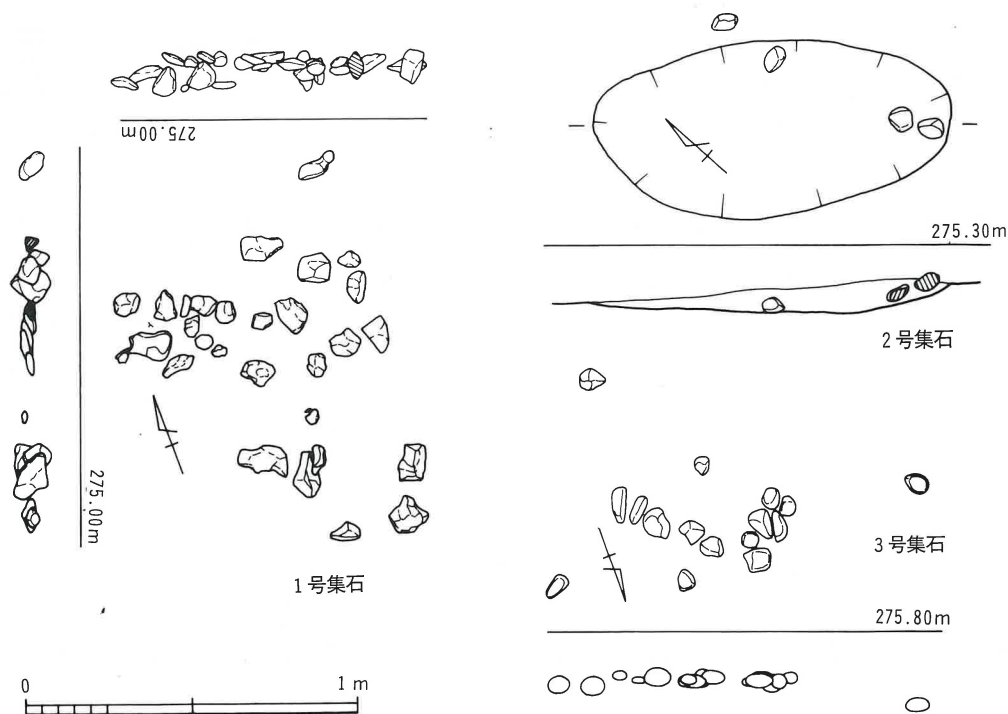
2号土坑は長さ145cm・幅7約80cmの部分とそれより浅い南側の張り出し部からなる。内部に自然礫2個があった。

3号土坑と4号土坑は10B区にて検出した。3号は長さ224cm・幅120cm・深さ14cmの楕円形の平面をしている。

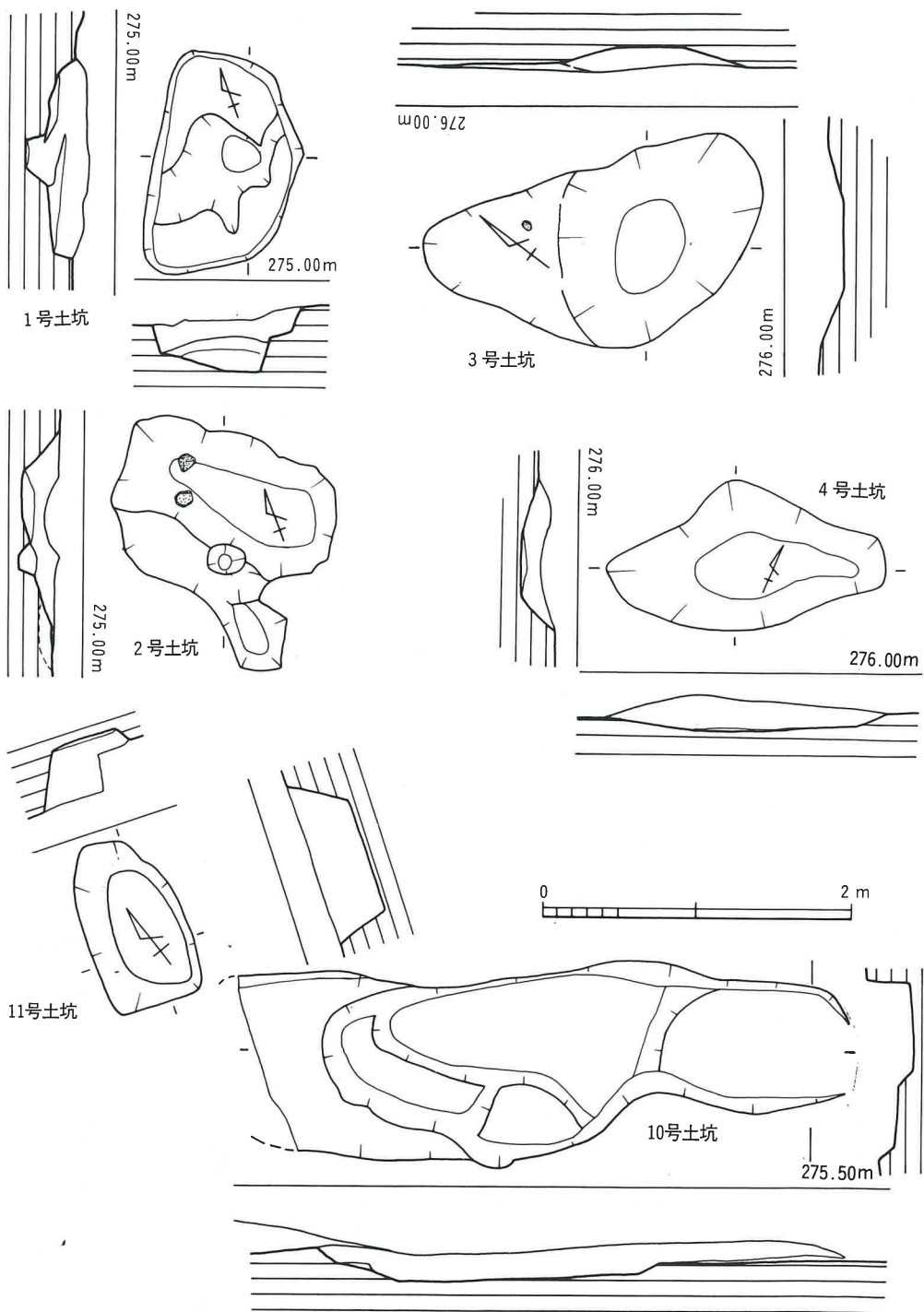
4号は包含層の掘り下げ途中に見つけたものであるため、断面図に見るとおり片側が一段低くなっている。長さ182cm・幅98cm・深さ23cmの規模をもつ。

5号土坑は4B区にあり細長い楕円形の遺構である。長さ240cm・幅50cm・深さ20cm。自然礫1個が埋土から出土した。

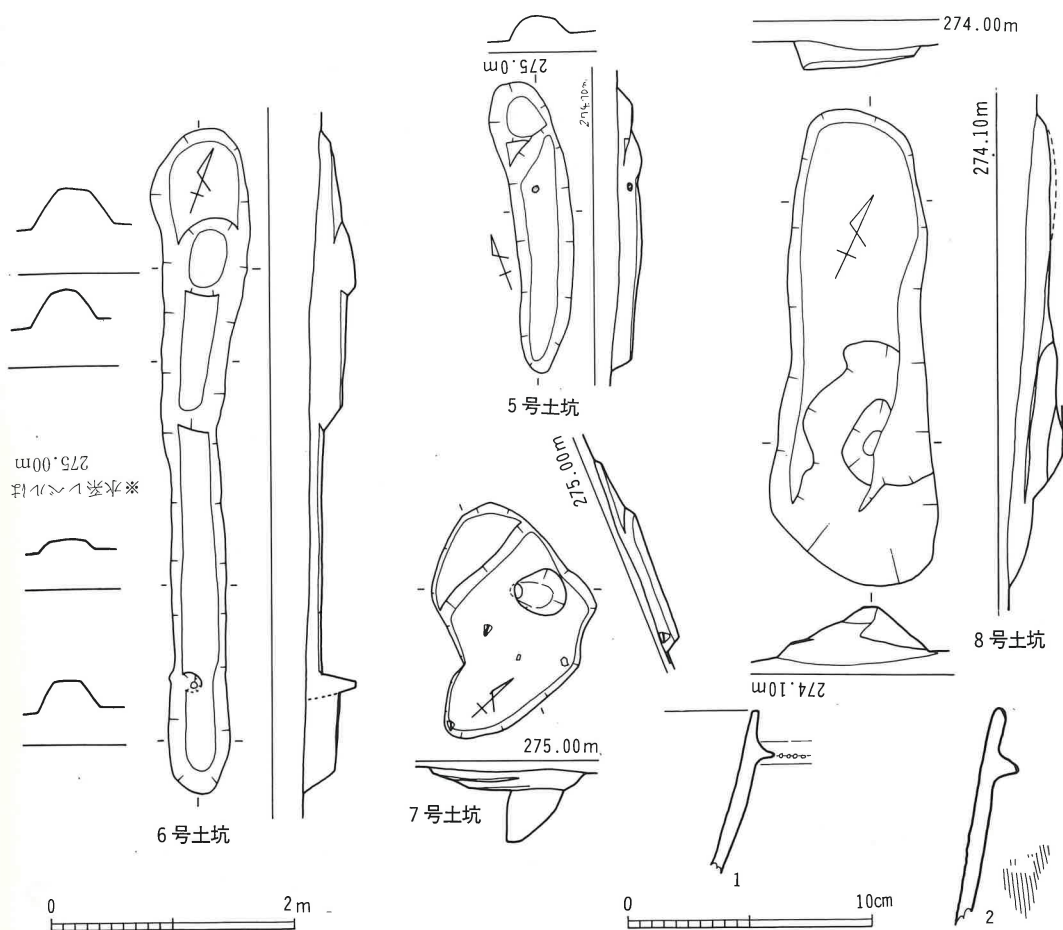
6号土坑は4B区の西の方にあり細長い南部には後から掘り込まれた小さな穴が一つある。長さ544cm・幅は北部で80cm・中ほどで46cmある。



第6図 口野尾遺跡の集石遺構



第7図 口野尾遺跡の土坑

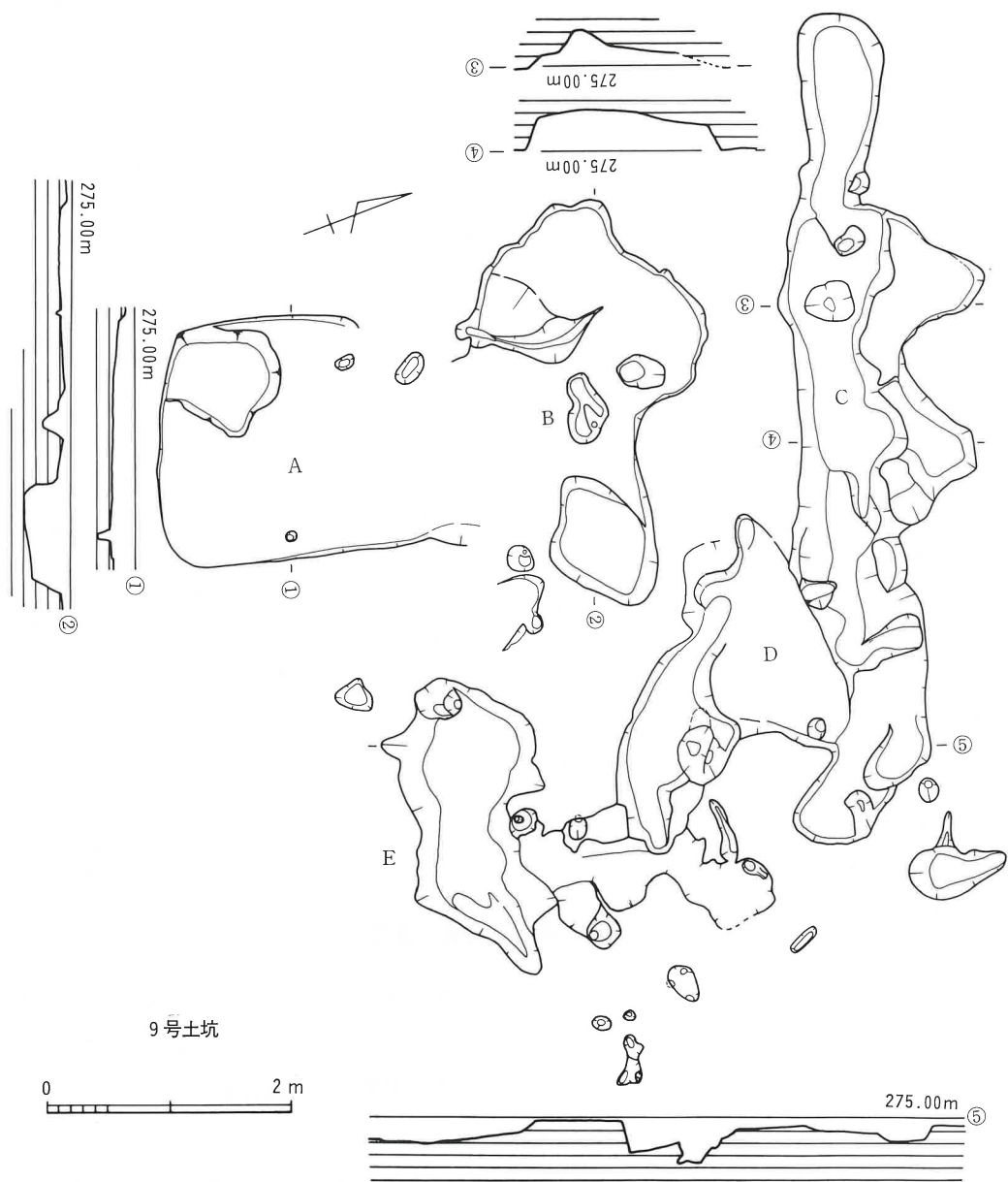


第 8 図 弥生時代の遺構と遺物

7号土坑は4B区にあり、5号土坑のすぐ南側にあたる。深さ16cmの浅い床面に一つ穴が開いている。7号土坑から出土したのが第8図の1・2である。1・2とも器面の残り具合が良くなく、2の外面に刷毛目痕が見えるだけである。1の突帯の刻み目は細かくまた接近しているが、2では大きな刻み目が離れて施文されている。

8号土坑は3B区にあり平面形は楕円で、床面の北半分は平坦で片方は落ち込む。長さ389cm・幅136cm・深さ41cmである。

9号土坑は6C～6D区に広がる不整形の土坑群(A～E)の集中した部分を一括した。Aは方形状を呈するが北辺は自然消滅していた。東西200cm・南北274cm以上の規模である。南西部の穴は発掘ミスである。床面は平らで埋土から弥生時代らしい土器細片が出土した。他の土坑からは姫島産黒曜石片が出土した程度で土器は出土しなかった。10号土坑は6B区にあり南側はトレンチが壊れている。現状では長さ397cm・幅120cmで、深さは北部で13cm・中央部分ではさらに6cmほど低くなる。姫島産黒曜石の碎片が出土した。



第 9 図 口野尾遺跡弥生時代の遺構

11号土坑は東部をトレンチで壊したが、楕円形で長さ111cm・幅65cm・深さ35cmである。

5. 陥し穴 (第 4・5 図)

A地区南部の尾根部分で2基、B地区南部の斜面で4基の陥し穴を検出した。4号陥し穴から打製石鏃1点が出土したほかには陥し穴の埋土から遺物は出土しなかった。

1号陥し穴（第10図）

17D・E区の境界にあり、4 m70cm南東にある3号陥し穴と同様に等高線とは直角方向に主軸を向けている。長さ242cm・幅97cm・床までの深さ82cm。上面は長楕円形、床面は中凹みの長方形である。床に3個の小穴があり内部に北側のものから順に13・7・16個の石があった。石は小穴の壁際にぐりりと取り囲むように出土し、中心部には棒状のものを差し込めるだけの空間があった。

2号陥し穴（第10図）

18E区にあり、長軸は谷の方を向いている。平面は長方形で長さ115cm・幅81cm（垂直に立ち上がる部分では60cm）・深さ87cmを測る。床面中央に小穴1がある。

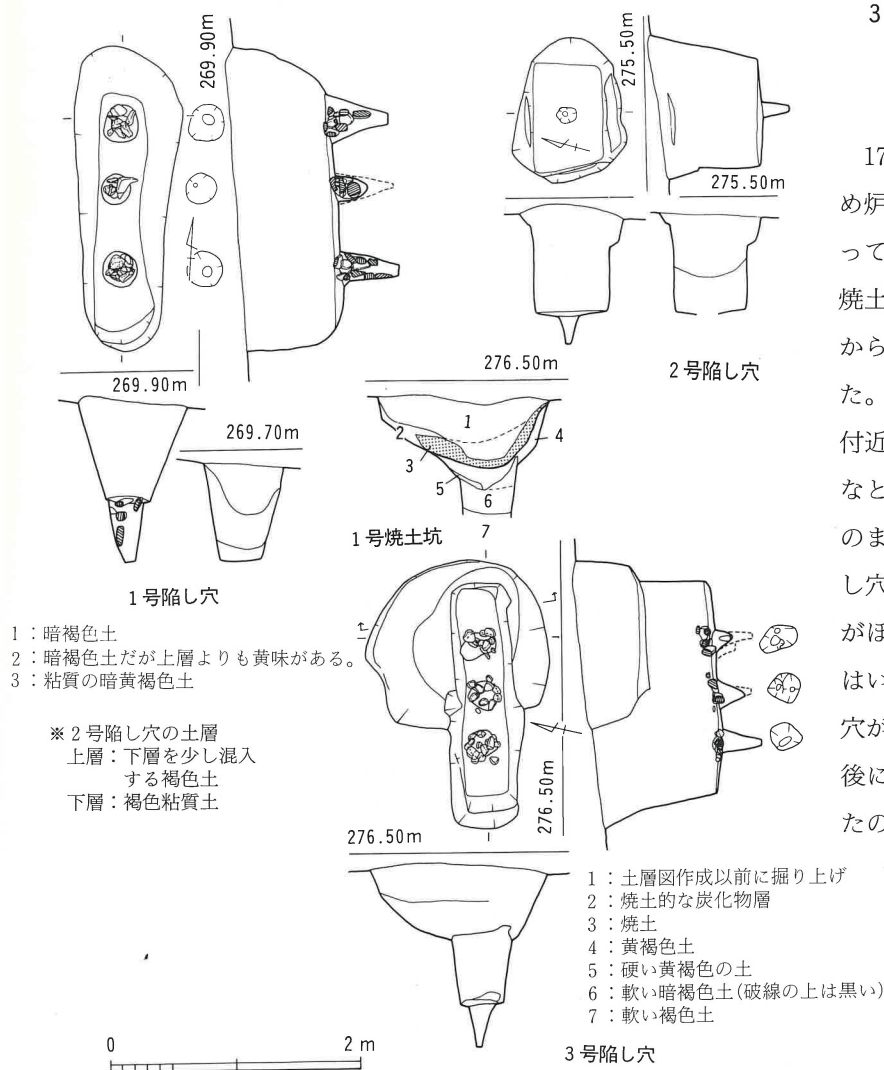
3号陥し穴

（1号焼土坑）

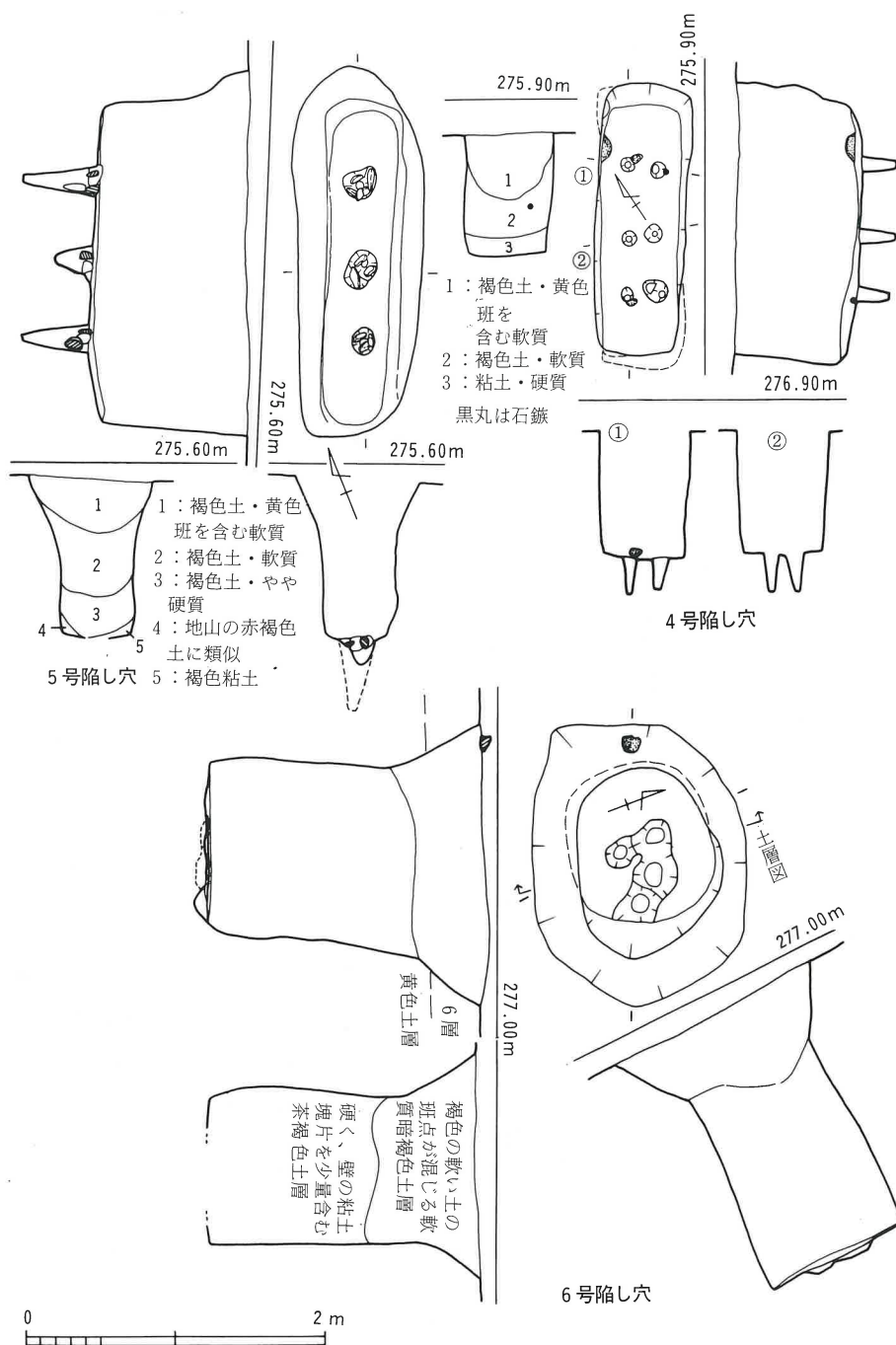
（第10図）

17D区にある。初め炉穴であろうと掘って行ったところ、焼土のある土坑の下から陥し穴を検出した。土層断面の接点付近に矛盾するようなどころがあるがそのまま図化した。陥し穴の西半分は上部がほとんど崩壊してはいないから、陥し穴が完全に埋没した後に焼土穴が掘られたのであろう。陥し

穴は平面が長方形で、長さ194cm・幅60cm・深さ105cmである。床には3小穴があ

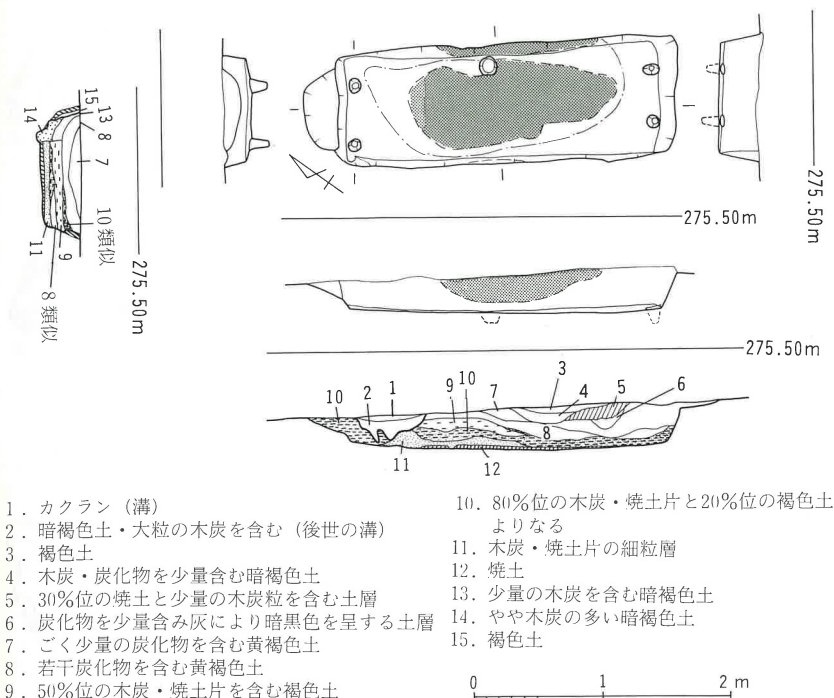


第10図 口野尾遺跡の陥し穴と焼土坑



第11図 口野尾遺跡の陥し穴

り、東から12・11・14個の石が床面付近で出土した。1号では内部に配置したのに対し、3号の場合は小穴の内部には入り込まずに底面あるいはやや上に位置する点が異なる。



第12図 口野尾遺跡炭焼遺構

4号陥し穴

(第11図)

10B区にある。平面は長方形で、長さ191cm・幅60cm・深さ83cmである。床面には2個ずつ3ヶ所に他例よりもさらに小さい穴が2列に並ぶ。小石2個が床面に乗った状態で出土した。壁際のやや大きい石は遺構とは無関係であ

る。また、第12図5の打製石鏃が出土した。

5号陥し穴 (第11図)

9C区にある。上面・床面とも長楕円形で、長さ247cm・幅90cm・深さ105cmである。床面に小穴があり、1号同様の石が出土した。北から5・3・3個である。

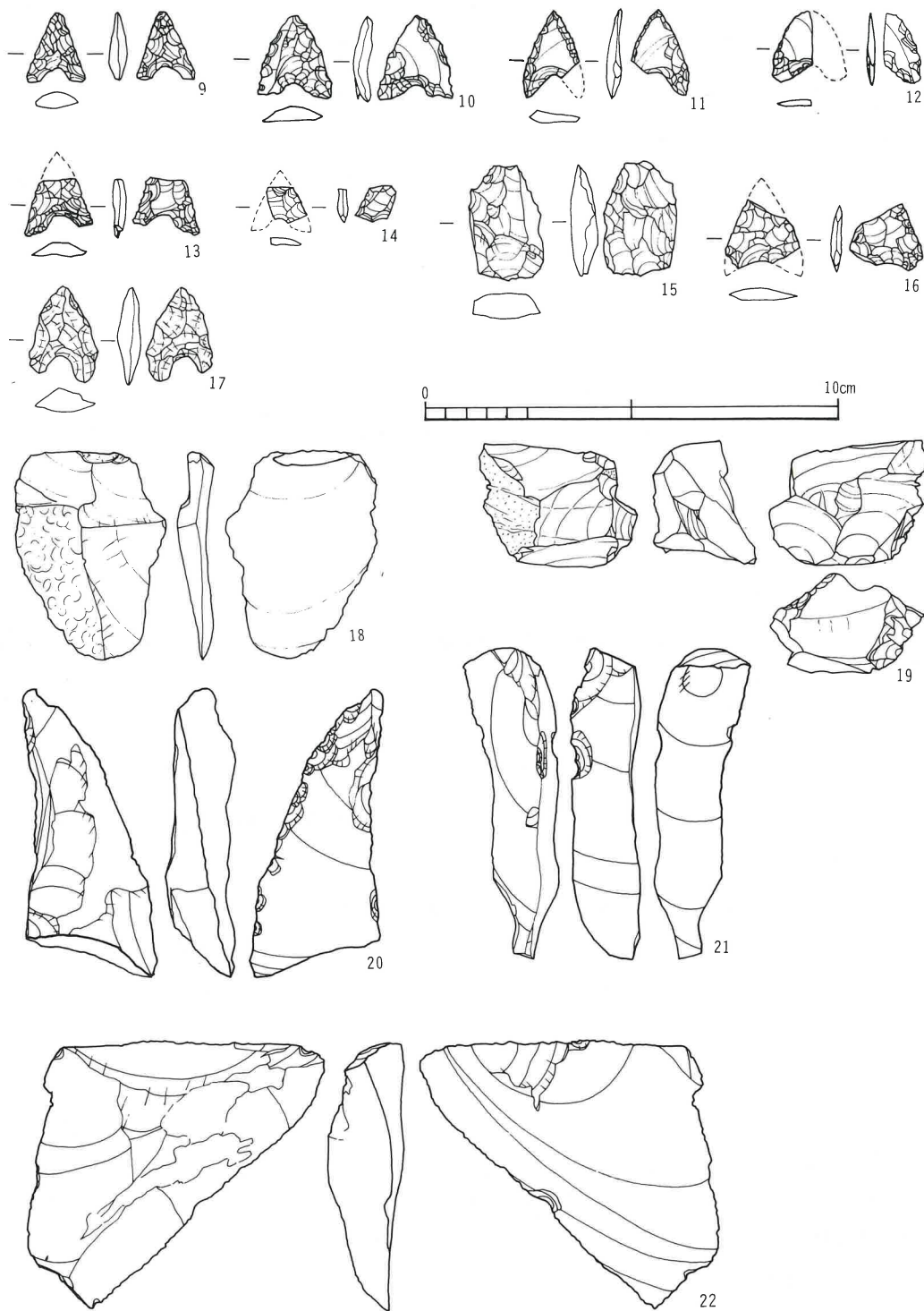
6号陥し穴 (第11図)

17C区にある。円形だが東西方向にやや長い。上部は崩落して開くが本来の壁の部分の長さは126cm・幅96cm・床までの深さ188cmである。床面に浅い凹み4個がある。床から10cm位は湧水層で、完掘後は上面近くまで水が溜まった。

6. 炭焼遺構 (第12図)

7D区で検出した土坑である。形態は基本的には長方形で、北側の短辺の外側には反円形の傾斜部となる。床面の両短辺の壁際には径10cm前後で深さが15cm前後の小穴が4個、東側長辺の中央部壁際にも径14cm・深さ7cmの穴がある。長方形部分は長さ266cm・幅98cm・深さ34cmである。内部には木炭や焼土が層をなしていた。床面の中央部と東壁の中程は熱によって硬化し(破線部)、周辺は赤変(1点鎖線)していた。

床には棒状の木炭片が少量残っていたので、この遺構の性格は炭焼き窯であろう。



第13図 口野尾遺跡の石器

7. 縄文時代・弥生時代の石器（第13図9～22）

第2層からは縄文時代や弥生時代のものと考えられる石器が出土した。18以下の石器については旧石器時代に遡る可能性も否定できないが、石材を考慮してここで扱った。

石 鏃（第13図9～17）

石鏃は9点出土した。8点が姫島産黒曜石で、1点だけ安山岩製がある。全体としてみたとき縄文時代の鏃よりもやや大きいという特徴を指摘できるだろう。15は石鏃の未製品である。

石 核（第13図19）

19は姫島産黒曜石製の石核である。一部に原礫面を残す厚い剥片の主要剥離面から剥片を採っている。

二次加工のある剥片（第13図20）

20は剥片の打点側に二次加工を行い尖らせた削器である。姫島産のガラス質安山岩。

使用痕のある剥片（第13図18・22）

18は安山岩製の剥片で縁片部に細かい使用痕の刃潰れがある。22は長い3辺に使用痕が残っている。これも姫島産ガラス質安山岩。

剥 （第13図21）

21は断面三角形の縦長剥片で打面は単一面をなし、他の2面も同じ方向の打撃によって剥離されている。使用痕は認めない。

表1 口野尾遺跡出土石器観察表（単位はcm・g）

図-No.	出土区	出土層	器 種	計 測 値				石 材	備 考
				長さ	幅	厚 さ	重 量		
第4図1	8 C	2	三稜尖頭器	3.5	1.8	1.35	4.5	R	
〃 2	9 C	〃	三稜尖頭器	4.0	2.15	1.3	7.6	R	
〃 3	9 C	〃	剥 片	2.1	3.15	0.75	4.6	R	
〃 4	9 C	〃	剥 片	6.2	5.95	1.85	60.6	R	
〃 5	9 B	〃	剥 片	5.9	1.7	1.2	8.6	R	
〃 6	9 C	〃	剥 片	5.5	2.0	1.0	10.8	R	
〃 7	9 C	〃	削 器	7.2	5.0	2.0	37.7	R	
〃 8	9 B	〃	細石刃	2.05	8.0	2.0	0.2	O	
第13図9	7 B	〃	石 鏃	1.65	1.3	0.42	0.6	HO	
〃 10	9 B	〃	〃	2.05	1.75	0.29	0.9	HO	
〃 11	9 B	〃	〃	2.05	1.4	0.34	0.7	HO	
〃 12	7 C	〃	〃	1.6	0.95	0.17	0.3	HO	
〃 13	10 B	〃	〃	1.25	1.6	0.32	0.6	HO	4号陥し穴出土

図-No	出土区	出土層	器 種	計 測 値				石 材	備 考
				長さ	幅	厚 さ	重 量		
第13図14		2	石 鏃	0.85	0.9	0.25	0.2	HO	
〃 15		〃	〃	2.75	1.8	0.67	3.4	HO	
〃 16	6 B	〃	〃	1.6	1.7	0.34	0.8	HO	
〃 17	6 B	〃	〃	22.5	1.65	0.55	1.5	An	
〃 18		〃	剥 片	5.1	3.6	0.95	11.4	An	
〃 19	8 B	〃	石 核	3.7	3.2	2.35	20.6	HO	
〃 20	9 B	〃	剥 片	6.95	3.2	1.7	25.3	HG	
〃 21	9 B	〃	剥 片	7.4	2.0	1.7	20.5	HG	
〃 22	9 C	〃	剥 片	6.5	7.3	1.9	53.3	HG	

※ R (流紋岩)・O (黒曜石)・HO (姫島産黒曜石)・An (安山岩)

・HG (姫島産ガラス質安山岩)

第3節 ま と め

口野尾遺跡から検出した遺構について触れまとめとしたい。

炭焼き窯は全体の形は長方形で、北側の壁は浅く、半円形に外側に広がっている。近世の絵ら見るようにこちらが焚口で、本体の上部にはカマボコ形の覆屋、上部構造が存在したと考えられる。近世のものであることを直接示すものは出土しなかった。

弥生時代は少量ではあるが中期頃の下城式土器が出土し、土坑類はこの時期のものと思われる。弥生時代の遺構・遺物は調査区の北端部に集中したが、遺跡の性格は不明である。

縄文時代らしい集石は北部の台地上面に分布していた。しかし旧石器の分布する地域とも近く、所属時期は断定できない。姫島産ガラス質安山岩は大分県北部の縄文早期の遺跡でよく使われる石材である。口野尾遺跡では土器は出土しなかったが、この理由で早期を含むものと考えておきたい。

陥し穴は調査区の中央部のやや平坦な場所と南部の斜面部のニケ所で検出した。6基あり次のようにA～D類の4型式に分類できる。A類(6号)は平面円形でそこに凹凸状に浅い穴をもつもの。B類(1・3・5号)は平面系は長方形ないし長楕円形で、底面に3ヶ所の穴が一列に並ぶ。C類(4号)はB類の一の穴がふたつ並列する形になったものである。D類は平面は短い長方形で底面中央に1個の穴をもつものである。これらは1号と3号、4号と5号が並んで配置されているようにも見える。陥し穴の時期は不明である。

3 ^{めくぼ} 目久保第1遺跡

第1節 調査の概要

1. はじめに

目久保第1遺跡は速見郡山香町大字久木野尾字目久保に所在する。遺跡の所在するところは南北方向の細長い丘陵がいくつも展開し、目久保第1遺跡はその中の1つに位置している。丘陵は調査区の南部で一旦狭まりその前後は広くなる。遺跡の標高は最高322mで調査区の中央部付近は東西120m程度の平坦面をなしている。南東部は丘陵に切り込むような谷の斜面の上部にあたり、第2図でよく分かるようにかなり傾斜がある。北西部も第2図の方が実際の状況をよく表している。北西方向から入り込んだ谷の一部と斜面、斜面から一段下がった場所にある細長い突出部を調査範囲とした。

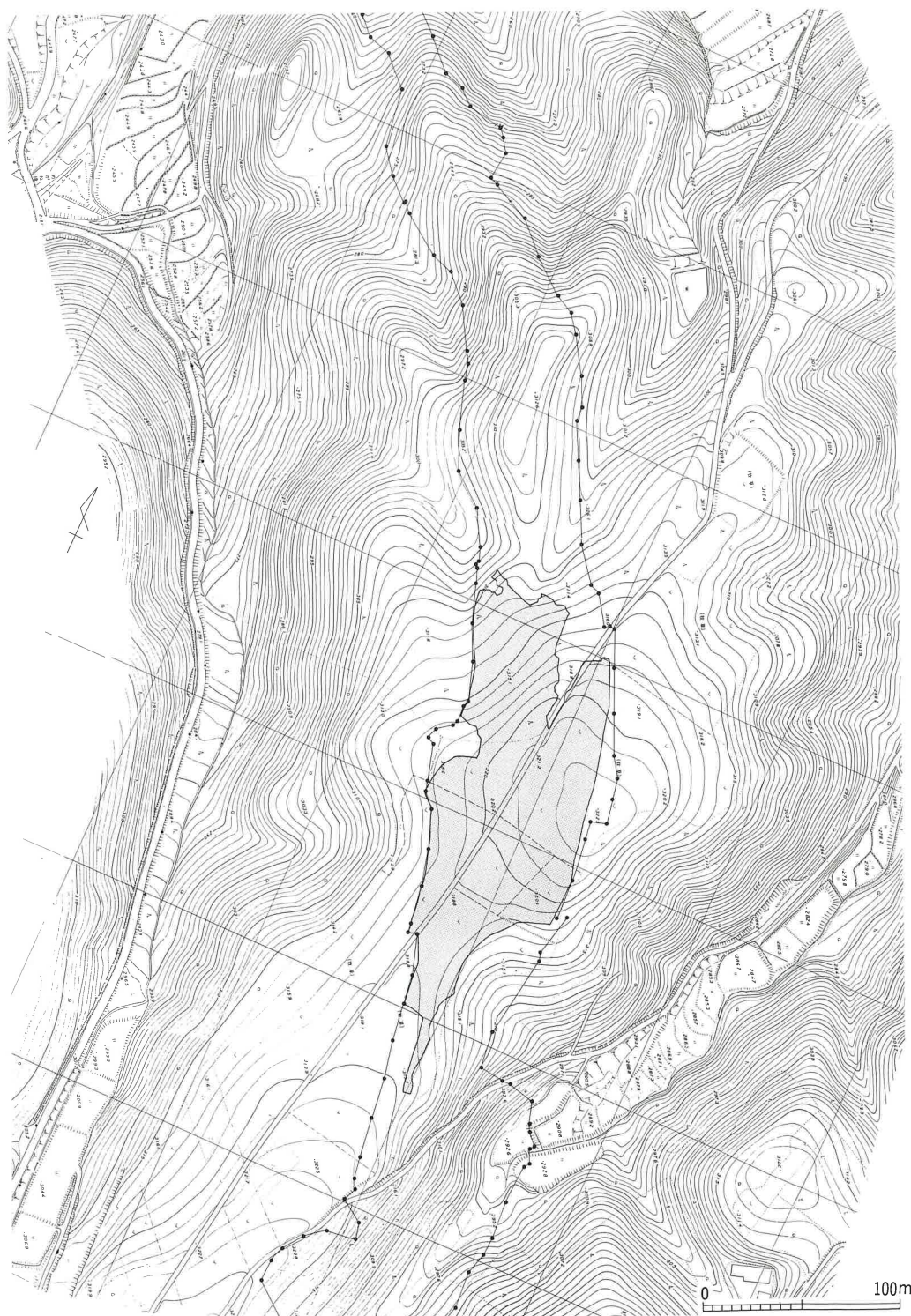
発掘調査は平成元年5月に試掘調査を行って遺跡の存在を確認したあと、平成元年6月に重機を投入し、表土の除去を始めて開始した。調査前の調査地の現状は丘陵の上面は畑地として利用されていて、北部の斜面は雑木林であった。雑木林の部分は用地買収の関係でその年度には調査できず、翌平成2年1月からはこの部分も加えて調査を行い、結局5月末日まで調査を行った。調査面積は約9000m²である。

2. 調査の概要

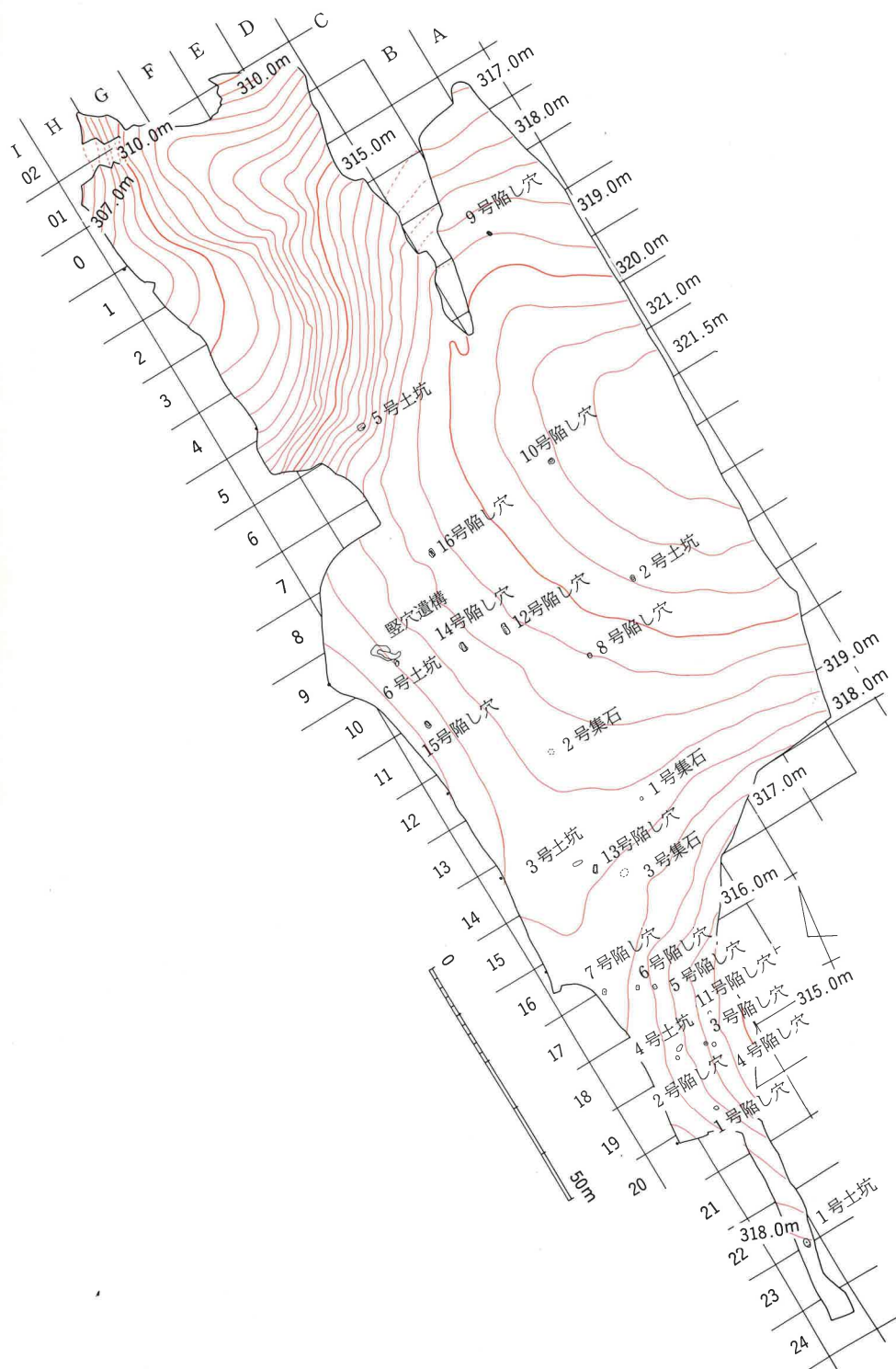
発掘調査にあたり調査地全域を10m方眼に区画し、北から1～24区、東から西にA～I区に分けた。北部の雑木林を追加したためこの部分は1区の次に0・01・02区を加えて処理した。表土を除去して明かになったのは、表土の直下に現れる層が場所によって異なることである。丘陵上面の北東部は6区付近から北にかけては遺物包含層に相当する層が流出し、南東部の谷斜面部も同様であった。北西部では尾根状の場所の北面には包含層が残っていた。

初めに方眼に沿って南北方向に4本のトレンチ（東からNo.1～4トレンチ）を入れ、遺物包含層の状況を調査した。調査が夏期を中心にしていたことに加え、本遺跡の特徴から非常に包含層が硬く、水で湿らせて軟らかくして移植コテを使用する状態だったため能率的に調査を進行することが困難だった。丘陵の最高所を中心にした場所は旧石器時代の遺物が比較的多かったためその層を調査した。南部の17G区周辺も旧石器時代の層を調査した。縄文時代の遺物包含層が残っていた丘陵上面は完掘を目指した。

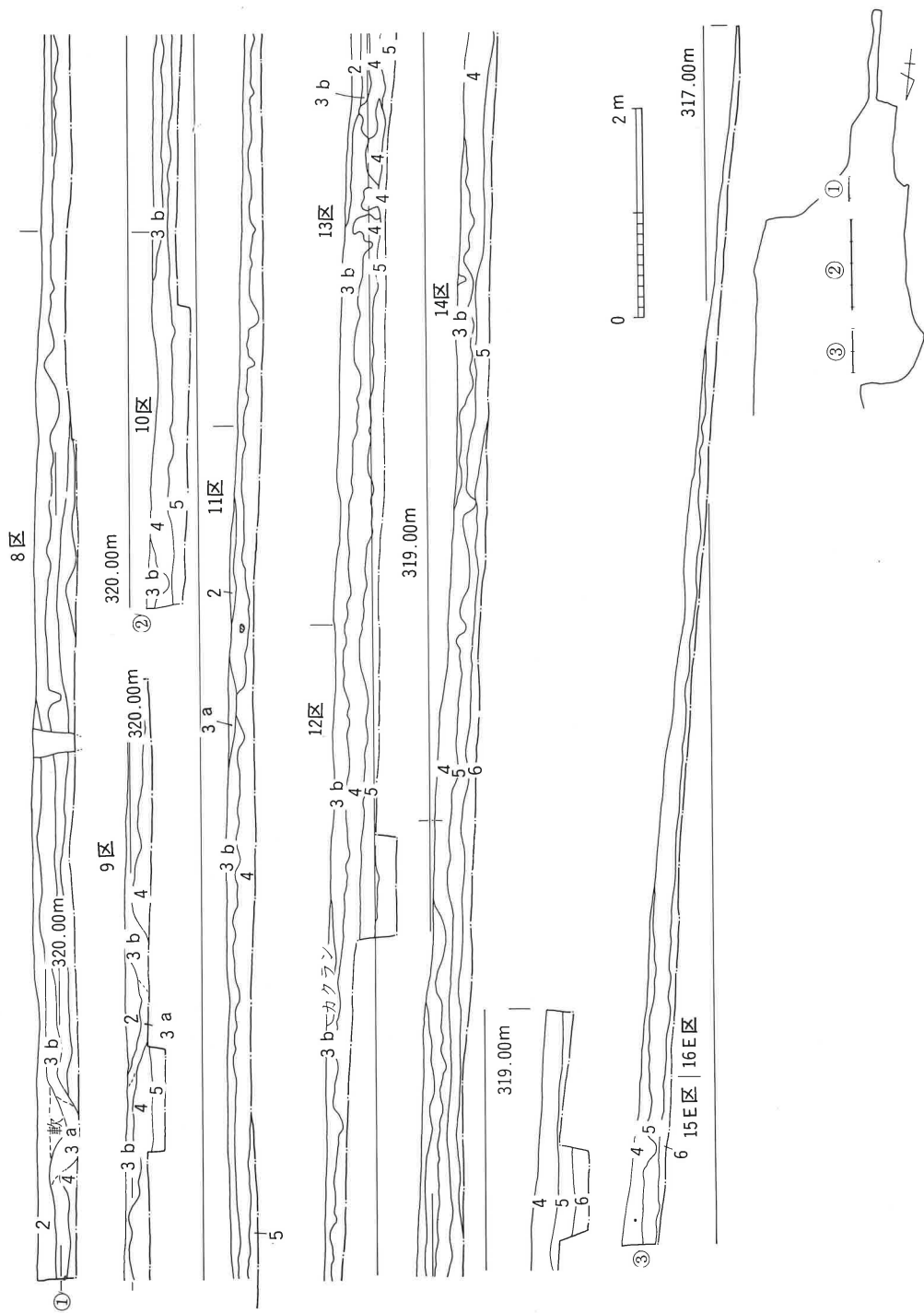
その他、調査によって陥し穴・土坑・竪穴遺構・集石遺構を検出した。風倒木痕は後述の目久保第2遺跡に比べて少なかった。



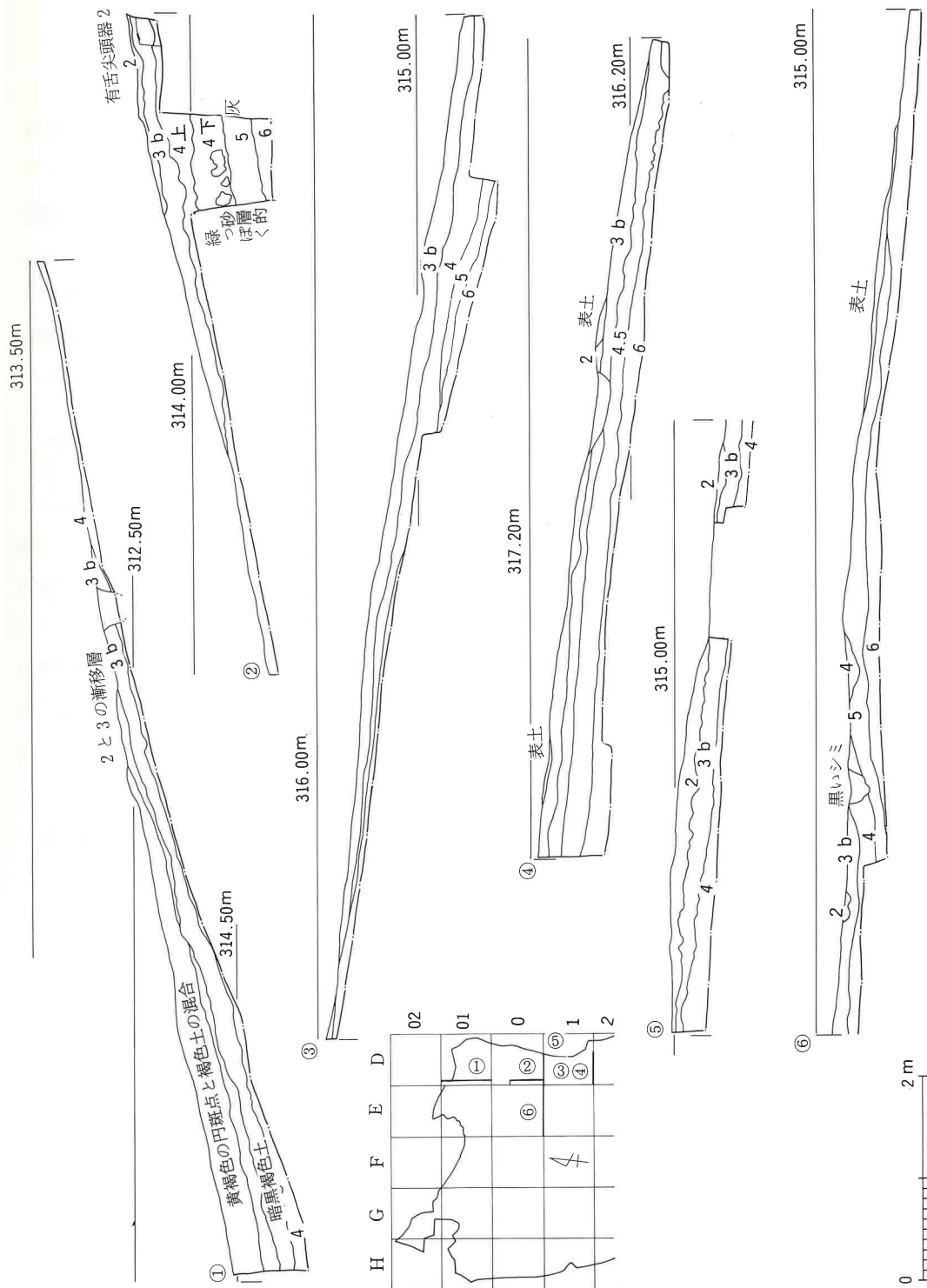
第1図 目久保第1遺跡の調査区位置図



第2図 目久保第1遺跡の遺構配置図



第3図 目久保第1遺跡の土層図



第4図 目久保第1遺跡北部斜面の土層図

3. 層 序

本遺跡では1～6層までを区別して調査した。全て火山灰層である。

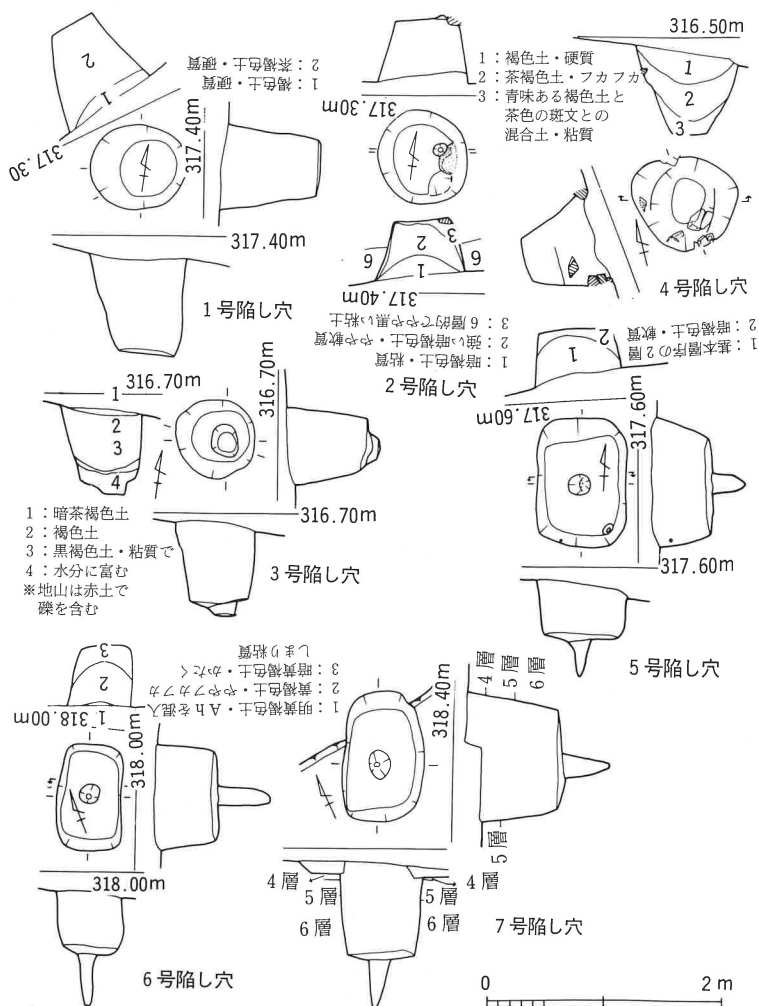
1層 表土である。

2層 黄褐色の小さな円形の斑点が混じった褐色土層である。粘性がなく乾くと硬い。黄褐色の円形の斑点にはアカホヤ火山灰が濃く混じっていると見られるが、純粋な状態のアカホヤは少数の風倒木痕内の土層に確認できただけである。アカホヤ火山灰は大隅半島の南方にある海底火山に起源するもので、噴出年代は約6300年前と考えられている。これは広く日本列島を覆っており、南は奄美大島、北西は朝鮮半島の東部、北は東北地方、東は伊豆諸島でも検出されている。2層は他遺跡の例では縄文時代前期から晩期の遺物を包含するが、本遺跡では無遺物層である。目久保第2遺跡では2層をa・bに2分するが本遺跡では

3層 a・bの2つに分ける。縄文時代早期の遺物包含層である。

3a層は黒色土で硬い。2層がある場所でも3a層がない所が多く、遺跡全体でも極めて例外的にしか存在しない。3b層は硬い黒褐色土で、層厚は10cm前後である。

4層 旧石器時代の遺物包含層である。北西部の斜面ではa・bの2つに分けるがその他の大部分



第5図 目久保第1遺跡の陥し穴 (1)

では分層できないので4層として一括する。

4 a層は硬い褐色土層で、4層として扱う。普通の場所では層厚は15cm前後である。

4 b層は01D区だけで分層できた(第4図)。ここでは4 b層が40cm弱あり下部にブロック状に緑っぽい砂層的な層がある。目久保第2遺跡では4層にはA T火山灰が含まれていることが確認されたが、このブロック部分がA Tに相当する可能性がある。

5層 暗褐色の粘土質の土層で旧石器時代の遺物包含層。層厚は10cm前後。

6層 粘土質の硬い赤褐色の土層。無遺物層。

第2節 検出した遺構と遺物

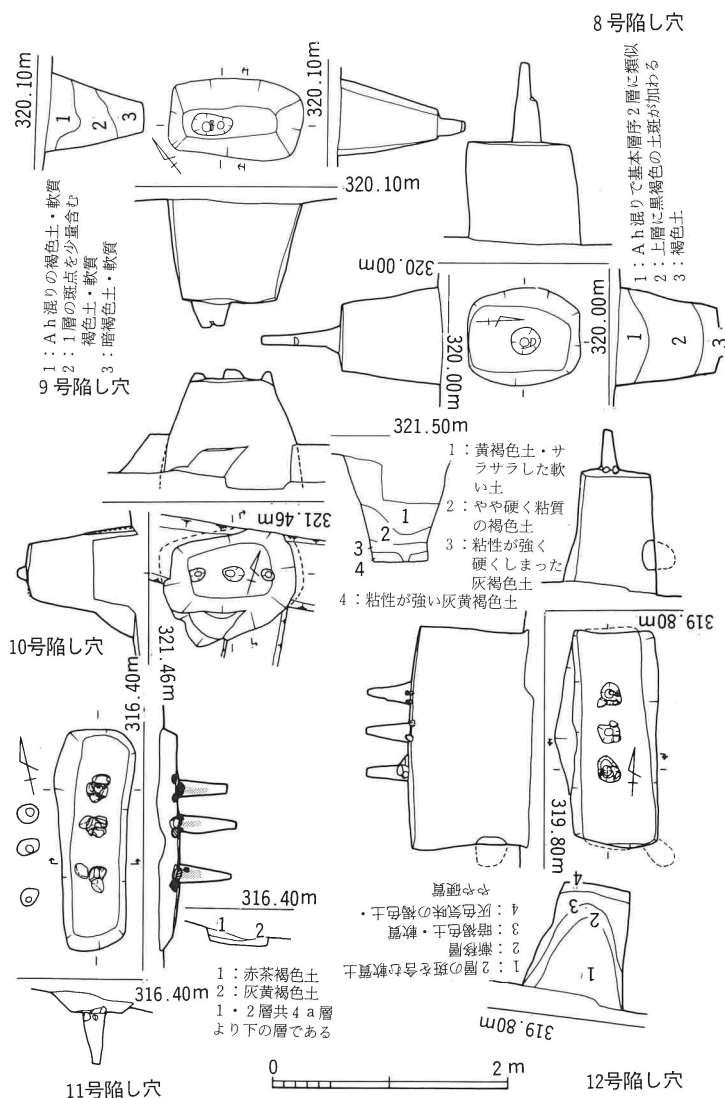
1. はじめに

本遺跡には旧石器時代の遺物包含層2枚と縄文時代草創期・早期の遺物包含層があった。検出した遺構には陥し穴16基・集石遺構4基・土坑6基・竪穴遺構1基がある。

2. 陥し穴

(第5～7図)

陥し穴は16基検出した。丘陵上面と南東斜面付近に分布する。形態は変化に富んでいてそれぞれ使用時期が異なるものと思うが、遺構の性格上詳しい時期推定はできない。埋土から遺物が出土したのは次に述べるように5号陥し穴だけである。



第6図 目久保第1遺跡の陥し穴

1号陥し穴（第5図上左）

19G区にある。この付近は斜面のため堆積層が流出しやすいらしく表土直下が6層から始まり検出面も6層である。平面形は円形で長さ84cm・幅72cm・深さ86cmである。壁は直線的に立ち崩落部がないのは上部が長年の間に流出したためであろう。

2号陥し穴（第5図上中）

18G区にある。1号とは11cm離れている。検出面は6層。平面は円形で長さ81cm・幅76cm・深さ55cmの規模である。底面には深さ3cmの穴があり地山の石が現れている。

3号陥し穴（第5図中左）

18F区にある。検出面は6層よりも下にある赤土を呈し礫を含む層である。平面は円形で規模は長さ66cm・幅67cm・深さ73cmで底に28cm×22cmで深さ13cmの小穴1がある。

4号陥し穴（第5図上右）

3号陥し穴から72cm谷寄りにある。検出面は3号陥し穴と同じで6層の下の礫の混じる層である。平面は円形で長さ90cm・幅79cm・深さ76cmである。

5号陥し穴（第5図中右）

17G区にあり表土直下の5層上面で検出した。平面は隅丸の長方形で底面中央に穴が1つある。規模は長さ110cm・幅75cm・深さ52cmである。南東隅の小穴は深さ4cm。埋土の大部分に本遺跡の基本層序である2層が堆積するので、アカホヤよれも上から掘り込まれたことは確かである。埋土内の壁際から（図中の黒点）隆起線文土器片（第12図）が出土した。

6号陥し穴（第5図下左）

17G区にあり、5号陥し穴とは2m40cm離れている。平面は隅丸の長方形で底面に穴が1つある。埋土にアカホヤを含んでおり降灰後に掘り込まれたものである。長さ90cm・幅56cm・深さ52cmである。

7号陥し穴（第5図下右）

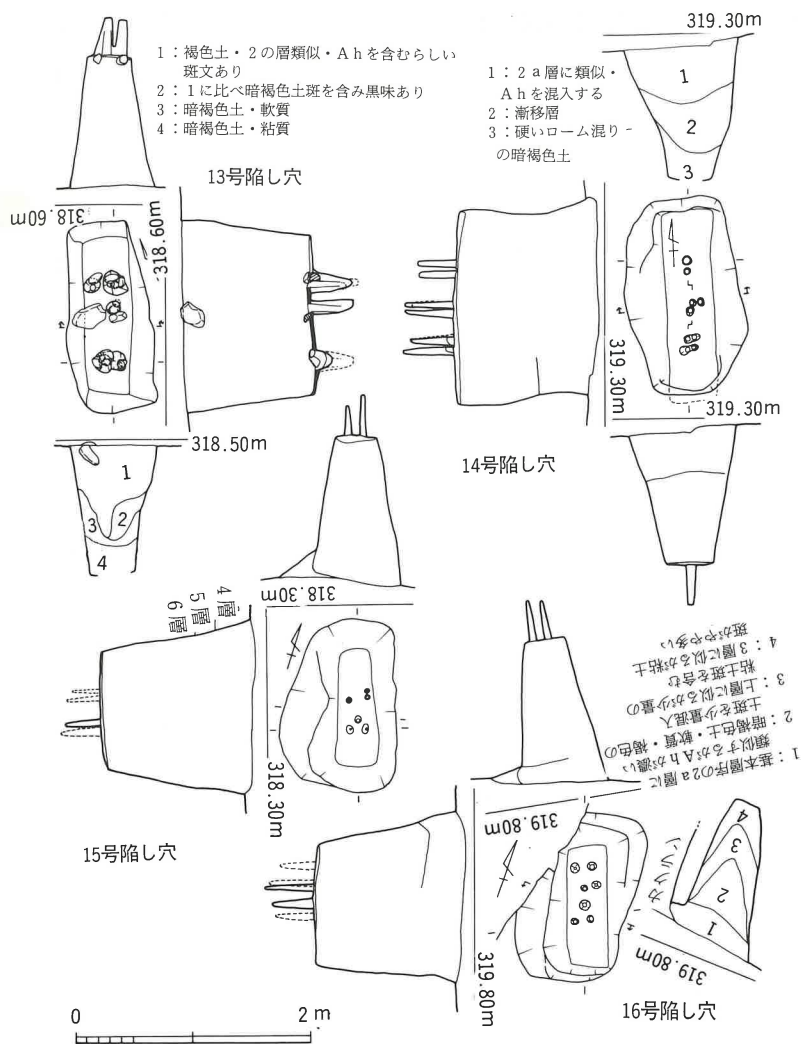
17H区にあり、6号陥し穴とは5m54cm離れている。表土直下の4層上面で検出した。平面形は5号・6号と同じ隅丸の長方形で底面中央に穴が1つあり、形態・配置状態から見てこの3基が同時に使用されたことが分かる。7号は長さ100cm・幅50cm・深さ84cmである。

8号陥し穴（第6図上右）

11E区にある。隅丸の長方形で長さ96cm・幅82cm・深さ86cmの規模である。底面中央に穴が1つある。埋土の状況からアカホヤ降灰後に掘り込まれたことが分かる。

9号陥し穴（第6図上左）

3B区と4B区の境界にある。平面は長方形で底面には丘陵斜面の下寄りに浅い楕円形の穴があり内部は2つに分かれている。壁は斜めに直線的に立つ。検出面は表土直下の6層上面である。規模は長さ114cm・幅68cm・深さ85cmである。



第7図 目久保第1遺跡の陥し穴

部しか残っていない。平面形は長方形で底面には3ヶ所に穴がある。底面および穴の上部にかけて小石があり、南側のものを除いた2例は石で囲んだ中心部を空白域にし穴に立てる棒の裏込め石の機能を果たしている。空白域（図の網部）の埋土は同じ穴の中の土よりも軟らかい部分である。裏込め石は北側のものから6個・4個・4個を使っている。規模は長さ188cm・最大部の幅66cm・深さ18cmである。

12号陥し穴（第6図下右）

10F区にある。表土直下の3層上面で検出したが埋土中に基本層序の2層が堆積しているので3層よりも上から掘り込んだ遺構である。平面形は長方形で長軸は上面よりも底面の方がやや長い。底面には長軸上に3個の穴が並び、すべての穴の最上部に裏込め石がある。その数は

10号陥し穴

（第6図中）

8C区でトレンチを入れたときに発見した。このことから未発見のものが他にもある可能性がある。平面形は隅丸の長方形で底面には長軸上に3つの浅い穴が一行に並ぶ。中央のものは确实だが両側の2つは確信を持っていない。図の実線部での計測値は長さ114cm・幅86cm・深さ98cmである。図の南壁上部の段は掘り過ぎである。

11号陥し穴

（第6図下右）

19F区にあり、表土直下の層である6層よりも下の石混じりの層で検出した。遺構の上部はほとんど流出し下

北から4個・2個・2個である。壁の上部の南東隅に奥行き15cmほどの穴がある。陥し穴の規模は長さが最長の底面で187cm・幅は西側上部が崩落している中央部で86cm、完存の南部で74cm・深さ104cmである。

13号陥し穴（第7図上左）

14・15F G区の境界の表土直下の3層上面で検出した。埋土上部から30cm大の石1個が出した平面は長方形で底面中央に1個、その両側短辺寄りに2個ずつの計5個の穴がある。断面図の底の黒い部分は硬い土層でこの上面で穴を確認した。底直上から穴の上部にかけて裏込め石がある。石に囲まれた部分には軟らかい土が詰まっており（平面図中の太い破線・断面図中の細い線）、棒の位置を示す痕跡である。石の数は北の右が3個、左が1個、中が1個、南の右が1個、左が2個である。規模は長さ163cm・幅75cm・深さ110cmである。

14号陥し穴（第7図上右）

10F区と10G区の境界にあり12号陥し穴が東側7m50cmに位置する。表土直下の3b層上面で検出した。壁の上部は自然崩落しているが本来は底面よりも上面の方が狭い。底面には直径6cm前後の穴が9個あり、棒を直接地面に打ち込んで使用した痕跡であろう。平面は長方形で規模は長さ153cm・幅102cm・深さ124cmである。

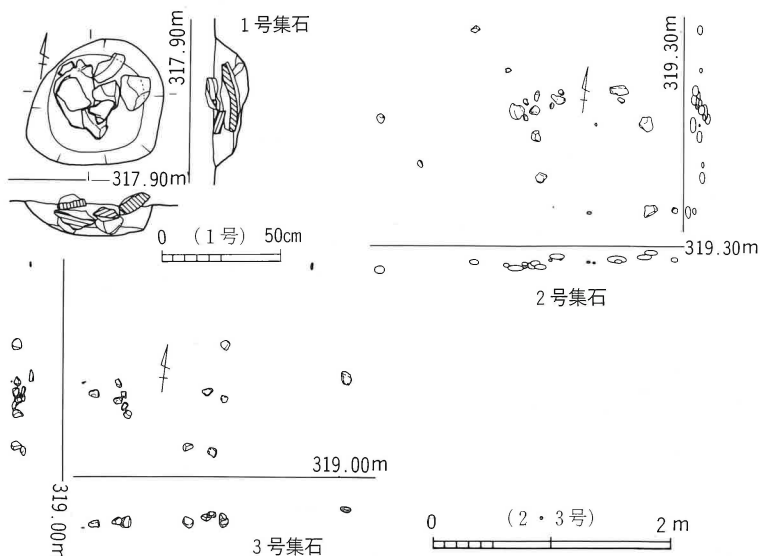
15号陥し穴（第7図下左）

11H区にあり表土直下の4層で検出した。平面形は長方形で壁は斜めに直線的に立つ。西側の壁の上部は侵食されて斜面状をなす。底面は南側が広く、中央付近に直径4cmから9cmまでの穴6個が集中する。本来の壁面での計測値は長さ147cm・幅75cm・深さ130cmである。

16号陥し穴

（第7図下右）

8F区の表土直下の3層上面で検出した。北西部は現代の攪乱により破壊されている。平面形は長方形で、底面に直径5cm～8cmの穴が7個あるが北側の2個は確信を持ってない。壁の上部は自然崩落している。規模は長さ143cm・幅は本来の壁面で62cm・深さ130cmで



第8図 目久保第1遺跡の集石遺構

ある。埋土の特徴から言えばアカホヤ降灰以後に掘り込まれた遺構である。

3. 縄文時代の集石遺構（第8図）

本遺跡では遺物は少量しか出土しなかった。礫は包含層に散在する状態だったが、縄文時代に関して言えば散漫ながら比較的集中した場所が2ヶ所と集積状態のものが1ヶ所あった。すべて3b層で検出した早期に属するものである。

1号集石遺構（第8図上左）

14E区にある。長径62cm・短径54cm・深さ14cmの土坑の中で8個の石が集積状態で出土した。一番下には29cm×18cmの平たい石を敷いていた。

2号集石遺構（第8図上右）

12F区に散漫な状態乍ら比較的礫が集中した部分があり、これを2号集石とした。中心部に20個前後の主に割れ礫が分布し南側にも若干分布する。

3号集石遺構（第8図下）

15F区に2m50cm×1mの範囲で礫が出土した部分のことである。南側約3mのところには40cm×40cm程度の扁平な板状の石があり、石皿として利用した可能性がある。

4. 土 坑

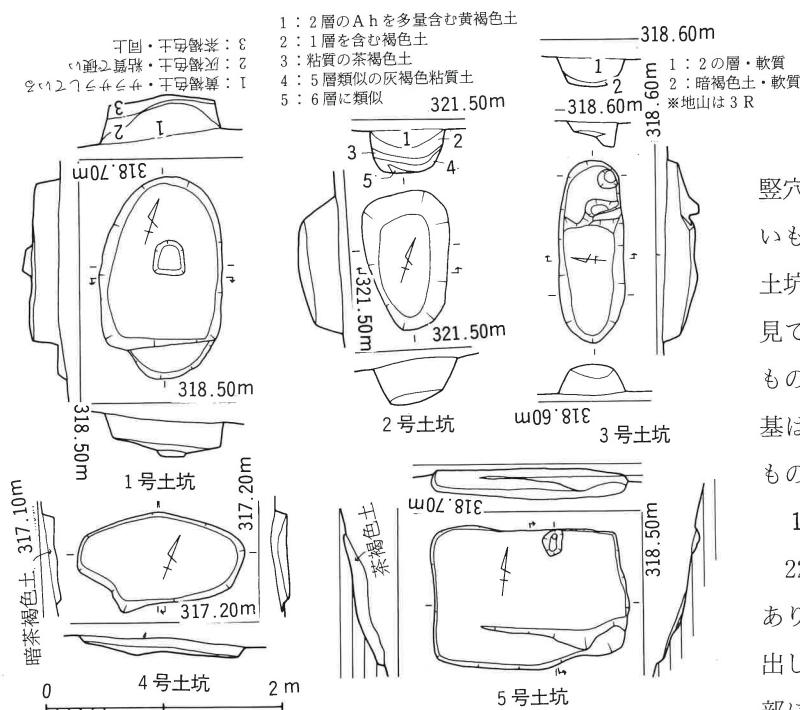
（第9・10図）

陥し穴には該当せず

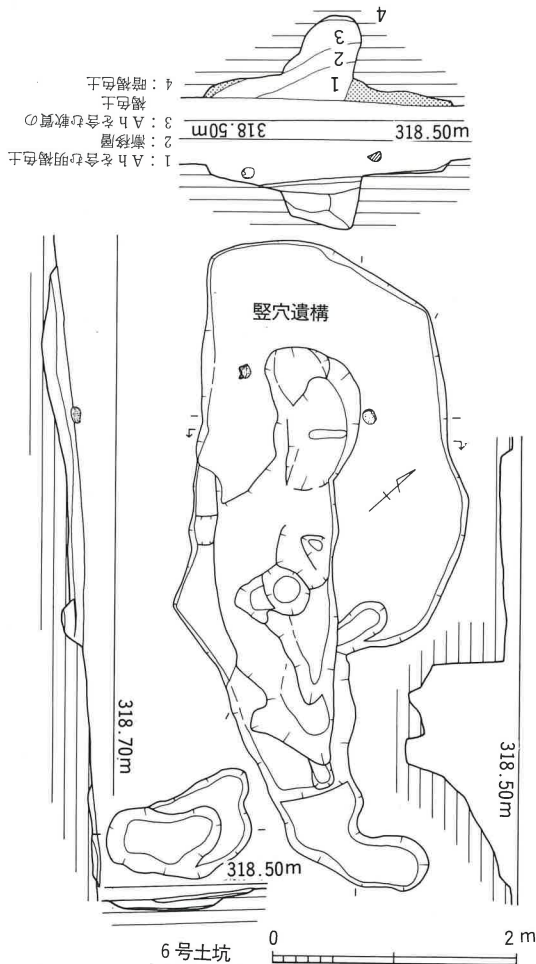
墓壇や貯蔵穴あるいは堅穴住居跡とも考えられないものを土坑として扱う。土坑は6基ある。埋土から見て縄文時代早期に属するものが1基で、その他の5基はそれより新しい時期のものである。

1号土坑（第9図上左）

22G区と23G区の境界にあり表土直下の3b層で検出した。平面形は楕円で南部には段差がある。床面中央には浅い穴が1つある。



第9図 目久保第1遺跡の土坑



第10図 目久保第1遺跡の土坑堅穴遺構

出した。形態は不整形で、床面は2段に分かれている。人工的な遺構であるのか否か不明である。長さ120cm・幅91cm・深さ12cm。

5. 堅穴遺構 (第10図右)

ここで堅穴遺構と呼ぶのは通常の縄文時代早期の堅穴住居跡に匹敵する規模の土坑のことである。9H区の表土直下の3b層上面で検出した。遺構内の埋土は3b層に類似していた。床面の中央部から南部にかけて横長の風倒木痕が重複している。図中の網部は堅穴の埋土でありこの埋土からは礫2点が出土した。堅穴の規模は長さ332cm・幅225cm・深さ20cmである。

埋土の1層にはアカホヤを含む。長さ171cm・幅103cm・深さ26cmである。

2号土坑 (第9図上中)

10C区にあり表土直下の5層上面で検出した。平面は楕円形で底は中凹みである。規模は長さ116cm・幅72cm・深さ34cmである。

3号土坑 (第9図上右)

14G区にあり表土直下の3b層上面で検出した。平面形は楕円で東部には2つの穴がある。規模は長さ154cm・幅55cm・深さ30cmである。

4号土坑 (第9図下左)

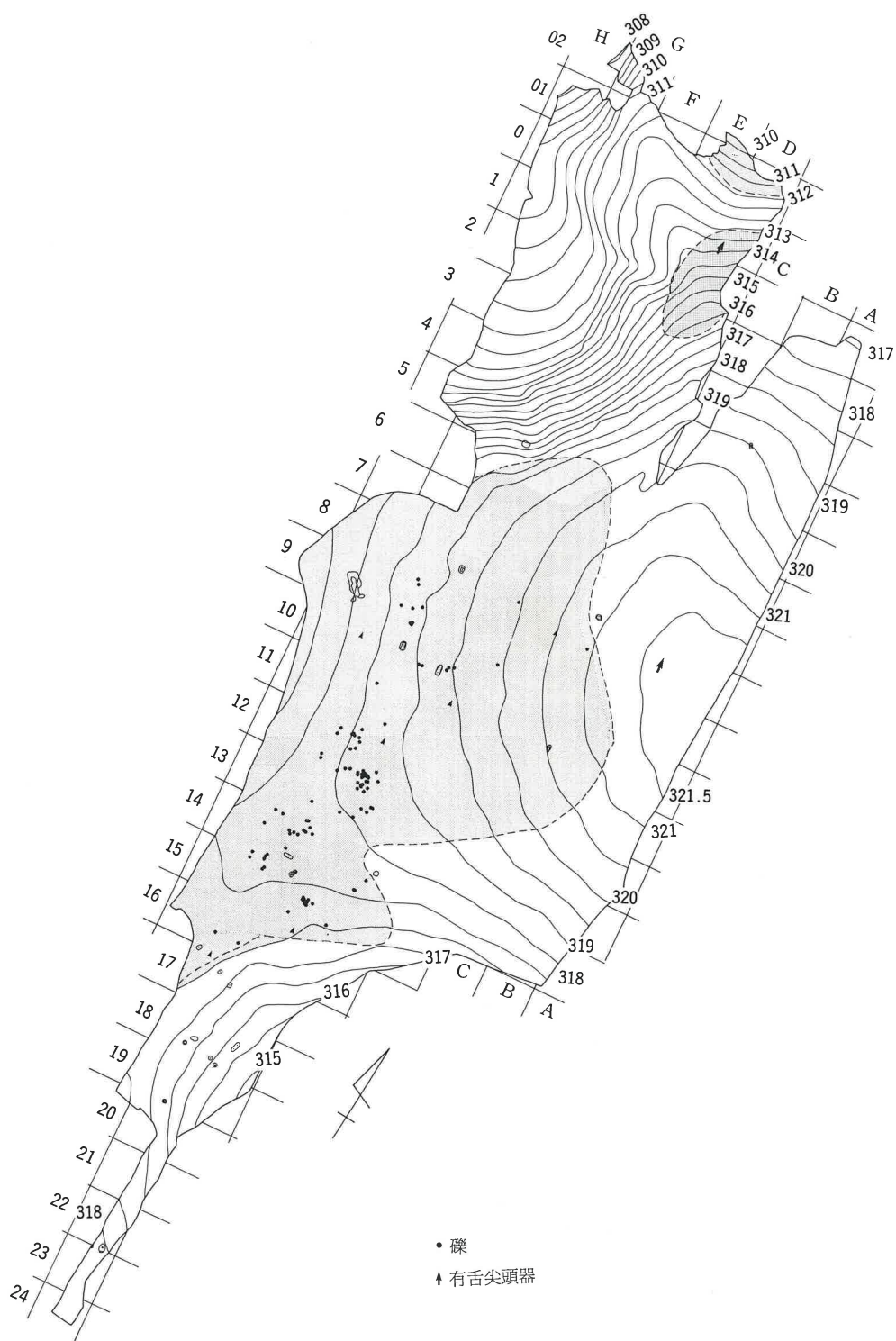
18G区にあり表土直下の6層上面で検出した。平面は不整な楕円形で、規模は長さ141cm・幅76cm・深さ14cmである。

5号土坑 (第9図下右)

斜面部の5F区にあり表土直下の6層上面で検出した。平面は長方形で長軸165cm・短軸120cm・深さは床面が斜面に平行するので床と直交する値をとると10cmである。埋土は3b層に似ている。

6号土坑 (第10図下左)

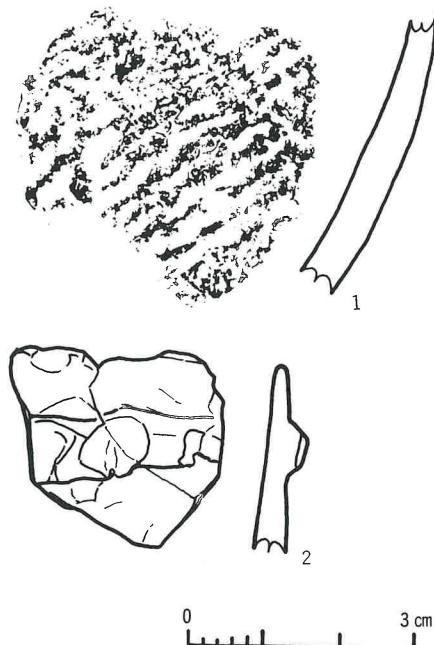
9H区にあり表土直下の3b層上面で検



第11図 目久保第1遺跡縄文時代の遺物・遺構分布図

6. 縄文時代の遺物 (第11～16図)

調査区内の全域ではないが縄文時代の遺物包含層が存在した。包含層には3層が該当し、早期・草創期の遺物が出土した。早期、草創期に相当する3層は発掘区域のうち丘陵上面東半分の標高が最も高い場所ではすでに流失し、中央部から西部にかけて残っていた。竪穴遺構や集石遺構を検出したのもこの部分である。このほか北部にあたる斜面の下でも傾斜の緩やかな0 E・F区周辺にも小範囲だが3層が残っていた(第11図)。本来この上のあるべき2層は層序の項でも触れたように局部的にしか残っておらず、しかも無遺物層であった。従って、本遺跡における縄文時代の遺物は早期・草創期のものである。



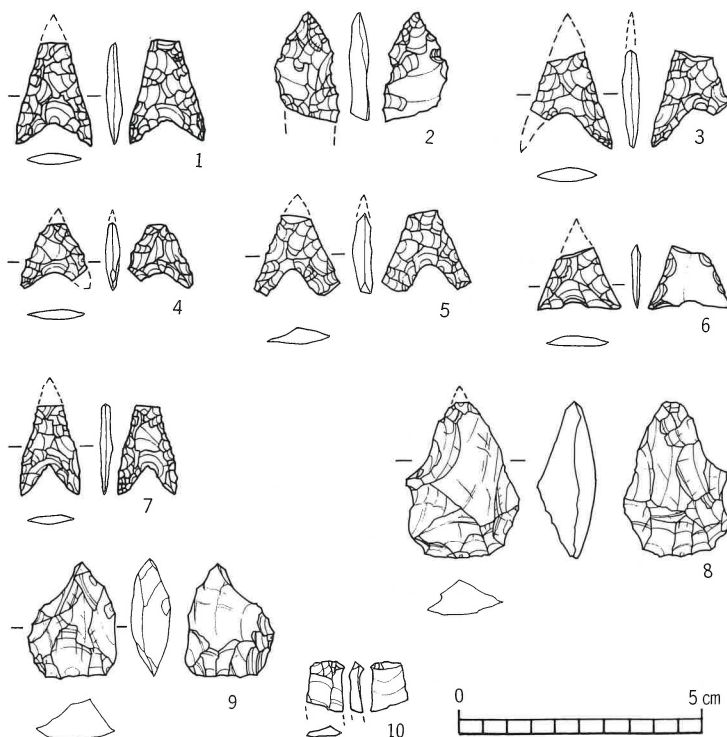
第12図 縄文時代の土器

○ 土 器

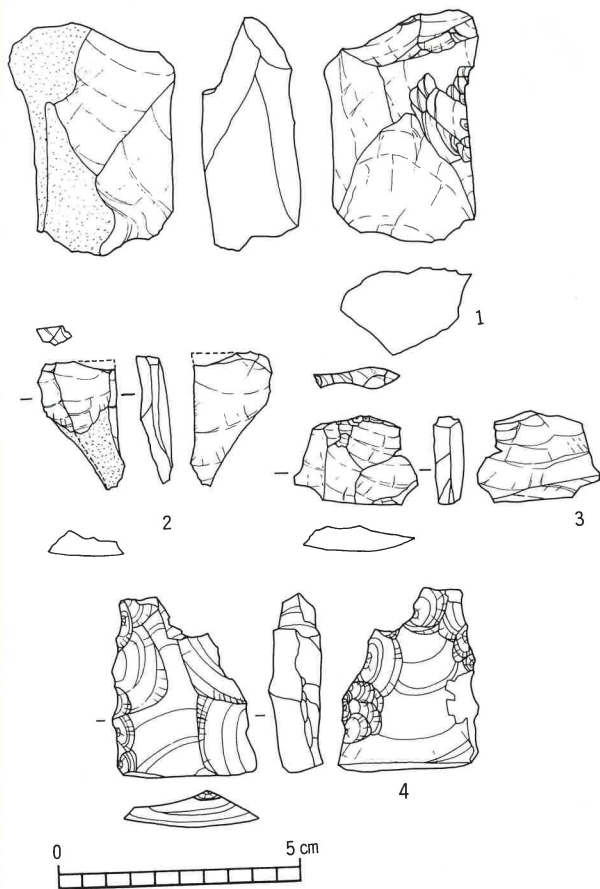
(第12図1・2)

1は14F区から出土した。外面には撚糸文を全面につけ、内面はナデ調整で、胎土には角閃石と長石を混入している。2は17G区の5号陥し穴から出土した。(第5図中の黒丸)。

口縁上端の破片で横3cm弱・縦2.5cm強の大きさである。器厚は下端で5mm、口唇部に向かって細くなる。上端から8mmくらい離れた位置に幅7～9mmの貼り付け突帯があり、稜上に指頭による刻みが3個ある。胎土には



第13図 目久保第1遺跡の縄文時代石器



第14図 風化の強い黒曜石を用いた石器

剥片 (第13図10・第14図1～3)

10は姫島産黒曜石を用いたもので細石刃に似ているが、打面と剥片との角度からみて石器製作中の2次加工段階の剥片であろう。1～3は同一種の風化の激しい黒曜石を用いたもので、芯はガラス質で黒いが、表面は焦げ茶色に変色している。かつて大分県荻町所在の右京西遺跡から出土した際、蛍光X線分析を依頼したところこの種の黒曜石は現在未だ産地不明との結果を得たことがある。1～3は10H区と11H区といった狭い範囲に分布していた。この他、同種の石材を用いた剥片・碎片が3b層から11H区・10H区に1点ずつ出土し、8B区の有舌尖頭器もこれである。なお、4層から7B区と13F区で1点ずつ出土し、4～5層の境から1点(第14図4)、5層から2点(16G区・17G区)出土している。この他、姫島産黒曜石・姫島産ガラス質安山岩・安山岩の剥片類も出土した。

有舌尖頭器 (第15図1・2)

2点出土した。1は0D区の3b層上半部から出土した流紋岩製のものである(第4図の土

角閃石を若干と長石を多量に混入している。このような胎土の傾向は大分県にあっては一般的である。火山灰地帯で製作した土器であろう。

石器 (第13～15図)

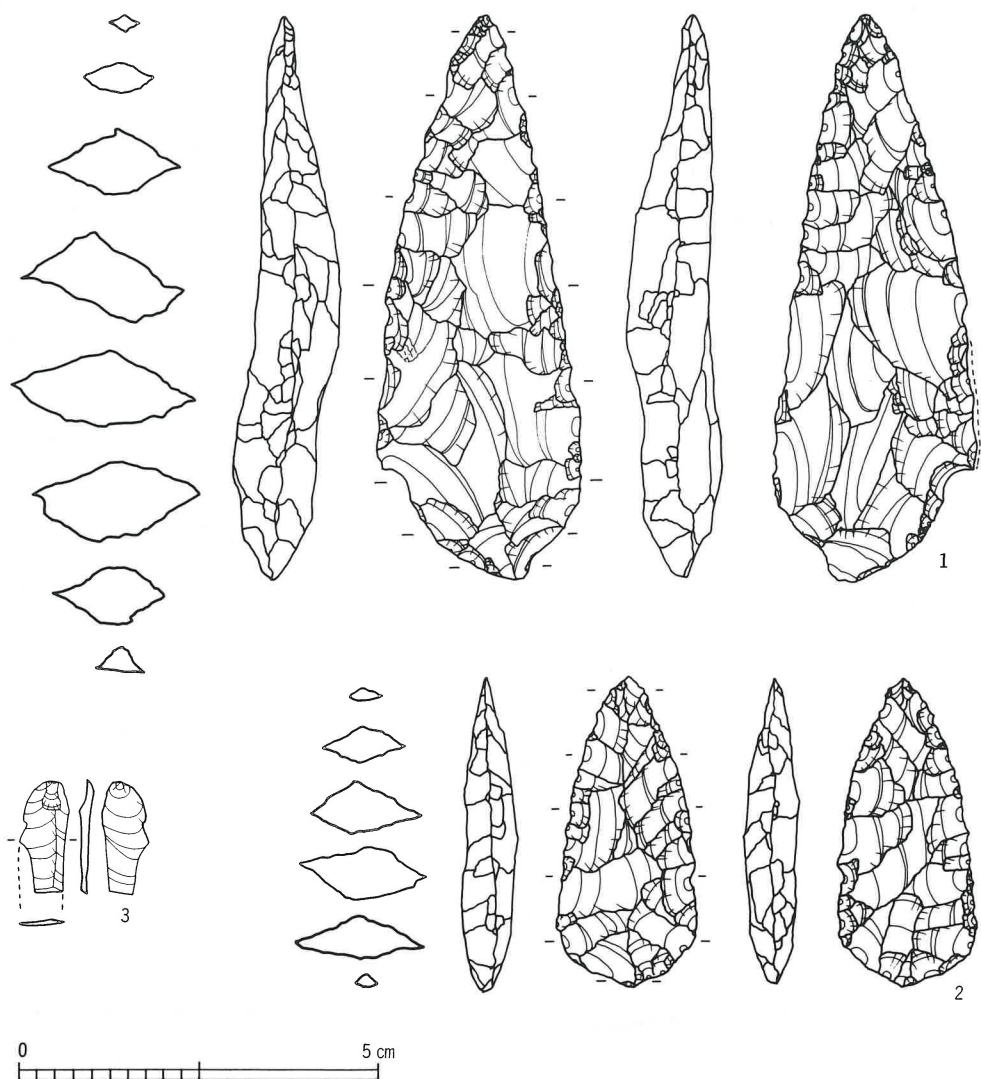
縄文時代の石器類には石鏃・尖頭状石器・有舌尖頭器・剥片・碎片がある。出土状況は散発的であり特に集中するということもない。個別石器の特徴については58ページの表1を参照。

石鏃 (第13図1～7)

7点出土した。2はいわゆる異形石鏃の1種である。6は平坦な基部に片面から小剥離を1回行って、浅い挟りを加え特徴的である。石鏃は全部欠損部である。

尖頭状石器 (第13図8・9)

2点出土した。2点とも製作途上の石器である。

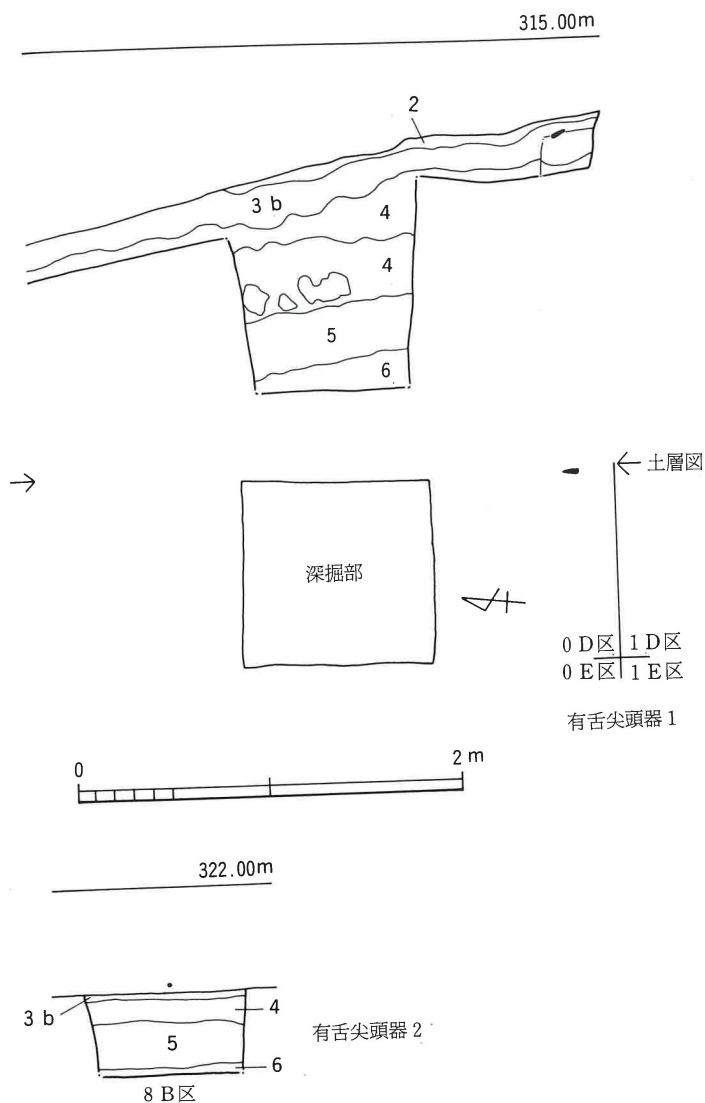


第15図 目久保第1遺跡の有舌尖頭器・細石刃

層断面図には幅1mトレンチから出土した状況を投影している)。側面が湾曲するのは横長剥片を素材としたためであろう。発掘時に一部欠損した(右端図の右縁辺下半)。茎部は片側に寄ってしかも調整が十分ではない。2は8B区の3b層から出土した。上記の黒曜石を用いたもので表面は風化のため変色が激しい。規模は1より小さいが形は整っており短い茎部をもつ。

7. 旧石器時代の遺物 (第15図2・第18～20・23図)

調査の初期段階に試掘トレンチによって丘陵上面を中心に遺物の分布状況を調べたところ、旧石器が出土した。標高が最も高い8A区周辺と丘陵が狭まる17G区周辺を中心に旧石器時代



第16図 有舌尖頭器の出土状況

ナイフ形石器 (第18図 1～5)

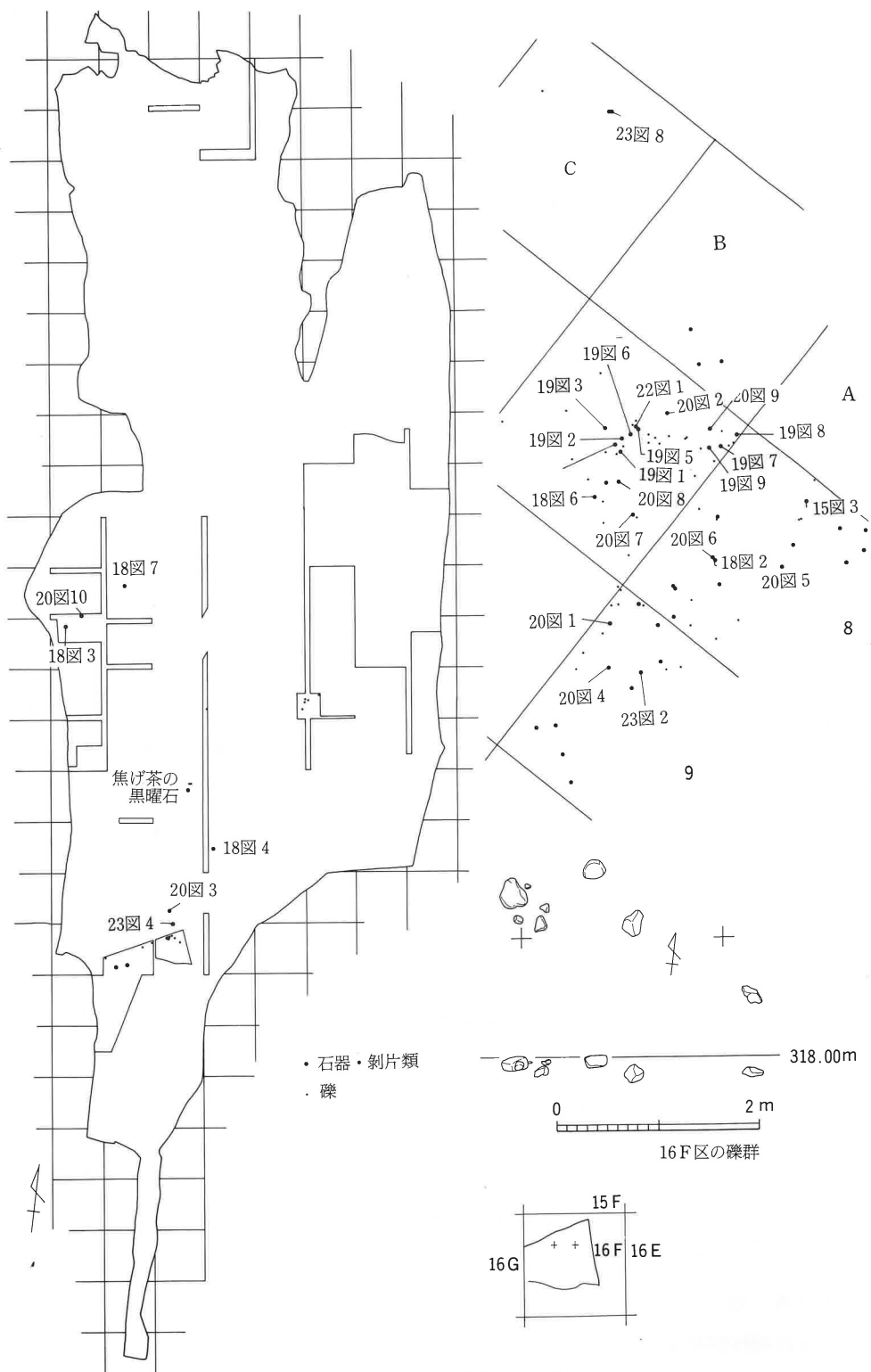
5点出土した。5が9H区の3b層で出土したが、他は4層から出土した。石材別には流紋岩3点・安山岩1点・珪化木1点となり流紋岩が最も多い。1は主要剥離面の打面側に刃潰し加工が見られるもので、他の側縁は鋭さを残している。先端側を欠損している。2は片面を欠損し、残った部分に刃潰し加工が見られる。3は1側縁を先端から基部まで、他側縁は基部付近を一部刃潰し加工した切り出し状のナイフ形石器である。4は2側縁の基部に刃潰し加工したもので左右対称形をなす。5は基部側の1側縁に刃潰し加工を加えるが、他の側縁の基部側は自然面のままで急角度をなし刃潰し加工したのと同じ効果をもつ。

の層を発掘した。比較的に4層からの出土品が多く、細石刃・ナイフ形石器・角錐状石器・剥辺尖頭器等の定型石器や削器・石核がある。一方、5層からも旧石器が出土したが石核が出土したものの他には特徴的な形態の石器は出土していない。ただ2つの層の間には使用した石材に差が存在し所属年代に相当の開きがあるらしい。第21図の黒色部分は5層までの発掘を行った場所を示している。

a. 4層の石器

細石刃 (第15図 3)

8A区から出土した。石材は黒い黒曜石だが縞状に透明部分が入る特徴をもつ。打点の反対側は折れている。長い側縁部には使用痕の刃潰れがある。



第17図 4層の遺物出土状態

角錐状石器（第18図6）

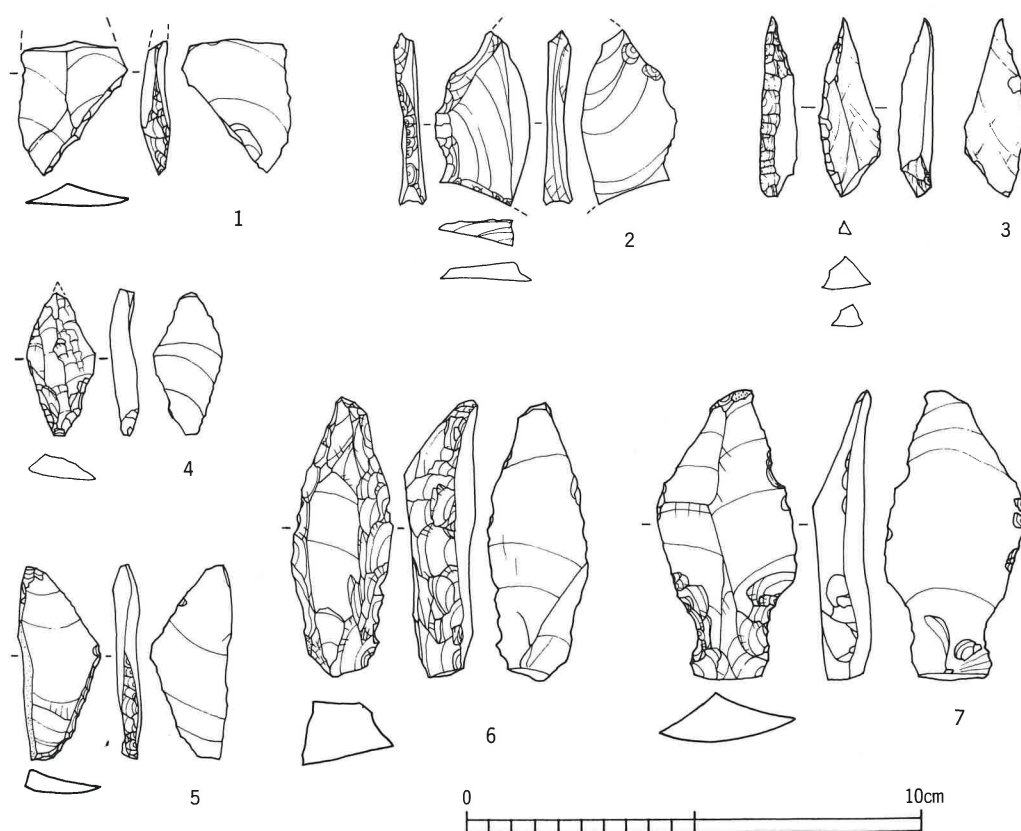
1点出土した。縦長剥片の打面を残し2側縁を先端まで刃潰し加工している。流紋岩としたが安山岩的である。

剥片尖頭器（第18図7）

1点出土した。使用石材は腰岳産黒曜石と思われる。主要剥離面と背面にある4つの剥離痕の剥離方向は同一である。背景に縦長剥片を剥離する石核の存在が考えられる。本遺跡では腰岳産に限らず黒い黒曜石は小破片が数片しかなく、この剥片尖頭器を本遺跡で作ったとは考えられない。

以下では、定型的石器以外のものについて器種によらず記述を進めてゆきたい。

第19図1～8および先に説明した第18図1のナイフ形石器は類似した流紋岩を使用しており、同一母岩を利用したものである可能性がある。1は小型の礫を用いた石核である。打面は1つで打面調整を行っている。剥片の生産は打面の打点側の反対側で半円形に行う。2～5は寸詰まりの縦長剥片で主要剥離面も背面の剥離面も同一の方向から剥離されている。打面には

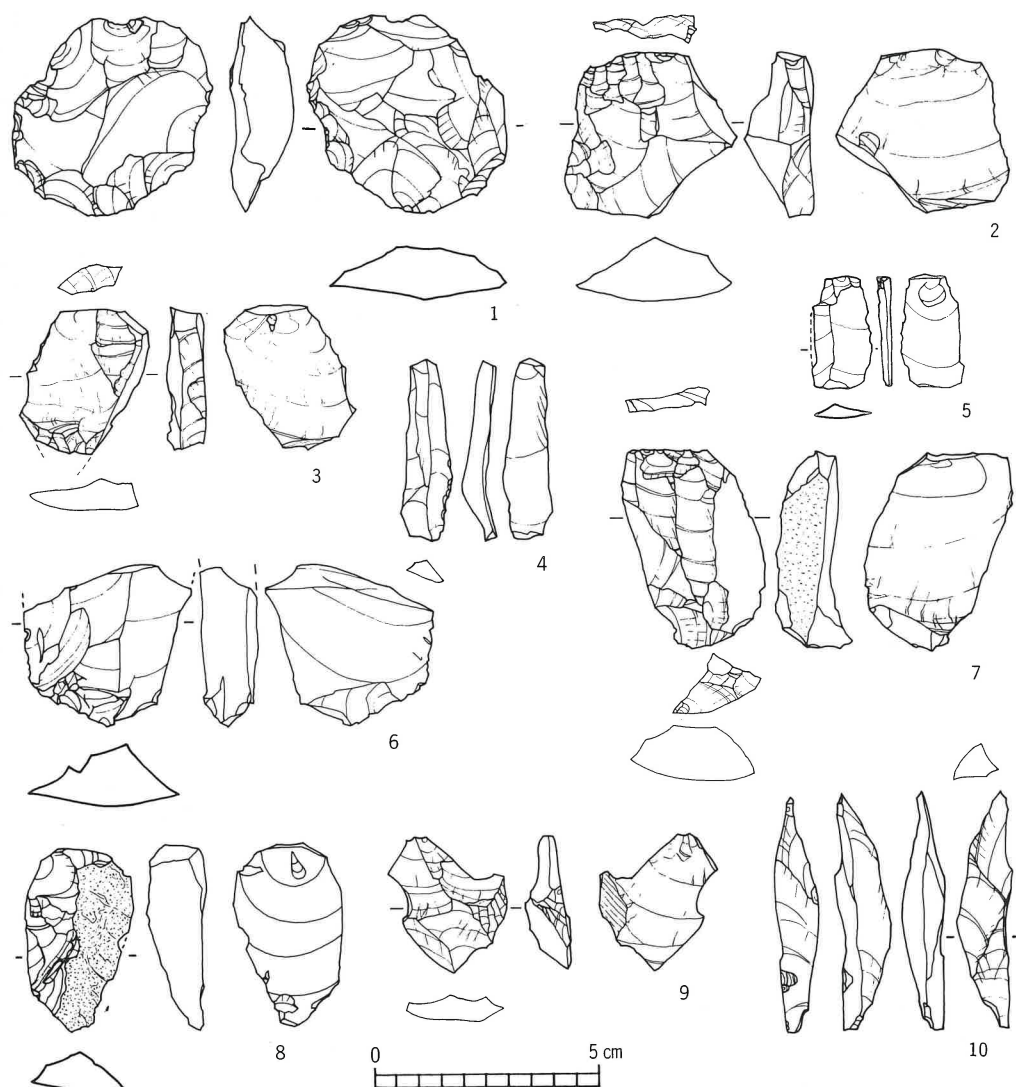


第18図 目久保第1遺跡の旧石器（4層他）



第19図 目久保第1遺跡の旧石器（4層）

どれも打面調整痕が残る。7～9は別の流紋岩の類似した石材を用いている。7は石核で片面に礫面を広く残す。剥片の生産は礫面側からの打撃によるものが多いが、打面を転移し直交する方向から剥離作業も行っている。9は2次加工した削器である。これ以外の石器類で同一母岩の可能性を指摘できるものはない。第20図1は削器である。図の右上にはこの剥片の打面があり両面から2次加工を加えて全周を削器として利用する。2は複数打面で、背面の剥離の方向は異方向のものがある。4は側縁に使用痕の刃潰れがある。5は縦長の小剥片である。6は主要剥離面・背面とも同一方向からの剥離痕をもち基部側を欠損している。7は主要剥離面と背面の大部分は同一方向の剥離方向をもつが舌側の平坦面や一部背面に直交方向からの剥離痕



第20図 目久保第1遺跡の旧石器（4層）

をもつ。8も同一方向の剥離痕をもつ剥片である。9は背面に求心的な剥離痕をもつ。第20図1は赤茶色のけつ岩製剥片で両面とも同一方向の剥離痕をもつ。2は流紋岩の剥片で使用痕はない。3は左図下半に原石面を残す。第23図8は7C区の4層から出土したが、目久保第2遺跡の5層の石器と同一の石材である。白味があり半透明で2側面に原石面を残している。隣接した7B区の5層からも次に述べるように類似した剥片が出土しており、8も5層から遊離した可能性がある。第14図4は16E区のトレンチの4層から5層の境界で出土した。剥片の両側縁に加工を加え削器としている。

b. 5層の石器（第23図5～7）

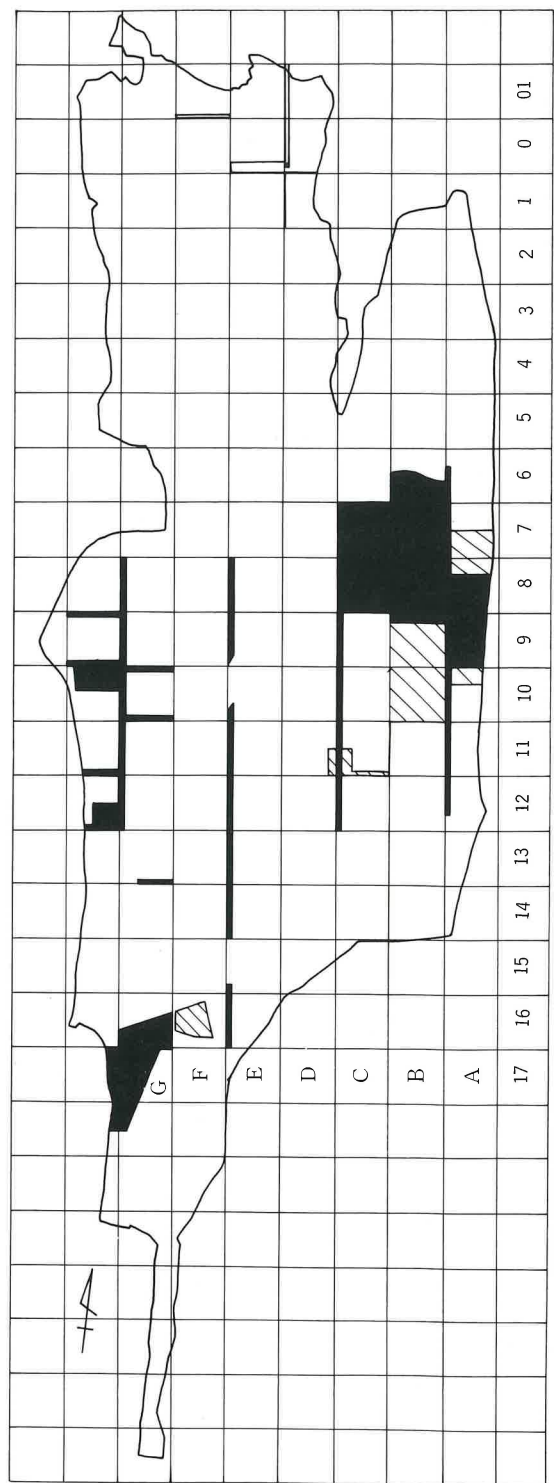
5層からは13点の石器・剥片類が出土した。石材別の内訳は焦げ茶色の黒曜石が2点（剥片-17G区・16G区）、珪化木が7点（石核1点-8A区、剥片と碎片6点-17G区2点・17H区4点）、流紋岩4点（剥片1点-16G区、碎片3点-17G区1点・8A区1点・9A区1点）、珪質の石1点（剥片-7B区）の14点である。

石 核（第23図6）

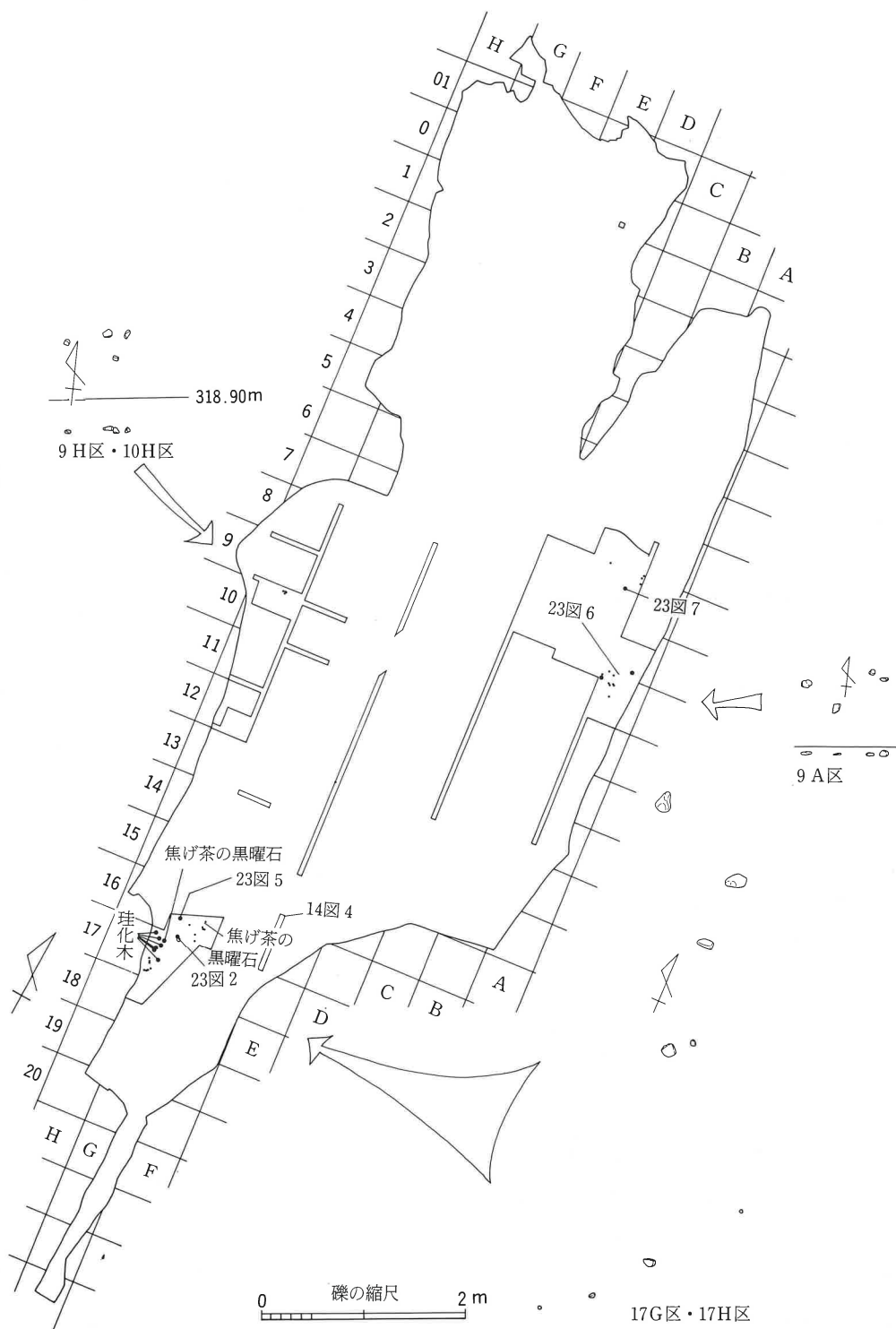
1点出土した。黄褐色で縞模様が入る石材。1つの打面からある程度集中的に剥離したら打面を転移して剥離作業を継続している。長幅比1：1前後の剥片がとれる。

剥 片（第23図5・7）

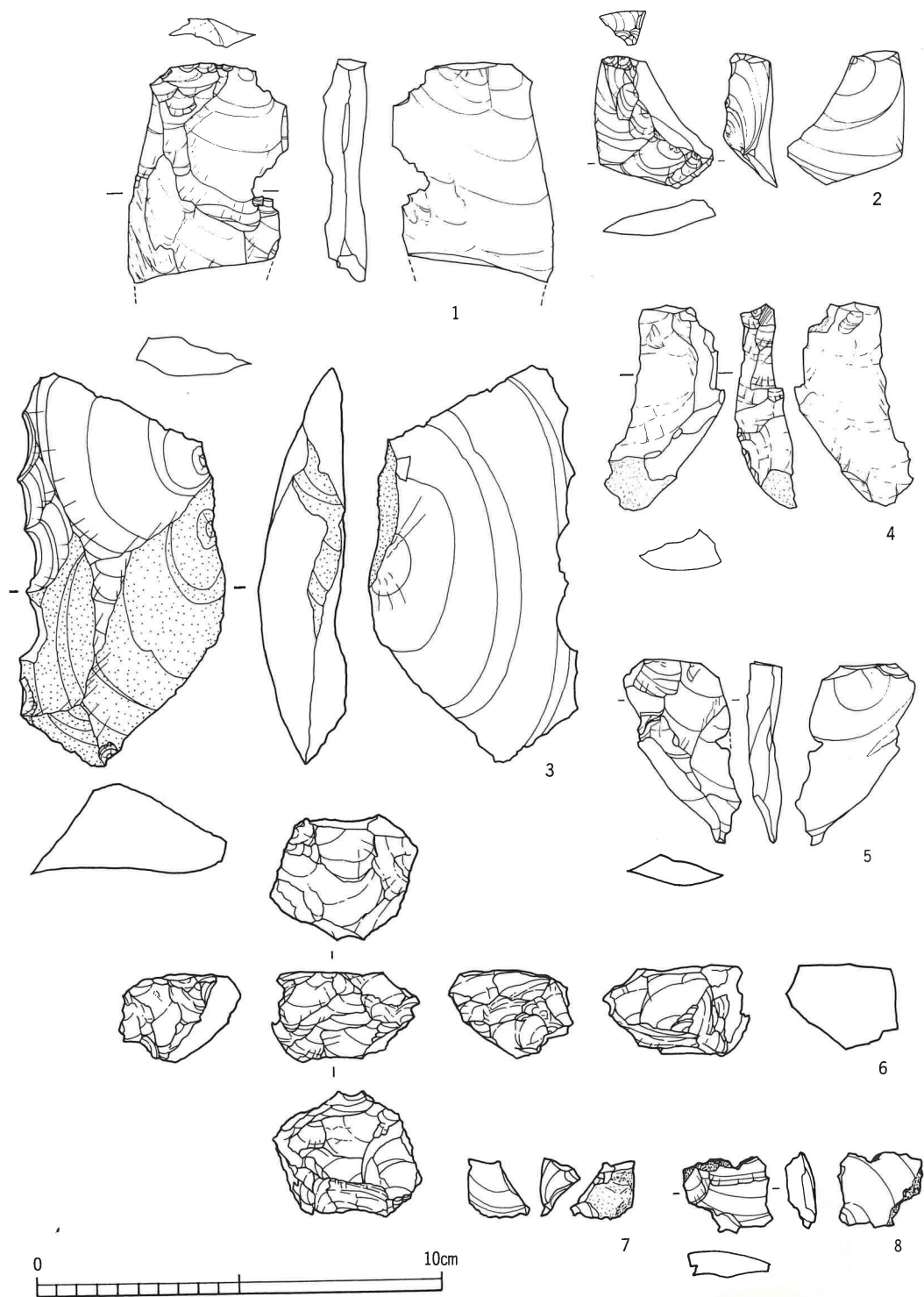
5は両面とも同一方向から剥離し剥片



第21図 5層の発掘区



第22図 5層の遺物出土状態



第23図 目久保第1遺跡の旧石器（4・5層）

は打面に対し斜め方向に剥ぎ取られる。7は白い原石面を残す小剥片で剥離面は半透明である。

第3節 お わ り に

旧石器時代について

4層と5層から旧石器時代の遺物が出土した。4層の遺物は細石刃の時期とナイフ形石器の2時期がある。後者は遺跡の頂上付近に集中部があった。石器は流紋岩を使用したナイフ形石器が最も多く、安山岩的な流紋岩の角錐状石器・佐賀県腰岳産らしい黒曜石製の剥片尖頭器が1点ずつ出土した。同一個体の可能性のある石核と剥片類が出土しているので、調査区内で流紋岩を用いた石器製作が行われナイフ形石器等の流紋岩製の石器が作られたようである。後の2つは剥片類の出土量からみて本遺跡に完成した石器として持ち込まれたものであるが、いずれも縦長剥片を製作する技術をもつという共通点がある。

後述の目久保第2遺跡では4層にA T火山灰が検出されており、本遺跡と共にその下層の5層からは珪化木的な石材の石器を使用する技術伝統が存在したことが分かった。残念ながら資料数が少なく彼等がどんな定型的石器を所持していたのか分からなかったが、これまで大分県内で発見されている岩戸遺跡や宇土遺跡のA T下位の石器群とは石材の様相が異なるようである。

縄文時代について

本遺跡において縄文時代の遺構は集石遺構3基・竪穴遺構1基・土坑と陥し穴のうちの一部があり、遺物には九州では出土例の稀な隆起線文土器1点・有舌尖頭器2点や土器・石鏃・削器等があるが量的には少ない。集石は灼的な状態のものは1基だけで他の2ヶ所は礫が比較的に集中したところであり長期に渡って使用したものとは思えない。遺物の上からは草創期と早期があることになるが、以上の状況を踏まえて考えてみると、多数の人間が長期間居住した遺跡ではなく少数の人が通り過ぎたり短期間生活する遺跡であろう。

陥し穴について

16基の陥し穴を調査したが、形態は変化に富んでいた。大まかには円形と長方形がある。円形の方はアカホヤ火山灰が入っている確証はなかった反面、長方形の例は早期の層で検出したもののアカホヤ火山灰が入っているとすべきものであった。配置方法について言えば5～7号陥し穴は丘陵の出入りを遮る形の配置状態であった。また12号と14号陥し穴は底面の施設は異なるが、適当な距離に並列していること、底面よりも上面の方が狭まる例が本遺跡ではこの2基に限られること、規模の類似等から同時に使用した可能性を指摘したい。

表 1 目久保第 1 遺跡石器観察表

図番号	器 種	出土区	層	計 測 値				石 材	備 考
				長さ	幅	厚さ	重さ		
13図 1	石 鏃	8 A	3 b	2.1	1.6	0.3	0.6	姫 島 0 b	0b は黒曜石
〃 2	〃	9 A	2 b	2.2	1.3	0.4	1.0	〃	
〃 3	〃	17G	3 b	2.0	1.7	0.3	0.7	〃	
〃 4	〃	15G		1.3	1.4	0.3		〃	13号陥し穴出土
〃 5	〃	8 A	3 b	1.6	1.8	0.4	0.7	〃	
〃 6	〃	8 D	3 b	1.3	1.7	0.2	0.5	安 山 岩	
〃 7	〃	11D		1.4	1.2	0.2		〃	8 号陥し穴出土
〃 8	尖頭状石器	15 F	3	3.2	2.3	1.2	6.3	姫島ガラス	ガラス質安山岩
〃 9	〃	13G	3	2.4	1.8	0.8	2.9	安 山 岩	
〃 10	剥 片			1.0	0.8	0.25	0.1	姫 島 0 b	
14図 1	〃	11H	3 b	4.8	3.5	1.9	22.9	黒 曜 石	1～5 は風化が強く表面はこげ茶色で、内部は黒色
〃 2	〃	10H	3 b	2.7	1.7	0.6	1.9	〃	
〃 3	〃	11H	3 b	1.8	2.6	0.6	2.5	〃	
〃 4	削 器	15E	4～5	3.7	2.9	1.1	10.8	〃	
15図 1	有舌尖頭器	0 D	3 b	8.0	2.9	1.2	20.0	流 紋 岩	
〃 2	〃	8 B	3 b	4.3	2.0	0.7	4.9	黒 曜 石	14図 1 等と同石材
〃 3	細 石 刃	8 A	4	1.6	0.7	0.15	0.1	〃	
18図 1	ナイフ形石器	16G	4	3.0	2.4	0.6	2.9	流 紋 岩	
〃 2	〃			3.8	2.1	0.6		〃	
〃 3	〃	10H	3 b	3.9	1.5	0.8	3.2	安 山 岩	
〃 4	〃	14E	4	3.1	1.5	0.5	2.4	流 紋 岩	
〃 5	〃	9 H	3 b	4.2	1.8	0.55	3.8	珪 化 木	
〃 6	角錐状石器	8 B	4	6.1	2.2	1.5	22.4	流 紋 岩	
〃 7	剥片尖頭器	9 G	4	6.3	3.1	1.1	15.2	黒 曜 石	
19図 1	石 核	8 B	4	3.6	4.2	3.6	47.2	流 紋 岩	
〃 2	剥 片	8 B	4	2.4	2.7	0.7	3.5	〃	
〃 3	〃	8 B	4	2.5	2.4	0.6	2.1	〃	
〃 4	〃	8 B	4	2.3	2.5	0.7	3.3	〃	
〃 5	〃	8 B	4	3.4	2.5	0.8	5.6	〃	
〃 6	〃	8 B	4	3.8	3.4	1.7	15.1	〃	
〃 7	石 核	8 B	4	3.6	3.8	2.3	28.4	〃	
〃 8	剥 片	8 B	4	3.0	1.8	0.5	2.2	〃	
〃 9	削 器	8 B	4	4.3	4.5	1.7	29.8	〃	
20図 1	〃	9 A	4	4.4	4.5	1.4	25.3	〃	
〃 2	剥 片	8 B	4	3.7	3.9	1.5	15.6	〃	
〃 3	〃	15 F	4	3.2	2.8	0.9	7.9	〃	
〃 4	〃	9 A	4	4.0	1.1	0.5	2.1	〃	

図番号	器 種	出土区	層	計 測 値				石 材	備 考
				長さ	幅	厚さ	重さ		
20図 5	剥 片	8 A	カクラン	2.5	1.4	0.3	1.1	流 紋 岩	
〃 6	〃	9 A	4	3.6	3.8	1.3	15.9	〃	
〃 7	〃	8 B	4	4.4	3.3	1.4	20.8	〃	
〃 8	〃	8 B	4	4.1	2.5	1.3	10.1	〃	
〃 9	〃	8 B	4	3.0	2.7	0.9	3.5	〃	
〃 10	〃	9 H	3	5.2	1.2	1.0	3.8	〃	
23図 1	〃	8 B	4	5.3	4.0	1.1	21.5	頁 岩	
〃 2	〃	9 A	4	3.2	2.9	1.2	8.1	流 紋 岩	
〃 3	〃	17G	4	9.8	5.2	2.0	87.9	姫島ガラス	
〃 4	〃	15F	4	5.0	3.0	1.4	10.2	珪 化 木	
〃 5	剥 片	16G	5	4.5	3.0	0.7	7.6	流 紋 岩	
〃 6	石 核	8 A	5	3.0	3.7	2.7	26.9	珪 化 木	
〃 7	剥 片	7 B	5	1.5	1.6	1.0	1.5	珪 質 岩	
〃 8	〃	7 C	4	1.9	2.2	0.6	2.2	〃	

4 ^{めくぼ} 目久保第2遺跡

第1節 調査の概要

1. はじめに

目久保第2遺跡は速見郡山香町大字久木野尾字目久保に所在する。遺跡の周辺では標高300m強の丘陵が広がる地形が展開する。各々の丘陵は永年の間に小河川によって浸食を受け続けており、細長い台地状の地形が南方から北方に向かって次第に高度を下げながら横たわっている。目久保第2遺跡はそうした丘陵の一つに立地しており、調査前には畑地として利用されていた。道路予定地は丘陵を斜めに横切る形で横断することになっている。

目久保第2遺跡の北西約200mには谷を隔てて目久保第1遺跡がある。反対に南東方向の谷を隔てた丘陵は、土壌の堆積が少ない状態であることを本遺跡の調査中に確認した。上面と東側の谷との比高差は約20mで、西側の谷との比高差は約25mである。調査範囲は丘陵東斜面が急傾斜であるためにこれを除外し、西側も同様の理由で除外した。調査区の中央部から北部にかけては比高差はほとんどないが、一度くびれた後再び緩やかな小丘陵を形作っている。調査地区の標高は南部で最も高く333.5m、北端で321.0mであった。

調査は重機による表土の除去から始めたが、丘陵の西部では遺物包含層が消滅し次第に下層の礫混じりの層だけの部分に移っていったので西部地区も除外した場所がある。調査区は10m四方の区画に分け、北から南に1～25区、東から西にA～1区とし一区画の呼称を例えば5A区とした。

遺跡からは旧石器時代・縄文時代の遺物が出土したほか、陥し穴や土坑を検出した。ただ、遺物の出土量は調査面積の割には少量でありこの遺跡の性格を反映している。このほか大風によって樹木が根こそぎ倒壊した痕跡である風倒木痕を多数検出し、調査では平面土層図と立ち割り土層図とを作成したがここではそれを指摘するだけに留めておく。なお、遺物包含層は火山灰層ではあるが通常よりも硬かったので、移植コテによる掘り下げは思うようにはかどらなかった。

2. 層 序

基本的な層序は目久保第1遺跡と全く同じである。目久保第2遺跡では表層から火砕流堆積物の上層までを6層に分類した。



第1図 目久保第2遺跡の調査区位置図

1層 表土であり耕作による攪乱その他により本来の自然堆積層が欠き乱された層である。

2層 a・bの二つに分ける。

2a層は褐色土層でアカホヤ火山灰(Ah)の風化土壌である。アカホヤ火山灰は約6300年前に大隅半島の南海底にある鬼界カルデラから噴出したものである。

2b層はアカホヤ火山灰の純粹部分で本遺跡では風倒木痕に残るほか、2a層の下部にブロック状の小さな塊として残るだけである。

2層自体も本遺跡全体の中では局所的な存在でしかなく、11～16C～E区に分布するだけである。

3層 a・bの二つに分ける。

3a層は比較的に軟らかい土層で黒色を呈している。この3a層も部分的な存在である。上に2層が残っている場所でも3a層があるとは限らない。風倒木痕に3a層が残るところがある。

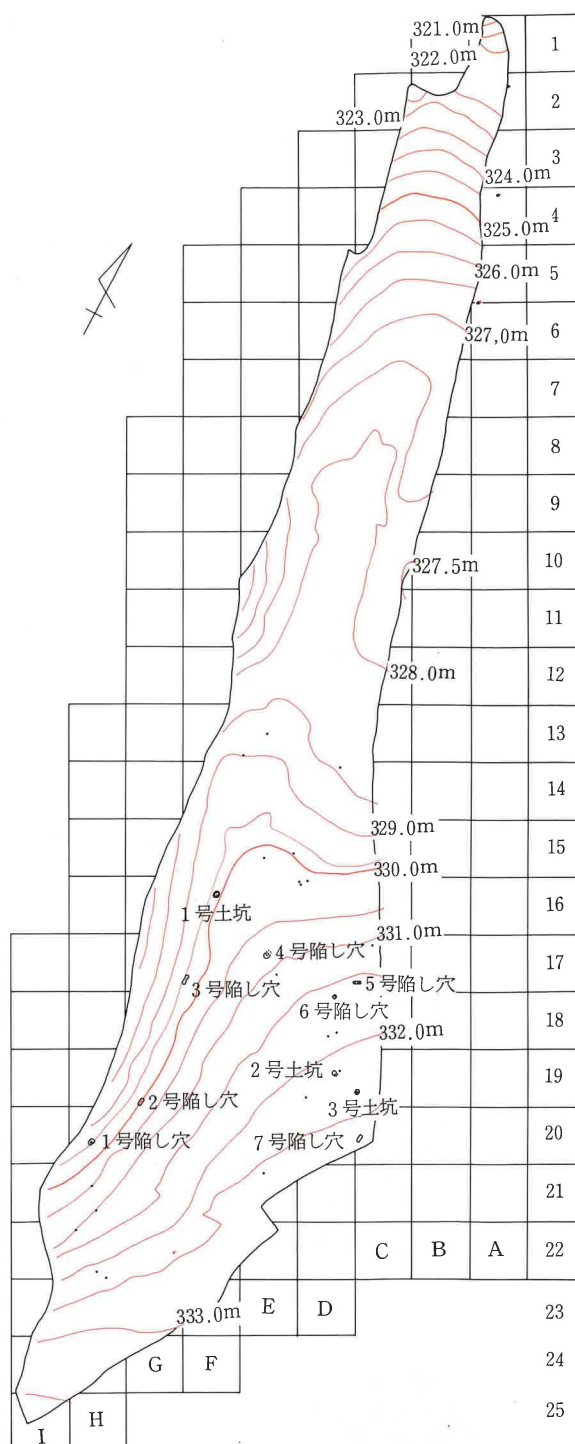
3b層は硬い土層で黒褐色を呈し、遺跡内の南部から中ほどにかけて東寄りに分布する。

3層は縄文時代早期の遺物包含層である。

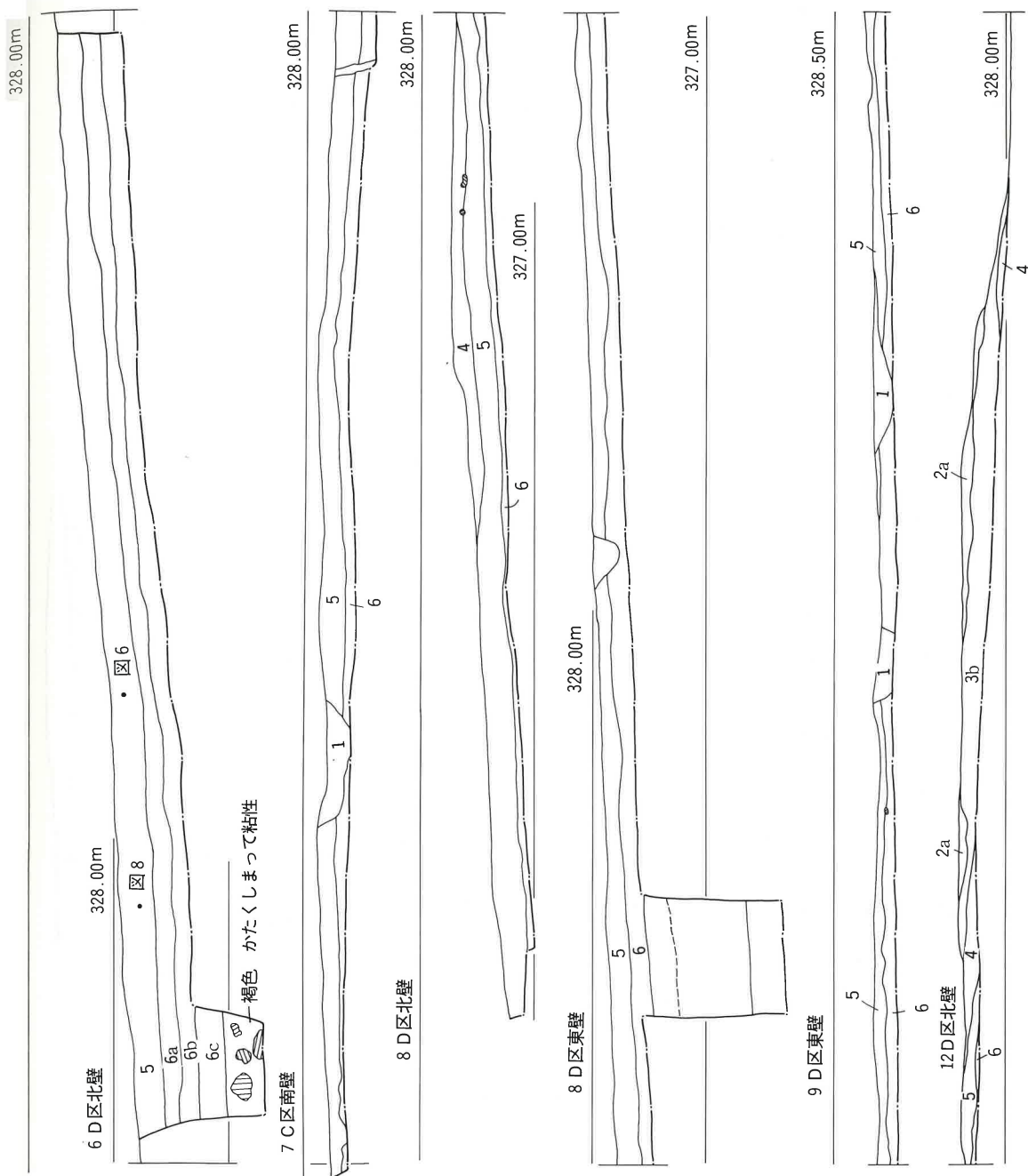
4層 a・bの二つに分ける。

4a層は褐色土層で3b層との境界は明瞭ではない。

4b層は青緑色を帯びた軟らかい褐色土層でザラザラして砂質である。



第2図 目久保第2遺跡の遺構配置図
(10cm方眼)

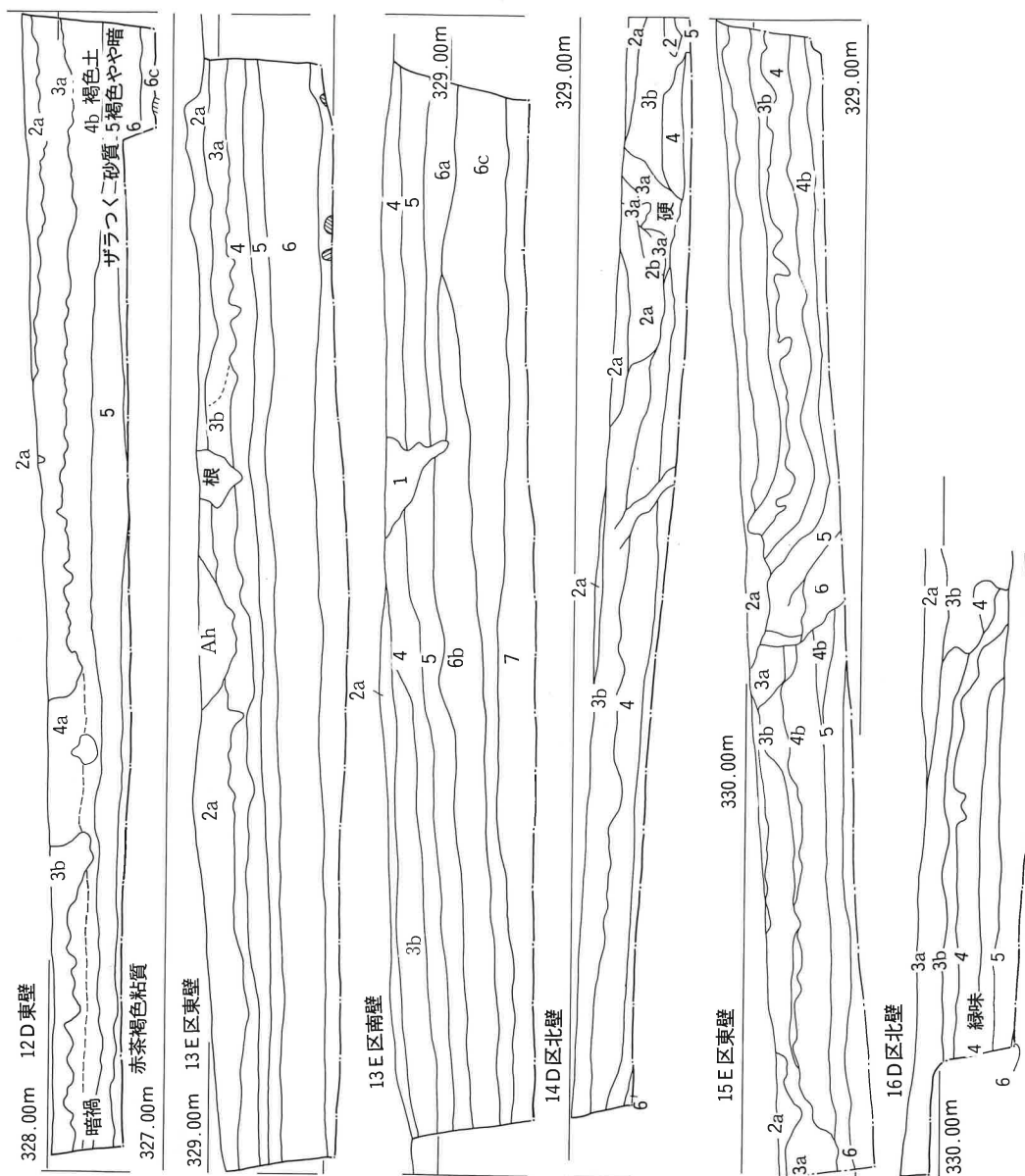


第3図 目久保第2遺跡の土層図 (1)

火山灰分析の結果4層にはA Tを含んでいる。旧石器時代の遺物包含層である。

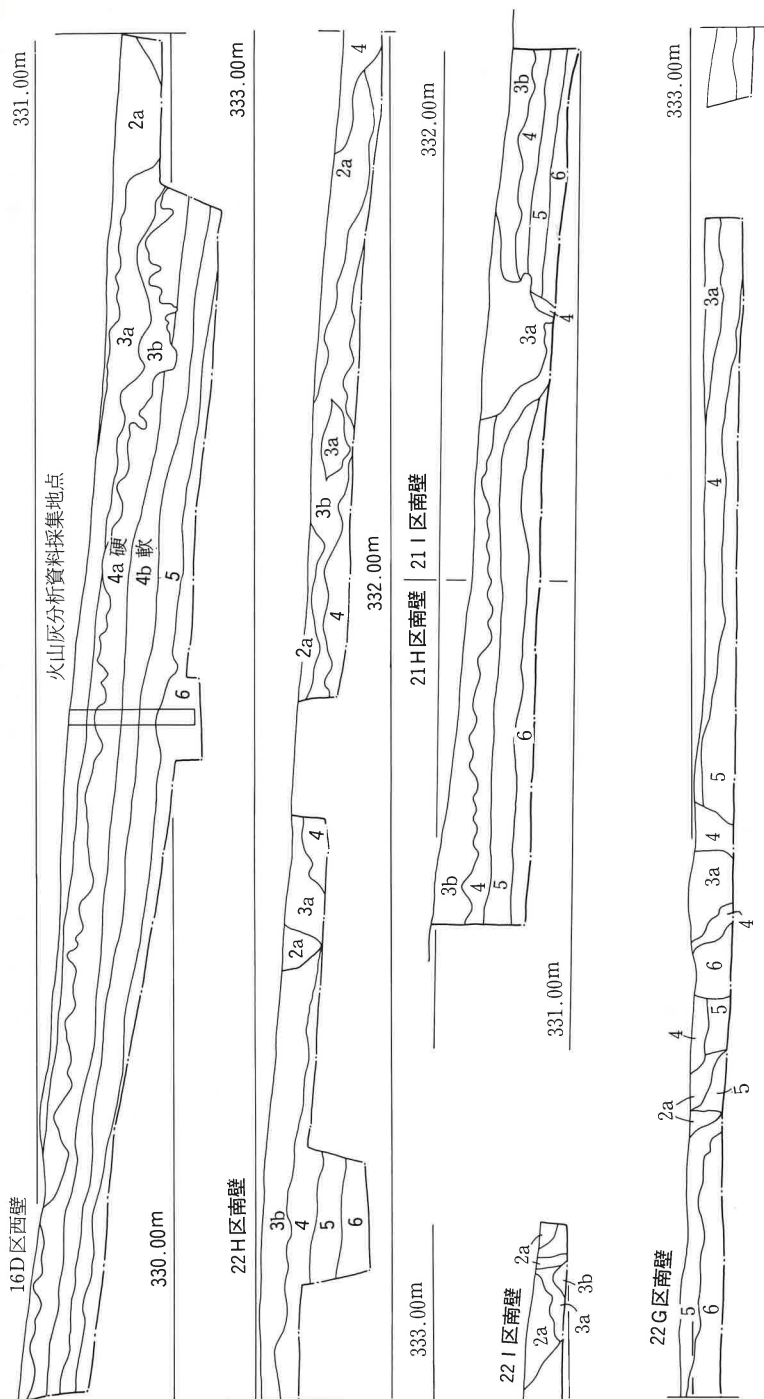
5層 暗褐色ないし灰褐色の粘土質の土層である。

旧石器時代の遺物包含層である。



第4図 目久保第2遺跡の土層図 (2)

- 6層 a・b・cの三つに分ける。
- 6a層は粘土質で硬い赤褐色土層である。
- 6b層は赤茶色ないし褐色の土層で、場所によってはこの層に相当する部分は砂質のところもある。
- 6c層は赤茶褐色の土層で硬い。



第5図 目久保第2遺跡の土層図(3)

尾根状の地形に移行しているがこの付近では6層が表土直下に現れていた。

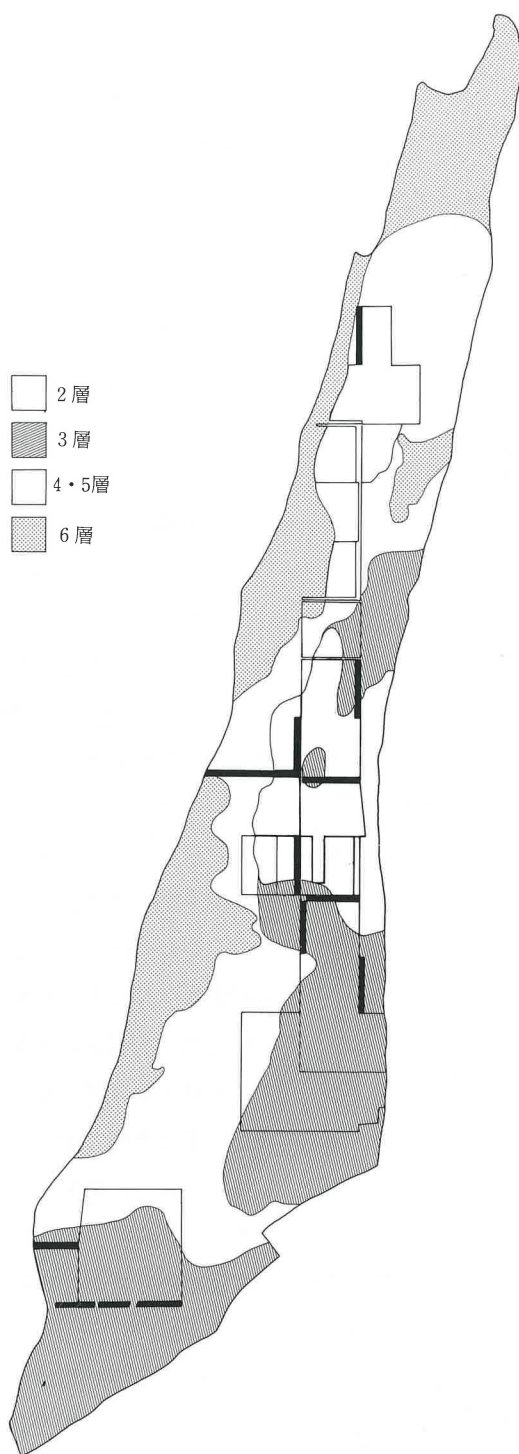
6層は無遺物層である。

調査区の基本的層序は以上のとおりであるが、

次に部分的な場所毎の堆積状態について述べておきたい。

目久保第2遺跡は平坦な台地の上にあるのではなく、傾斜と凹凸のある地形に立地しているため層序の堆積状態や残存状態は均一ではなかった。第6図に示したように表土を除去した段階に現れた層は場所によってバラバラであり、遺物の分布状況を考える際にこのことを念頭におく必要がある。先にも少し触れたが、2層は11～16 C・D・E区にしか分布せず(平板で図化した図であるため多少の誤差を含んでいるが)、3層はその北側と南側にある。

4層と5層に関しては一括して白色域で示した。丘陵の北部では



第6図 堆積層の分布と調査地区

第2節 検出した遺構と遺物

目久保第2遺跡では遺構としては陥し穴と土坑を検出しただけであった。この他に散発的に焼け石があったが集石やそれに近いものはなにもなかった。

1. 陥し穴 (第7～8図)

1号陥し穴 (第8図左下)

20H区で検出した。長軸は等高線に平行している。この付近では早期の層すら流失していたが埋土の上部にはアカホヤを含むので、アカホヤ火山灰層よりも上から掘り込まれたのであろう。平面形はどちらかと言えば長方形で、底面に穴がありその下面は浅い円形の穴に分かれていた。壁の立ち上がりは斜面をなす。長さ131cm・幅73cm・深さ103cmである。

2号陥し穴 (第*図中)

19G区にあり1号陥し穴からは10m離れている。長軸は等高線と平行である。ここも早期の層が流失しているが、陥し穴の埋土に堆積した褐色土は縄文時代早期の3層よりも上層の2a層であろう。平面形は長方形をなし壁は垂直に近い。底面には穴はないが短辺側の壁に横方向の穴が穿たれている。長さは検出面で144cm・幅63cm・深さ82cmである。

3号陥し穴 (第7図左)

2号陥し穴からは北方に11m離れ17F区で検出した。ここも早期の層は流出している。掘り込み面の所見も2号陥し穴と同じである。検出面・底面とも長辺の壁が内部に向かって突出し底面はやや中くぼみである。底面

に直接2個の石が置かれていたが、石の下にも辺りにも穴はなかった。規模は長さ176cm・幅が狭いところで78cm、最大で両端とも70cm・深さは80cmである。

4号陥し穴 (第8図右上)

17E区の4a層上面で検出した風倒木痕と間違えて半割してしまい検出面の半分は不明である。ただし半割した小トレンチの内部に収まる規模である。

平面形は長方形で底面の中央に2段掘りの穴がある。検出面から底までの深さは106cm幅は85cm。埋土内にアカホヤを含んでいる。

5号陥し穴 (第8図右下)

17C区から17D区にかけて3b層上面で検出した。中央部はトレンチで破壊した。姫島産ガラス質安山岩剥片1が出土。

平面形は細長い楕円形で底面には小穴が2個長軸に直行して並んだものが4ヶ所ある。これらは等間隔に並んでいるのではなく、まず中央部に1ヶ所ありそこから西方向に2ヶ所が等間隔に並んでいる。中央部から北方向には1ヶ所しかないがその間にもう1ヶ所の余地がある。

規模は長さ184cm・幅68cm・深さ72cmである。

6号陥し穴 (第8図左上)

18D区の3b層上面で検出した。埋土には基本土層の2層が堆積し、パサパサし軟らかい黄褐色土層にはアカホヤが含まれているらしい。18D区は表土の下層がすぐに3b層であったが、6号陥し穴はアカホヤ火山灰層よりも上から掘り込まれたものである。

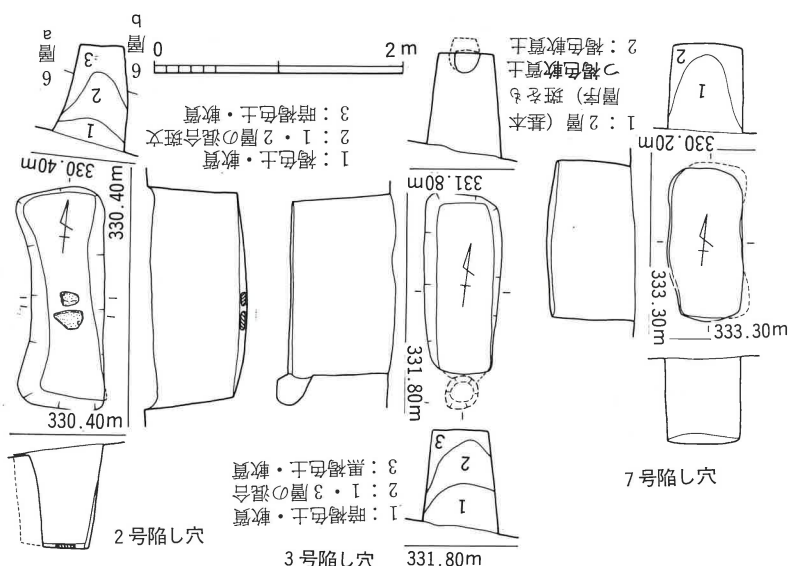
平面形は方形で底面には傾いて穴が掘り込まれている。壁は4面とも垂直に近く立つ。規模は平面が68cm×63cmで

底面までの深さは64cmである。

7号陥し穴

(第7図右)

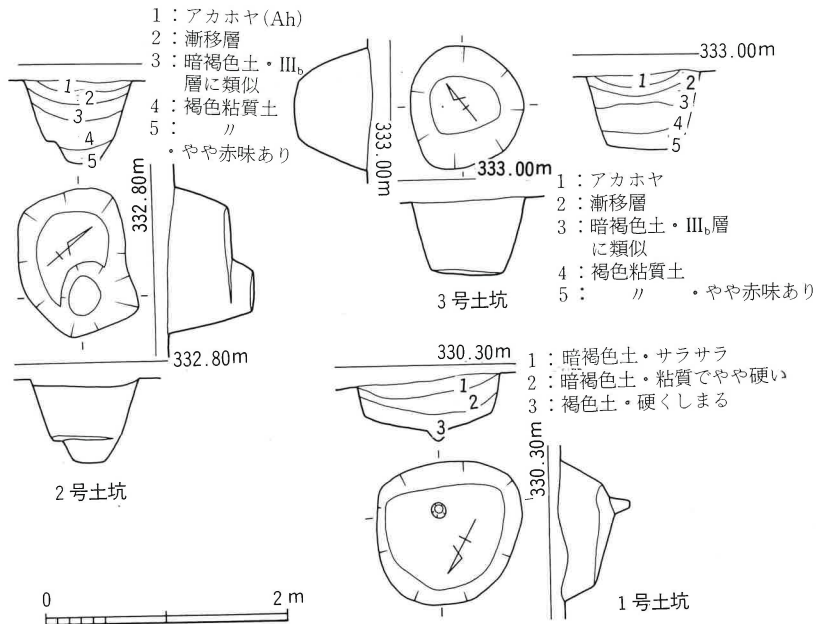
20C区の表土直下、3b層上面で検出した。平面形は隅丸の長方形である。壁面は垂直に立ち検出面付近でも壁の壊れは認められない。規模は長さが検出面で122cm・底面で127cm、幅は59cm、深さ



第7図 目久保第2遺跡の陥し穴

は70cmである。

1号～7号まで
陥し穴は全てアカ
ホヤ火山灰層より
上から掘り込まれ
たものであるが詳
細な使用時期は不
明である。



第9図 目久保第2遺跡の土坑

2. 土 坑 (第9図)

3基見つけたが性格は不明である。

1号土坑 調査区西部の斜面では表土直下に6層が現れるが、1号土坑は16F区の6層上面で検出した。平面形はいびつな円形で、底に小穴1がある。土坑の規模は長さ120cm・幅117cm・深さは底面まで44cmである。埋土の第1層はアカホヤを含む土層であろう。

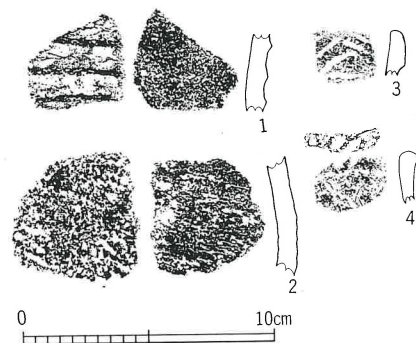
2号土坑 表土直下が3b層の19D区で2号土坑を検出した。長さ116cm・幅93cmの角ばった楕円形の平面形をし、底面までは52cmあり片側に検出面から71cmの穴がある。埋土の特徴からこれもアカホヤの上層から掘り込まれたと判断している。

3号土坑 これも19D区で検出した。長さ94cm・幅102cm・深さ64cmのほぼ円形をなす。埋土の特徴は全く2号土坑と同じであった。

3. 縄文時代の土器 (第10図1～4)

1は20G区付近の表土で採集したものである。内面はナデ仕上げしており平滑で、外面は3段に粘土紐を貼り付けている。粘土を横方向に連続的につまんだことが上下に残る爪跡から分かる。長石と石英を混入。前期の縄3式土器である。

2は区の3b層から出土した。内面はナデ仕上げで外面には全体に捺糸文がある。胎土に角閃石と長石を



第10図 縄文時代の土器

混入している。

3は17C区の3b層から出土した。口縁部が一段厚くなり外面に斜めに押引文がある。

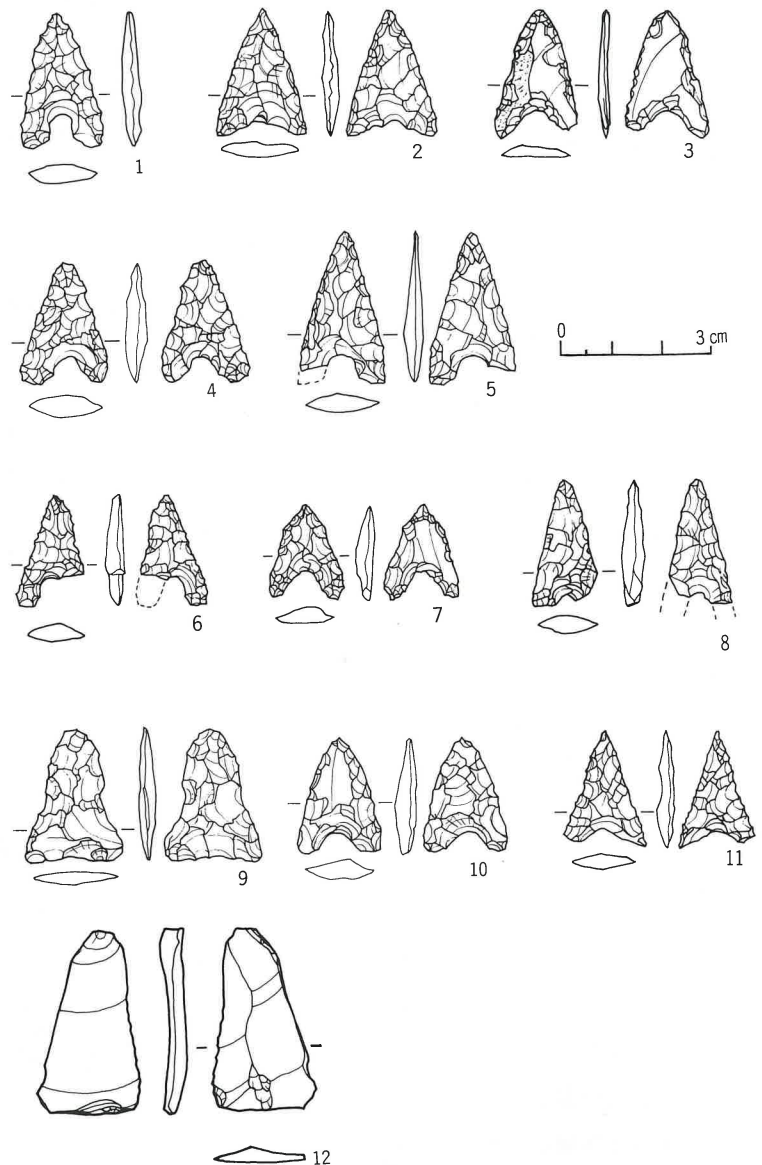
4は15D区の3b層から出土した。内外面とも無文で口唇部に刻み目がある。3・4とも胎土に角閃石と長石を混入している。

4. 縄文時代の石器 (第11図1～11)

縄文時代と考える石器には石鏃・石核・剥片・碎片がある。石核は1点あり姫島産ガラス質安山岩製である。剥片・碎片類の石材産地別の内訳は姫島産黒曜石33点・姫島産ガラス質安山岩18点・黒色の黒曜石11点・安山岩19点となる。

石核は4cm×4.5cm×2cm程の大きさである。

石鏃は12点出土した(表1)。1は2～3a層から、2・3は2層から出土したもので姫島産黒曜石1点・安山岩2点からなる。4・5と14D区出土の小破片は3a層出土で姫島産黒曜石2点に安山岩1点である。6～11は3b層出土で姫島産黒曜石2点・姫島産ガラス質安山岩1点・安山岩3点からなる。また、長さが3cmを超えるのは1点だけで全体とし



第11図 縄文時代の石器

表 1 目久保第 2 遺跡出土石器観察表 (単位はcm・g)

図-No	出土区	出土層	器 種	計 測 値				石 材	備 考
				長さ	幅	厚	重 量		
11-12	15E	3b	剥 片	3.7	2.1	0.5	3.2	An	
11-5	22H	3a	石 鏃	3.05	1.7	0.4	1.6	〃	
11-10	17E	3b	〃	2.25	1.7	0.4	1.4	〃	
11-9	13E	3b	〃	2.7	2.0	0.4	1.3	〃	
11-11	21H	3b	〃	2.3	1.6	0.3	0.7	〃	
11-2	15E	2	〃	2.5	1.8	0.35	1.3	〃	
11-3	21H	2	〃	2.5	1.7	0.2	0.8	〃	
11-4	16D	3a	〃	2.4	1.7	0.4	1.2	HO	
11-7	16D	3b	〃	1.9	1.5	0.35	0.6	〃	
11-6	13E	3b	〃	2.2	1.3	0.4	0.7	〃	
	14D	3a	〃	0.8	0.3	0.2	0.1	〃	小破片・14D・1
11-1	15E	2~3a	〃	2.7	1.6	0.4	1.1	〃	
11-8	18D	3b	〃	2.4	1.3	0.4	1.1	HG	
13-8	19D	4	ナイフ形石器	6.0	1.6	0.7	5.9	R	
13-2	22H	3b	〃	1.8	0.7	0.35	0.4	HG	
13-3	22H	3b	〃	3.1	1.2	0.5	2.6	R	
13-9	19D	4	剥 片	8.3	5.1	1.1	22.9	R	
13-5	18D	3b	〃	3.9	2.8	1.2	9.4	R	
13-4	18D	3b	〃	4.1	3.0	0.9	8.5	R	
13-7	17D	3b	〃	3.2	2.9	1.2	7.9	R	
13-11	17D	4	〃	4.4	3.6	1.1	14.7	R	
13-6	21E	3b	〃	2.5	2.3	0.6	2.8	R	
	17D	3b	〃				2.4	R	27
13-10	20D	4	〃	4.3	3.1	1.5	20.0	R	
13-1	16D	3a	細石刃	1.7	0.6	0.2	0.3	R	
14-4	18D	3b	剥 片	2.8	2.2	0.9	4.4	珪化木	13
14-2	18D	3b	〃	4.0	2.8	0.7	6.9	〃	30
14-1	18D	3b	〃	2.9	2.5	0.7	5.1	〃	36
14-3	18D	3b	〃	3.6	1.9	0.9	6.2	〃	24
14-6	6 D	5	〃	2.5	1.4	0.6	1.3	〃	
14-8	6 D	5	〃	1.7	1.7	0.3	0.8	〃	
14-5	7 C	5	〃	3.1	2.8	0.8	4.8	〃	
14-9	7 C	5	〃	2.9	2.1	1.0	3.4	〃	
14-7	8 D	5	〃	2.2	1.8	1.9	5.3	〃	

○17D-3 茶色 4
 ○ 2 -19 〃 3b
 ○ 2 -31 〃 3b
 ○ 2 -38 3b
 ○19D-3 〃

他に
 流21E-1 (3b)
 2 -27 (3b)

ては2.5cm前後に集中する。重量は1g±0.4gに集中する。

使用痕のある剥片 (第11図12)

安山岩製の剥片の1側辺に刃潰れがある。

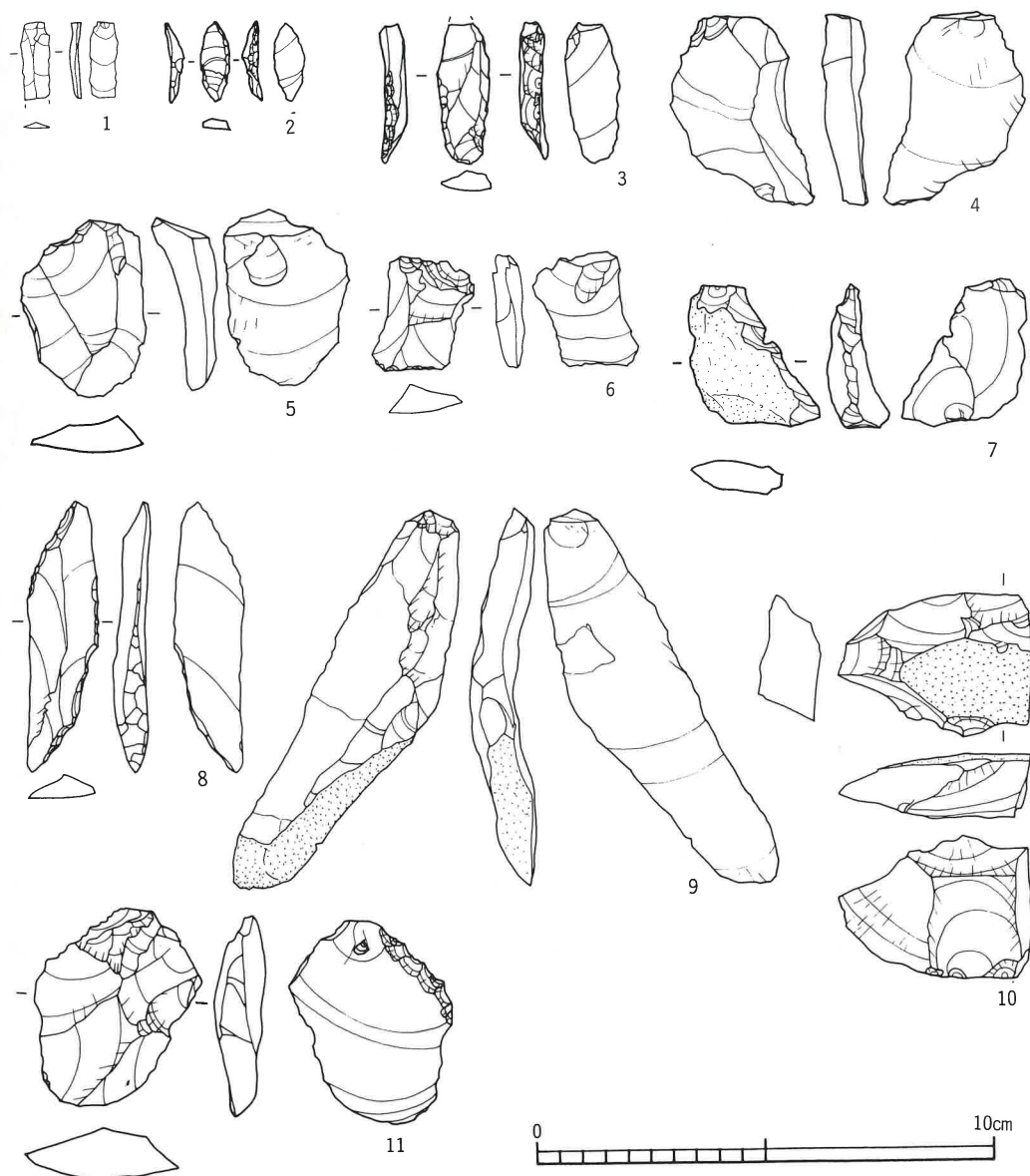
その他、剥片に姫島産ガラス質安山岩を石材としたものがあるが全18点のうち4層からの出

Archaeological site plan of the 2000 excavation at the 2000 site, showing three sections: 5層 (5th floor), 4層 (4th floor), and 2・3層 (2nd and 3rd floors). The plan includes various labeled features such as 14図 1 through 14図 11, 13図 1 through 13図 11, 11図 1 through 11図 11, and 14D・1. It also shows the locations of 珪化木 (silicified wood) and 珪化木 (silicified wood). A north arrow is present in the upper right section.

第12図 目久保第2遺跡の調査区発掘深度

5. 旧石器時代の石器 (第13図～14図)

目久保第2遺跡では3 a 層・3 b 層・4 層・5 層から旧石器時代の石器が出土した。3 層は縄文時代早期の遺物包含層でもあり、ここから出土した旧石器は下層から浮上したものであろう。後述のように、火山灰分析の結果4 層には約21000年前頃のA T (始良丹沢火山灰層) を含むことが判明しているので5 層の遺物はこれよりも古い年代のものである。旧石器としてここで扱うのは1 点を除いて全て流紋岩を石材とするものである。



第13図 目久保第2遺跡の旧石器 (1)

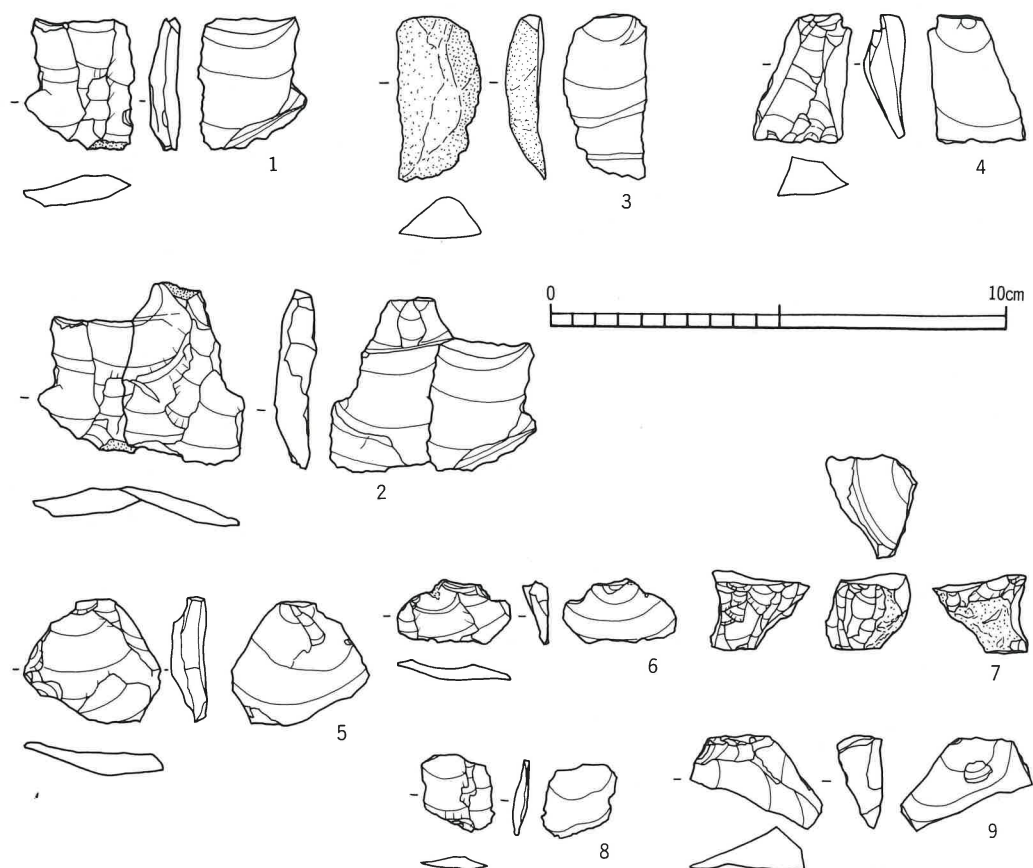
3 a 層の石器 (第13図 1)

1は16D区から出土した細石刃で、打点の反対側は折断している。

3 b 層の石器 (第13図 2～7・第14図 1～4)

第13図 2・3は22H区から出土したナイフ形石器である。2は姫島産ガラス質安山岩を石材としている。流紋岩でないのはこれだけである。3は側辺の一方はすべて、片方は基部を中心に刃潰し加工を行っている。第13図 4・5は18D区出土の剥片である。5の左図下端から右側にかけて使用痕がある。第13図 6は21E区出土の剥片である。第13図 7は片面に原礫面を残す剥片である。

第14図 1～4は珪化木製の石器である。すべて18D区の3 b層から出土したので縄文時代早期の石器と考えるべきかもしれないが、珪化木の剥片が他にも19D区の4層から出土した点や他の遺跡ではこの種の石材を早期には使わないと思うので、旧石器として扱う。1はもう一つの石器(第14図 2の左図の右側の剥片)と接合した。1の打面は現状よりもっと上にあったが節理面で割れている。



第14図 目久保第2遺跡の旧石器 (2)

4 層の石器（第13図 8～11）

8 は表裏とも同じ方向からの打撃による剥離面をもつナイフ形石器で、主要剥離面の基部は二次加工によって打点を剥ぎ取っている。9 は斜め方向に剥離された剥片である。打面以外は全て同じ方向からの打撃による剥離面をもつ。10 は板状の剥片を素材とした石核である。11 は主要剥離面の打点の右側に二次加工を加えた削器である。

5 層の石器（第14図 5～9）

5 層から出土した石器は調査区北部の 6 D 区から 2 点、7 C 区から 2 点、8 D 区から 1 点の計 5 点である。わずかに透明で黄色味を帯びた白っぽい石材を利用している。7 は石核である。

第3節 ま と め

目久保第 2 遺跡からは縄文時代早期・前期と旧石器時代の遺物が出土し、縄文時代早期よりは新しいことが分かる土坑 3 基と陥し穴 7 基を検出した。縄文時代に関しては出土したのは土器少量と石鏃を主体とする石器類であり、本遺跡は主に狩猟に関連する場として利用されていたものとする。縄文時代早期の居住遺跡によくあるような集石遺構がなかったことも本遺跡がそのような性格のものではなかったことを示すものと言えよう。石鏃が 2 層・3 a 層・3 b 層から出土していたり、付近の須久保遺跡から縄文時代中期の遺物が少量出土していることからこの辺り一帯が狩猟の場だったのであろう。

旧石器時代に関しては細石刃の時期・ナイフ形石器の時期・A T 下位の時期の 3 時期を調査した。特に A T 下位の石器については典型的な石器が見つからなかったことと調査面積を広げる余裕がなかった点が残念である。

目久保第2遺跡土壤中火山ガラス抽出分析

竹 村 恵 二 (京都大学理学部)

1. はじめに

火山灰層序学は、考古学遺跡での年代決定について重要な役割をになう方法のひとつとして最近非常に重要視されてきている。特に広域火山灰の認定が進むにしたがい、日本各地の遺跡層位の関係が明らかにされつつある。ただ、火山灰は堆積場の条件などから、肉眼でいつでも認定できるとはかぎらない。したがって、土壌中から火山灰に関する情報をとりだし、それを広域火山灰などと対比することにより、年代の情報を得ることが必要となる。

肉眼観察困難な堆積物中のテフラの分析については吉川(1981)や町田・新井(1983)などの研究がある。吉川(1981)は大阪平野のボーリング試料から洗いだした火山ガラスの量の変化を検討して降灰層準を認定し対比の手段にしている。町田・新井(1983)は、福井県鳥浜貝塚の試料5-10cmおきに検討して、鬼界-アカホヤ火山灰(K-Ah)の降灰層準の認定を行っている。これらの研究は、堆積物中の火山ガラスなどのテフラ物質を系統的に調査することが編年上有効な方法であることを示していた。筆者は降灰層準の認定のために連続的な分析による火山ガラスの量的な変化を求め、その火山ガラスの屈折率や形態によってグループ分けする分析を進めてきている。特に屈折率測定においては、檀原ほか(1985)や横山ほか(1986)によって報告された温度変化型屈折率測定装置を用いることにより大量の正確なデータを得ることができるよう土壌中の火山ガラスの量的な変化とその火山ガラスの屈折率を中心とした特徴を把握する分析を土壌中火山ガラス抽出分析とよんでいる。この分析法を用いれば、肉眼観察困難な堆積物中の火山灰の降灰層準の正確な決定と、広域テフラとの対比により年代決定を可能にするとともに、垂直方向の変化の様子を知ることにより、例えば同一区画の中で堆積環境の違う場所の対比を行うことが可能になる(たとえば竹村・檀原、1987の兵庫県板井遺跡の例)。また、始良 Tn 火山灰(AT火山灰)(町田・新井、1976)と鬼界-アカホヤ火山灰(K-Ah 火山灰)(町田・新井、1978)のように類似した形態を持ち屈折率が異なる火山ガラスの混合比を正確にすることができると利点を有している。このほかにも堆積物の再堆積や生物による攪乱の推定にも寄与できると考えられる。九州では福岡県太宰府の原口遺跡の遺跡土壌を対象にしてこの手法を用いて火山灰降灰層準を認定した例(竹村、1989)や唐津や福岡で風成堆積物を対象にした例(溝田ほか、1992)が知られている。

今回は、大分県北部の目久保遺跡の分析結果を報告するが、大分地域での初めての分析であり、分析法の詳細や広域テフラなどの解説も試みる。なお、分析は(株)京都フィッシュン・トラ

ックに依頼して行われた。

2. 方 法

土壤中火山ガラス抽出分析は以下の方法・手順に基づいて行い、火山ガラスの垂直分布の特徴を調べる。

1. 採取された試料を乾燥し、重量をはかる（この分析は連続的な試料を用いれば非常に有用な結果が得られるので、試料はきれめなく連続的に採取することが望ましい）。
2. 洗浄し、60、120、250メッシュ（それぞれ 250μ 、 125μ 、 63μ ）の篩で篩別し、乾燥後重量をはかる。
3. 120～250メッシュの粒子（極細砂サイズ、 $125\sim 63\mu$ ）を超音波洗浄機を用いて洗浄する。
4. 120～250メッシュの粒子（極細砂サイズ、 $125\sim 63\mu$ ）を封入剤（バルサム・光硬化剤など）を用いて封入し、岩石薄片を作成する。
5. 上記の薄片を偏光顕微鏡観察し、火山ガラス・重鉱物・軽鉱物とその他の3つに大別し、各粒子個数百分率を求め、火山ガラスの特徴を記載する。重鉱物の組成も記録する。
6. 火山ガラスの屈折率を測定する。

火山ガラスの屈折率は、檀原ほか（1985）、横山ほか（1986）、横山・山下（1986）、Danbara et al.（1992）に述べられている温度変化型屈折率測定装置（RIMS86）およびその改良型を用いて測定する。この測定法は従来の浸液法と比較して、個人差がないこと、少ない浸液で測定が可能なこと、室温を恒温状態に保つ必要がないこと、統計的測定に重要な粒子ごとの屈折率のばらつき範囲や最頻値分布測定が能率的かつ正確に行えるなどの利点を有している。浸液はダイフロイルと α -クロロナフタレンの混液であり、各浸液の温度と屈折率の関係は、屈折率が既知の人工ガラスを用いて一次式の関係であることが明かにされている。各ガラス粒子の屈折率は合致温度と浸液固有の一次式より計算される。なおこの測定装置の誤差は ± 0.0002 以内である。

3. 北部九州における後期更新世以降のテフラ

九州は阿蘇山、雲仙、桜島、霧島など現在も多くの活動的な火山が位置する地域である。しかし、その活動的な火山の分布をみると、大分県北部地域はその影響があまり及ばない地域であることがわかる。特に考古学と関連が深い地表部に、南九州では厚い火山灰起源のシラスやローム層が堆積しているのに対し、北部九州では直接古い時期の岩石や堆積物が露出するかそれらが赤色風化された土壌が分布し、火山灰起源の物質の影響は非常に少ない。1970年代後半から精力的に同一時間面の指標としての火山灰の重要性に注目した広域テフラ（広域火山灰）調査が行われてきた（町田・新井、1992）。その結果、後期更新世以降の時間面設定に有効ない

くつかの広域テフラが定義されてきた。この中で九州北部にも分布している可能性が高く、有効な時間面になりうると考えられる広域テフラは鬼界－アカホヤ(K-Ah)火山灰、始良 Tn(A

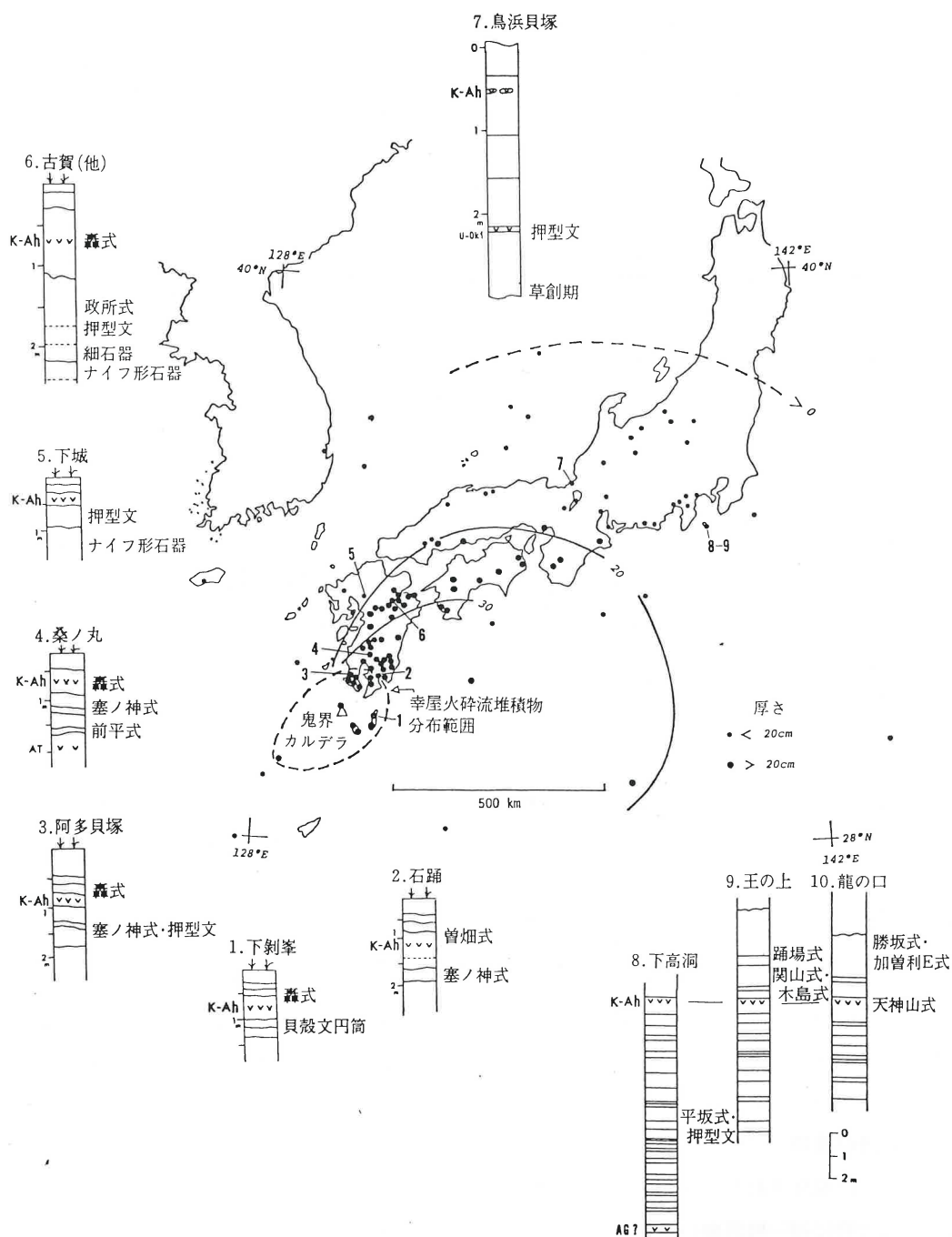


図1. 鬼界－アカホヤ火山灰 (K-Ah 火山灰) の等厚線図と考古遺物 (町田ほか、1984)

T火山灰)、阿蘇4 (Aso-4) 火山灰であり、大分県地域ではこれに九重第一軽石層 (Kj-P1) が加わる。以下、この4火山灰についてのべる。

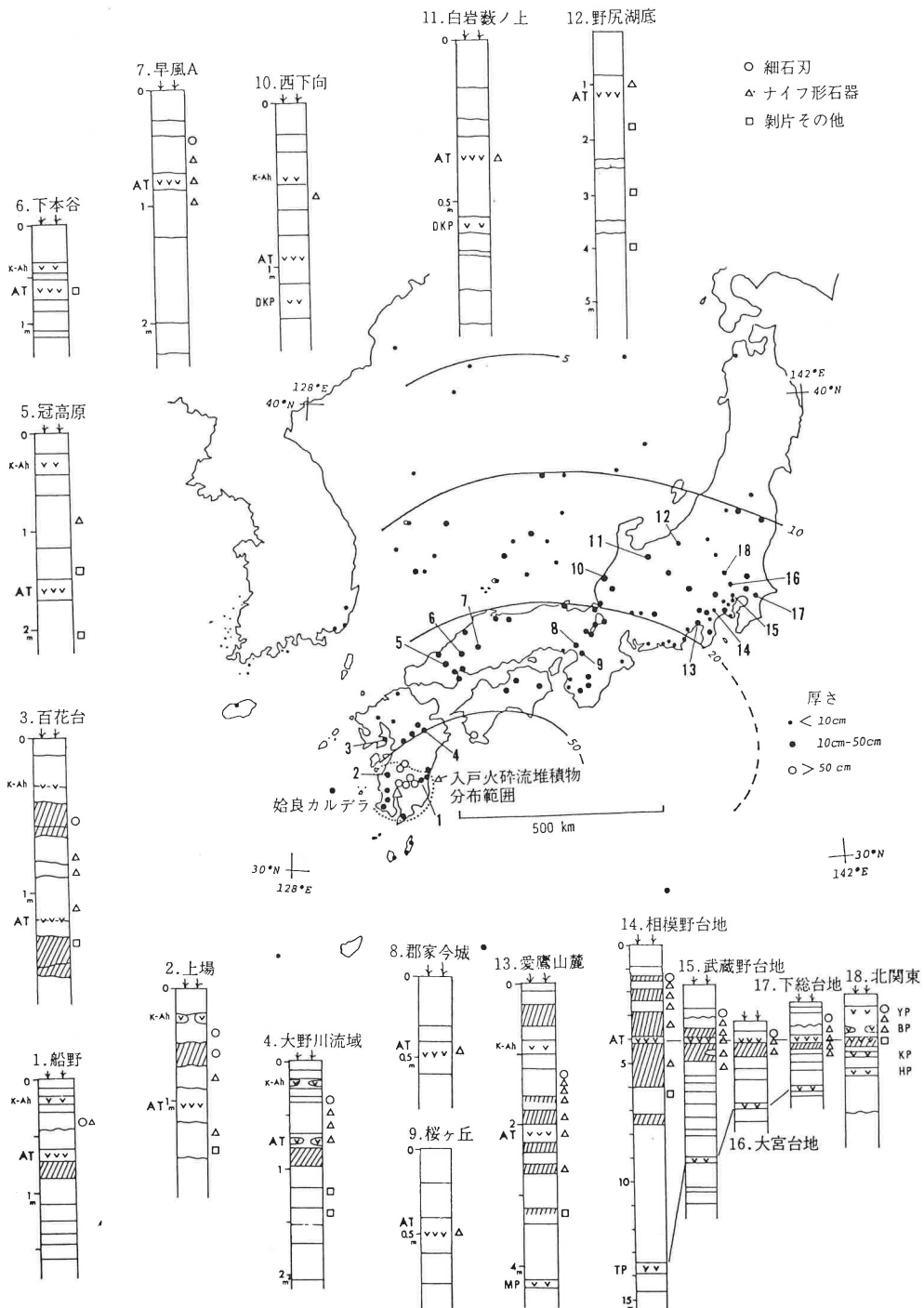


図2. 始良 Tn 火山灰 (At 火山灰) の等厚線図と考古遺物 (町田ほか、1984)

1) 鬼界ーアカホヤ (K-Ah) 火山灰 (町田・新井、1978)

この火山灰の給源は鹿児島南方の鬼界カルデラであり、現在は竹島と硫黄島を残して大部分が海底に沈んでいる (図1)。この火山灰は九州・四国から東北地方南部までをおおい、給源に近い南九州・東九州・四国などでは橙色のガラス質火山灰として肉眼的に識別が容易であり、アカホヤ、イモゴ、アカボコ、音地などの各地域固有の愛称でよばれていた。この火山灰の示す年代は14C年代の集中から6,300年 B.P.とみなされている。この時代は完新世の中でも高温多湿な時代であり、考古学的には縄文時代の早期から前期にかけての時代にあたり、その広域性からこの火山灰は遺物・遺構の編年に非常に有用である。

大分県地域ではこの火山灰はクロボク土などの中に肉眼で識別することができる。別府周辺陸上で約10cmの厚さがあるほか、別府湾の堆積物中にもはさまれている (Takemura, 1993)

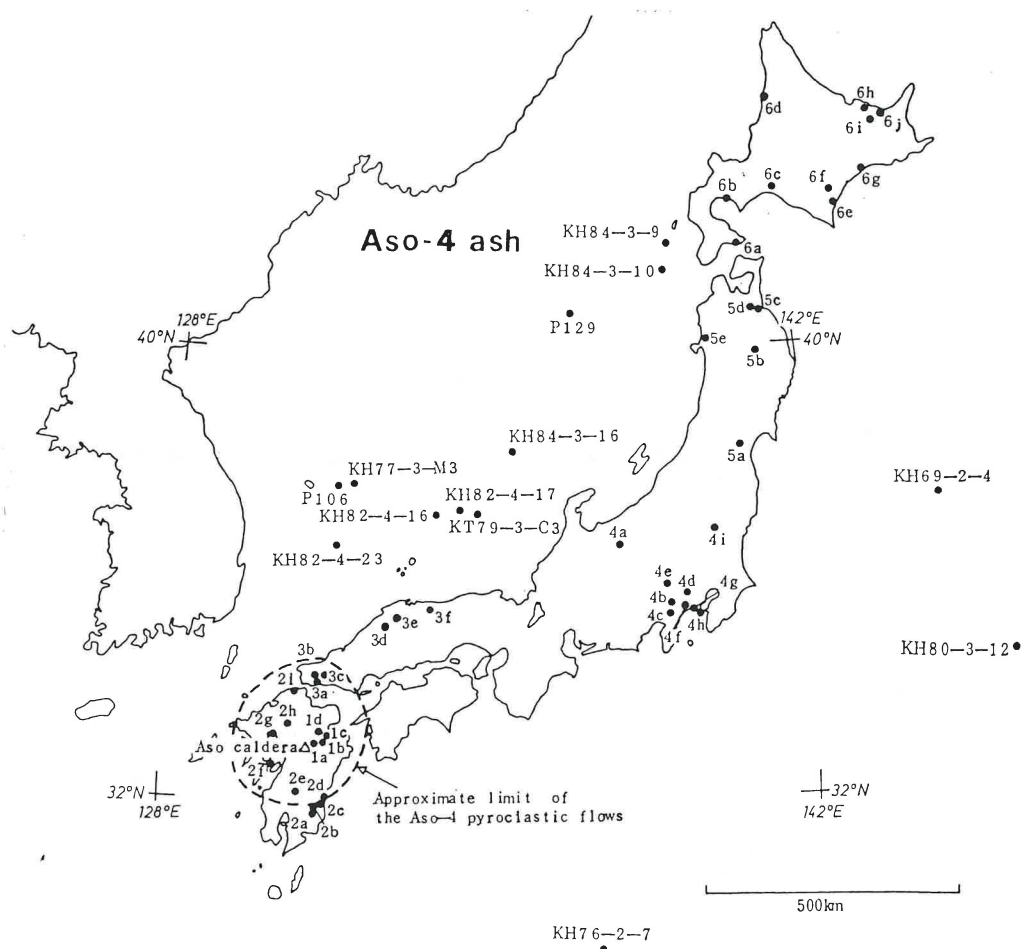


図3. 阿蘇4火山灰 (Aso-4火山灰) が識別された地点図 (町田ほか、1985)

2) 始良 Tn (A T) 火山灰 (町田・新井、1976)

この火山灰の噴出源は、鹿児島湾北部の始良カルデラである。この火山灰は日本列島全域をおおい、日本海、太平洋にも分布をひろげている (図2)。K-Ah 火山灰より層厚が全般的に厚い。湖や湿地などでは灰白色ガラス質火山灰であるが、陸域の土壌化した場所では淡褐色火山灰として識別できる。この火山灰の示す年代は14C年代の集中から21,000-22,000年前 (町田・新井、1976、1983) とされてきているが、松本ほか (1987) はこの火山灰の上下の泥炭の14C年代のデータから約24,700年前の年代を提示している。またこの火山灰の噴出した時代は気候が寒冷化した時代であったことがあきらかになっている。この火山灰の降灰は後期旧石器時代にあたり、その広域性からこの時代の編年上重要な時間面を提供している。

大分県地域でもその降灰の影響が認められ、この火山灰降灰層準の認定ができれば、有効な時間面を設定できることになる。

3) 九重第1軽石 (Kj-p1)

噴火年代がおおよそ3~3.5万年前と推定される九重火山地域から大分県南部、中部に広く分布する火山灰である。最下部に黒~灰色細粒軽石・火山灰層をもつ黄橙色降下軽石層である。

4) 阿蘇4 (Aso-4) 火山灰 (町田ほか、1985) と阿蘇4火砕流堆積物

この火山灰は阿蘇4火砕流 (小野ほか、1977) の噴出と同時に形成された降下火山灰とし

表1. 分析試料の粒度組成、火山ガラス・重鉱物・軽鉱物含有量、主要重鉱物、主要火山ガラス型、プラント・オパール含有量、色付きガラスの有無一覧表

通番	試料名	乾燥重量 (g)	粒 度 組 成 (g)				鉱物・ガラス組成 (%)			*1 主要重鉱物および備考	*2 P0含有 (%)	*3 *4 主要火山ガラス型	色付 ガラスの有無
			砂粒分 (mesh size) >60 ~120 ~250 <250	粘土分	火山 ガラス	重鉱 物	軽鉱 物						
1	0~ 10cm	22.0	0.4	0.4	0.5	20.7	29.0	33.0	38.0	Opq. Gls. Btk. Opx.	+	Hb. Ha. Cb. It.	+
2	10~ 20cm	21.7	0.4	0.4	0.5	20.4	38.0	34.0	28.0	Opq. Gls. Btk. Opx. Cpx. Zr. Bi. *	+	Hb. Ha. Cb. It. Ca.	+
3	20~ 30cm	21.7	0.4	0.4	0.5	20.4	41.0	26.0	33.0	Opq. Gls. Btk. Opx. Cpx. Zr.	+	Hb. Cb. Ha. Ca. It.	+
4	30~ 40cm	21.5	0.5	0.4	0.5	20.1	43.0	19.0	38.0	Opq. Gls. Btk. Opx. Cpx. Bi.	—	Hb. Cb. Ha. It. Ca.	+
5	40~ 50cm	22.1	0.8	0.7	0.7	19.9	39.0	23.0	38.0	Opq. Gls. Btk. Opx. Bi.	—	Hb. Ha. Cb. It. Ca.	+
6	50~ 60cm	23.6	0.6	0.6	0.8	21.6	24.0	33.0	43.0	Gls. Opq. Btk. Opx. Cpx.	—	Hb. Ha. Cb. It. Ca.	+
7	60~ 70cm	22.7	0.5	0.4	0.5	21.3	0.5	58.5	41.0	Opq. Gls. Btk. Opx. Cpx.	—	Cb. Hb. It. Ha.	—
8	70~ 80cm	21.5	0.3	0.3	0.5	20.4	3.0	61.0	36.0	Opq. Gls. Btk. Opx. Zr.	—	Cb. Hb. It.	—
9	80~ 90cm	20.9	0.3	0.2	0.3	20.1	3.0	50.0	47.0	Opq. Gls. Btk.	—	Hb. Cb. It.	—
*B-Qz含有													

*β-Qz含む

*1 各鉱物とその略称は以下のように対応します。

Ol;カンラン石 Opx;斜方輝石 Cpx;単斜輝石 Gls;緑色普通角閃石 Btk;褐色普通角閃石
Bi;黒雲母 Gar;ザクロ石 Zr;ジルコン Id;イデイングサイト Opq;不透明鉱物

*2 P0含有とはプラント・オパールの含有量 (%) を示します。

*3 火山ガラス型とその略称は吉川 (1976) に従い以下のように対応します。

Ha. Hb; 扁平型 (バブル・ウォール型) Ca. Cb; 中間型 (軽石型) Ta. Tb; 多孔質型 (軽石型、繊維状型)

*4 なお、吉川 (1976) 以外のガラス型について次の略称を用います。

Sg; スコリア質ガラス It; 不規則型

て定義されている。この阿蘇4火砕流堆積物は九州北部地域で重要な鍵層として用いられ、段丘などの編年に大きな役割を果たしてきた(図3)。阿蘇4火砕流の年代については町田ほか(1985)によっておよそ7万年前とされている。現在は9万年前後の活動とも考えも出されている(町田・新井、1992)。阿蘇4火砕流堆積物はWATANABE(1978、1979)によれば8ユニットにわけられ、その中で八女軽石流と鳥栖橙色軽石流が広域に分布するとされている。

4. 試料と分析結果

今回分析された目久保第2遺跡の試料は上位より3a層、3b層、4a層、4b層、5層、6層からなる。これを10cmずつ連続的に9個採取して上位より試料番号1～9とした(図4)。各分析結果をまとめると以下のようになる。

堆積物の粒度と特徴：堆積物の粒度組成分析の結果は砂の含有量が最小(試料9)で3.8%、最大(試料5)で9.9%であり、ほとんどがシルトサイズ以下という粒度組成で砂の含有量が少ない特徴がある試料である(図4、表1)。また、構成粒子の種類は軽鉱物(長石や石英など)、重鉱物(角閃石、輝石、不透明鉱物など)、火山ガラスからなる。また、上部にプラントオパールが少量含まれる。

火山ガラスの含有量と特徴：火山ガラスは試料9から試料7まではほとんど入っていないが、試料6で24.0%と含有率が高くなり試料5で39.0%、試料4で43.0%と多量に含まれ、最上部(試料1)でも29.0%の含有率がある。火山ガラスのタイプはバブルウォール型が多い特徴がある。火山ガラスの屈折率は1.498～1.501の範囲で、モード(最頻値)は1.499～1.500程度であるグループがほとんどを占める(たとえば試料5の分析結果の図5)が、上部3試料には火山ガラスの屈折率1.508～1.514の範囲でモード(最頻値)は1.510程度のグループがかなり含まれるようになる(たとえば試料1の分析結果の図6)。図5と図6のよみかたは以下のとおりである。最上位に連続試料の場合の系列の名前(series Name)、次に分析試料の名前(Sample Name)、分析者(Analyst)、試料の鉱物種(Material)が印刷される。この場合のMaterialはgl.なのでガラスを分析したことになる。次のImmersion Oilはこの測定に使用した浸液の種類を示し、Ndの式はその浸液の温度と屈折率の相関関係をあらわし、Ndは屈折率、tは温度を示す。この式は一次式であるので火山ガラスと浸液の屈折率が合致した温度が測定によって得られるのでこの式から火山ガラスの屈折率が計算される。 $(\text{Ascent} + \text{Descent}) / 2$ は合致温度を温度を上昇させた時(Ascent)と下降させた時(Descent)の平均値として求めた時の値の意味であり、1.4993などの小数点以下4桁表示の数字は各粒子の屈折率をしめす。Totalの項のcount, min., max., range, mean, st. dev., skew. はそれぞれ粒子数、屈折率の最小値、最大値、変化量、平均値、標準偏差、歪度である。Histogramの図はたて方向に0.001ごとの屈

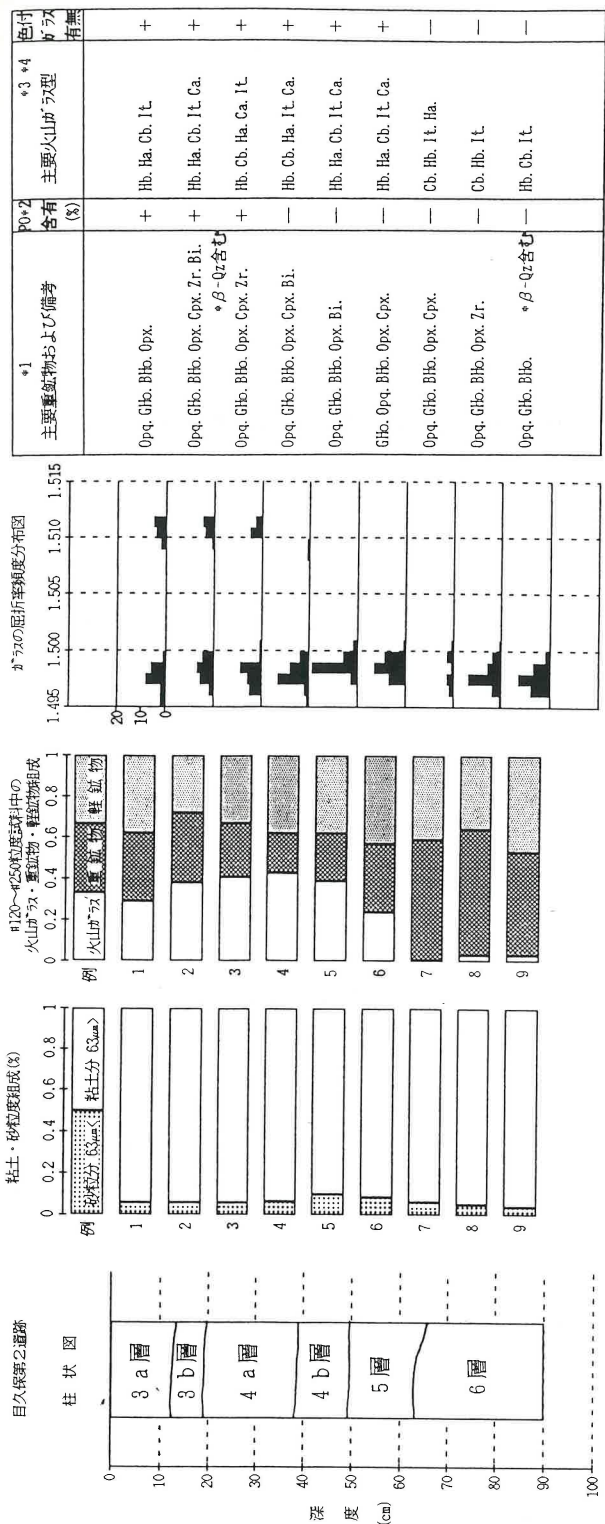


図 4. 目久保第 2 遺跡の土層図、分析試料の粒度組成、火山ガラス・軽鉱物含有量、火山ガラス屈折率頻度分布図

* 1 主要重鉱物の略称と鉱物名

Ol: カンラン石 Opx: 斜方輝石

Bi: 黒雲母 Gar: ザクロ石

* 2 PO: プラント・オパール含有率 or 有無

* 3 主要ガラス型の名称 (吉川, 1976)

Hb, Hb: 扁平型 (バブルウォール型)

* 4 (吉川, 1976) 以外のガラス型の略称

SG: スコリア質ガラス

Cpx: 単斜輝石

Zr: ジルコン

Id: イデインダグサイト

Opq: 不透明鉱物

Ca, Cb: 中間型 (軽石型)

IT: 不規則型

Gbk: 緑色普通角閃石

Id: イデインダグサイト

Opq: 不透明鉱物

Ca, Cb: 中間型 (軽石型)

IT: 不規則型

Bbk: 褐色普通角閃石

Id: イデインダグサイト

Opq: 不透明鉱物

Ca, Cb: 中間型 (軽石型)

IT: 不規則型

折率を、横方向にその屈折率に対応する火山ガラスの個数が表現されている。*一つが一個の火山ガラス粒子である。

*** Original Data Sheet ***

Series Name : メクボ グレイ 2 イセキ
Sample Name : 5)40-50cm
Analist : Yamashita
Material : gl.
Immersion Oil: No.3.8 (Nd=1.51907-0.000393·t)

(Ascent+Descent)/2

1.4978	1.4982	1.4984	1.4991	1.4993	1.4978	1.4980	1.4982	1.4984	1.4989
1.5004	1.4977	1.4980	1.4981	1.4984	1.4987	1.4989	1.4991	1.4993	1.4980
1.4982	1.4986	1.4989	1.4998	1.4999	1.5003	1.4981	1.4984	1.4987	1.4989

Total	count	min.	max.	range	mean	st.dev.	skew.
:	30	1.4977	1.5004	0.0027	1.4987	0.0007	0.7631

*** Histogram ***

* = 1

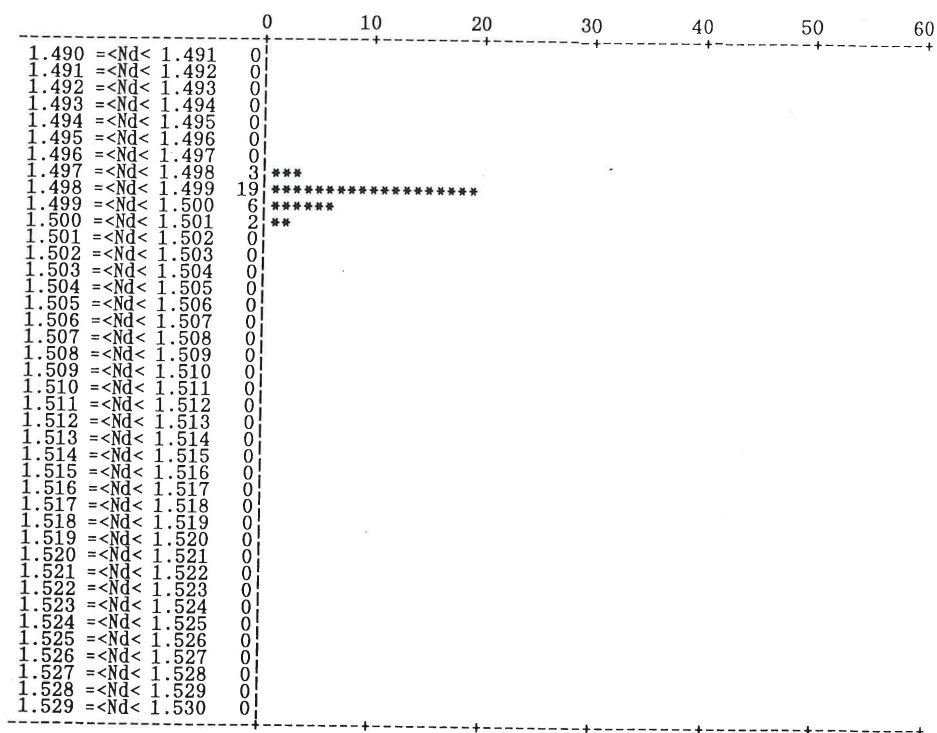


図5. 目久保第2遺跡試料5から検出される火山ガラスの屈折率測定結果

*** Grouping Data Sheet ***

Series Name : メクボ ダイ 2 イセキ
 Sample Name : 1) 0-10cm
 Analyst : Yamashita
 Material : gl.
 Immersion Oil: No.3.8 (Nd=1.51907-0.000393·t)

(Ascent+Descent)/2

Group	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1.4955	1.4955	1.4963	1.4968	1.4971	1.4972	1.4974	1.4976	1.4976	1.4977	
1.4978	1.4979	1.4980	1.4981	1.4983	1.4984	1.4989	1.4989	1.4993		
1.5094	1.5098	1.5101	1.5102	1.5106	1.5109	1.5110	1.5111	1.5112	1.5115	
1.5118										

	count	min.	max.	range	mean	st.dev.	skew.
Group. 1 :	19	1.4955	1.4993	0.0038	1.4976	0.0010	-0.4994
Group. 2 :	11	1.5094	1.5118	0.0024	1.5107	0.0007	-0.2481
Total :	30	1.4955	1.5118	0.0163	1.5024	0.0065	0.4908

*** Histogram ***

* = 1

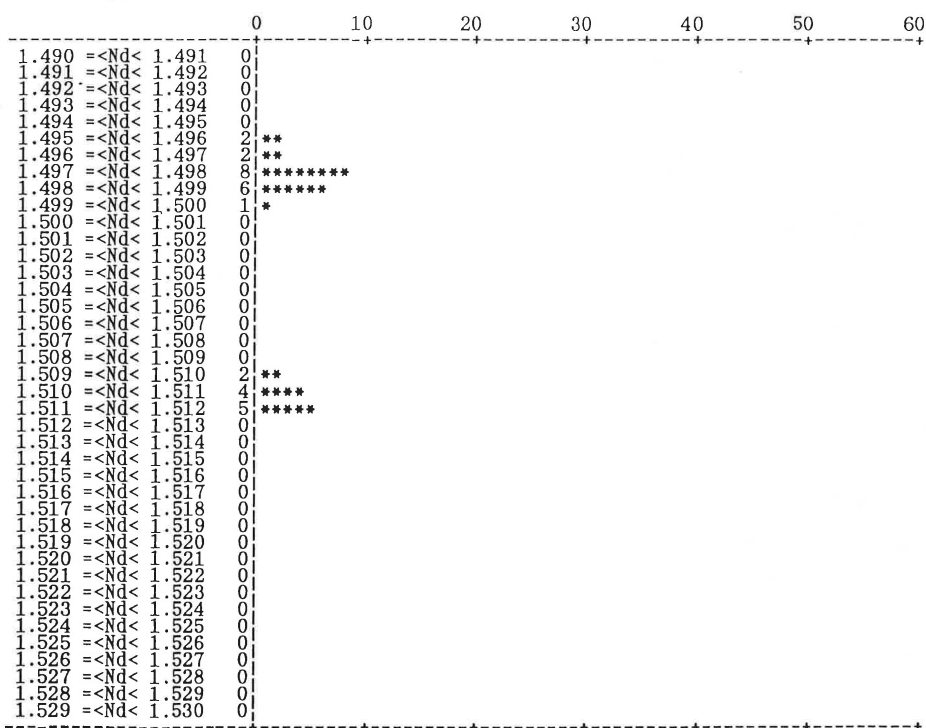


図 6 . 目久保第 2 遺跡試料 1 から検出される火山ガラスの屈折率測定結果

5. 火山ガラスをもたらしした火山灰および年代の検討

目久保第2遺跡の9試料から検出された火山灰について検討し、地層の年代について考察する。

検出された火山ガラスは1.498–1.500を中心とした屈折率をもつグループAと1.510を中心とした屈折率をもつグループBがあり、その多くがバブルウオール型の形態を示している(表2)。この2つのグループの火山ガラスの含有割合を求めてみると図7の濃集パターンが得られる。これらの火山ガラスの形態から、これらのガラスをもたらしした火山灰は広域テフラの可能性が高い。

表2. 火山ガラスの特徴と対比のまとめ

火 山 ガ ラ ス 検 出 層 準					屈折率 (Nd)	主な火山 ガラス型	対比される 広域テフラ
分 布 層 準		最 大 濃 集 層 準		地 層 名			
サンプルNo.	深 度	サンプルNo.	深 度				
No. 1 ～ No. 4	0 cm ～ 50 cm	No. 1 ～ No. 2	0 ～20 cm	3 a 層 ～ 3 b 層	1.508 ～ 1.514 最頻値 1.510	H 型 (扁平型)	鬼界アカホヤ 火 山 灰 (K-Ah)
No. 1 ～ No. 6?	0 cm ～ 60?cm	No. 4 ～ No. 5	30～40 cm	4 a 層 ～ 4 b 層	1.498 ～ 1.501 最頻値 1.500	H 型 (扁平型)	始良Tn火山灰 (AT)
No. 7 以 深	— —	— —	— —	— —	— —	— —	— —

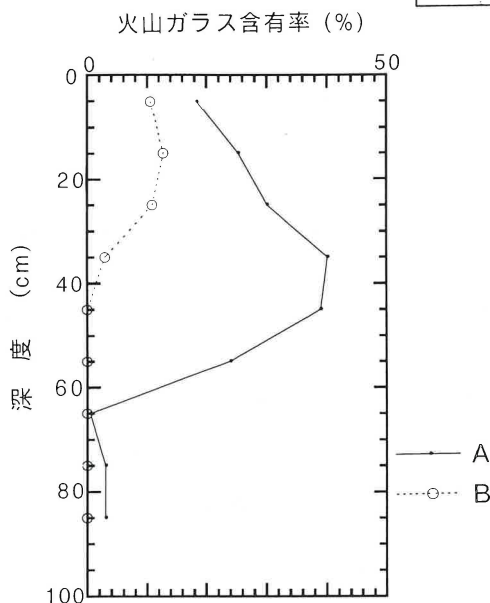


図7. 目久保第2遺跡から検出される2つの火山ガラスグループ(A: AT火山灰起源、B: アカホヤ火山灰起源)の含有量変化

したがって、この検出された火山ガラスの特徴を大分県北部に降灰した可能性が高い広域テフラと比較するとAグループは始良Tn火山灰(AT火山灰)に対比でき、Bグループは鬼界アカホヤ火山灰に由来するものであると考えられる。Aグループの火山ガラスの濃集のパターン(図7)をみると試料6から5にかけて急激に増加する様子がみとめられる。したがってグループAの火山ガラスをもたらししたAT火山灰(約25,000年前)の降灰はこのあたりの層準である可能性が高い。Bグループの火山ガラスは試料3から上位に向けて増加するがそれほど急激な変化ではなく、この産出状況から鬼界アカホヤ火山灰降灰層準は決定できず、他地域でのアカホヤ火山灰の産出状況との比較で考察するとアカホヤ火山灰降灰層準はこのセクション

より上位にあるか、または削剥された可能性が考えられる。したがって、この柱状試料では試料4～5の層準（第4層付近）がAT火山灰降灰層準すなわち約25,000年前であり、遺跡産出状況の検討が必要であるが、最上部でもアカホヤ火山灰の降灰層準に達していないと考えられる。

引用文献

- 檀原 徹・山下 透・佐藤良二・横山卓雄（1985）：温度変化法による火山ガラスの屈折率精密測定。日本地質学会第92年学術大会講演要旨、61。
- Danhara, T., Yamashita, T., Iwano, H. and Kasuya, M. (1992) : An improved system for measuring refractive index using the thermal immersion method. *Quaternary International*, 13/14, 89-92.
- 町田 洋・新井房夫(1976)：広域に分布する火山灰－始良 Tn 火山灰の発見とその意義－。科学、46, 339-347。
- 町田 洋・新井房夫(1978)：南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ－アカホヤ火山灰。第四紀研究、17, 143-163。
- 町田 洋・新井房夫(1983)：広域テフラと考古学。第四紀研究、22, 134-148。
- 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）：テフラと日本考古学－考古学研究と関係するテフラのカタログ－。古文化財の自然科学的研究、865-928。
- 町田 洋・新井房夫・百瀬 貢（1985）：阿蘇4火山灰－分布の広域性と後期更新世示標層として意義－。火山、第2集、30、49-70。
- 町田 洋・新井房夫（1992）：火山灰アトラス。東京大学出版会、276 P。
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗（1987）：始良 Tn 火山灰（AT）の14年代。第四紀研究、26, 79-83。
- 溝田智俊・下山正一・窪田正和・竹村恵二・磯 望・小林 茂（1992）：北部九州の緩斜面上に発達する風成塵起源の細粒質土層。第四紀研究、31、101-111。
- 小野晃司・松本 夫・宮久三千年・寺岡易司・神戸伸和（1977）：竹田地域の地質。地域地質研究報告（5万分の1図幅）、地質調査所、145 P。
- 竹村恵二・檀原 徹（1987）：遺跡土壤中の火山灰降灰層準の認定－兵庫県篠山板井遺跡を例として－。第四紀研究、26、69-78。
- 竹村恵二・檀原 徹（1988）：土壤中火山ガラス抽出分析による遺跡の地層対比および編年－温度変化型屈折率測定装置を使用して－。考古学と自然科学（日本文化財科学会誌）、第20号、35-50。
- 竹村恵二（1989）：VI。土壤中火山ガラス抽出分析。太宰府・佐野地区遺跡群（1989. 3）、太宰府市教育委員会、59-70。
- Takemura, K. (1993) : Holocene eruptive activity recorded as volcanic glass in the sediments of Beppu Bay, central Kyushu, Japan. *Mem. Fac. Kyoto Univ.*, (印刷中)
- 横山卓雄・檀原 徹・山下 透（1986）：温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定。第四紀研究、25, 21-30。

- 横山卓雄・山下 透 (1986) : 温度変化型屈折率測定装置 (RIMS86) による斜方輝石、角閃石の屈折率測定の試み. 京都大学教養部地学報告 (九十九地学)、21, 30-36.
- 吉川周作 (1976) : 大阪層群の火山灰層について. 地質学雑誌、82, 479-515.
- 吉川周作 (1981) : 堆積中の火山ガラスの研究—大阪平野の更新〜完新統について—. 第四紀研究、20, 75-87.
- WATANABE, K. (1978) : Studies on the Aso pyroclastic flow deposits in the region to the west of Aso caldera, southwest Japan, I : Geology. Mem. Fac. Educ., Kumamoto Univ., Nat. Sci., 27, 97-120.
- WATANABE, K. (1979) : Studies on the Aso pyroclastic flow deposits in the region to the west of Aso caldera, southwest Japan, II : Petrology of the Aso-4 pyro - clastic flow deposits. Mem. Fac. Educ., Kumamoto Univ., Nat. Sci., 28, 75-112.

5 須久保遺跡

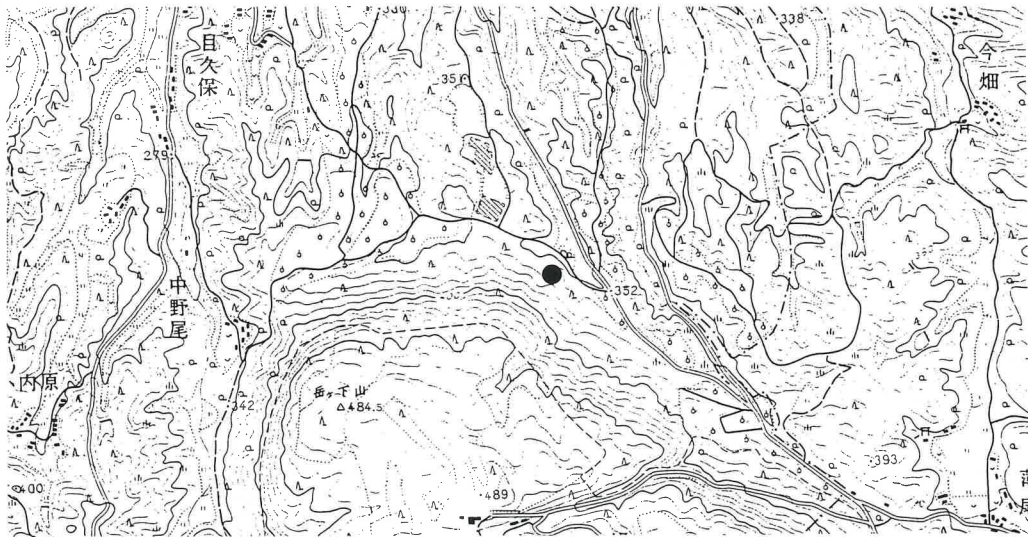
第1節 遺跡の立地と環境

1. 自然地理的環境

国東半島の南のつけ根、別府湾から直線距離で約1 km内陸部に入った北緯33°23′、東経131°28′の速見郡山香町大字久木野尾字東カヤ原に須久保遺跡は位置する。

標高500m前後の山々が複雑に織りなす山岳丘陵地帯に遺跡はある。遺跡があるのは標高約353m前後のところで、岳ヶ下山の北の麓にあたる。急な斜面がゆるやかな丘陵に変化するその変換点付近に相当する。

その麓からは、僅かではあるが湧水があり浅く狭い谷をいく筋も形成し、湿地帯となっている。そのため、遺跡のある地点は小さな湿地と小さな丘陵が交互に存在しており、複雑な地形である。



第1図 須久保遺跡周辺の地形（1：25,000）

2. 歴史的環境

この付近は古代の豊前、豊後の境界にあたり、境界祭祀の色彩の強い宇佐宮行幸会がこの付近の唐川八幡宮まで至っていたことはその証である。さらにこの豊前道は宇佐から安心院（安覆駅）に至ったあと、津房川を遡り由布院（由布駅）へ抜けるか、若しくは由布院へ抜けずに別府（長湯駅）に下るかのコースが想定されている。後者の場合には、遺跡の直ぐ北側を通る道が古道である可能性が高い。

従来では、このあたりに遺跡は確認されていなかった。しかし、路線内の試掘調査によって、丘陵の平坦部には口野尾遺跡や目久保遺跡など縄文時代を中心とする遺跡がかなり分布していることが判った。また、古代以降も古道との関連で遺跡がある可能性もあるだろう。

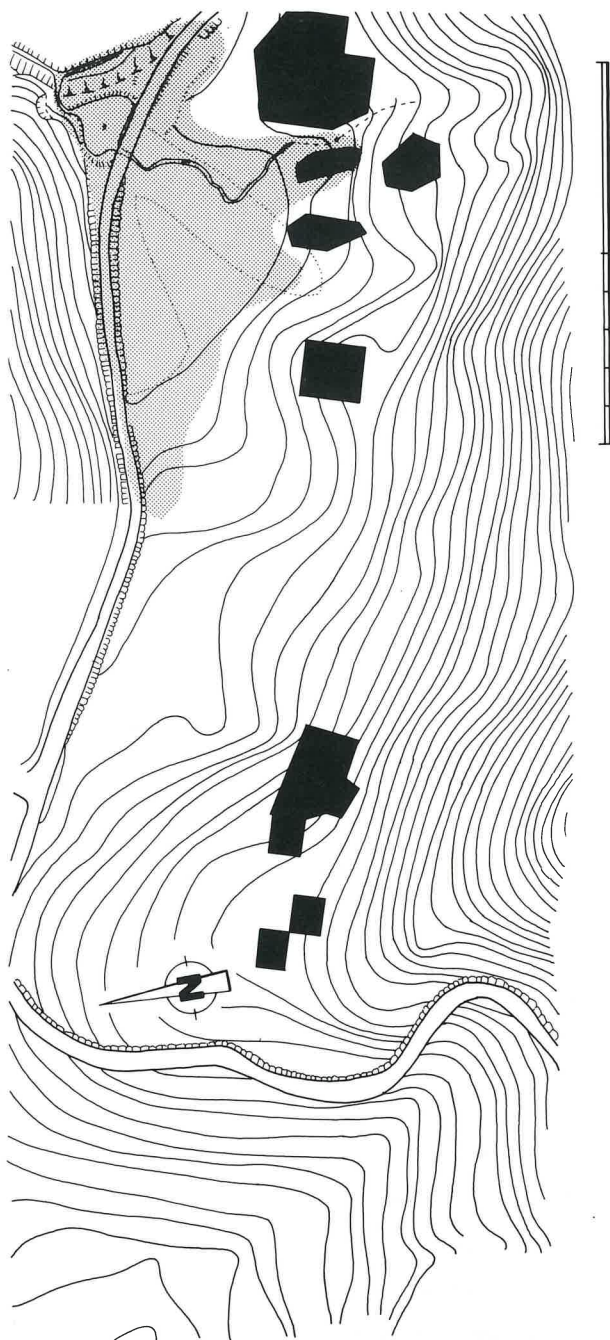
第2節 調査の結果

1. 調査区の設定と概要

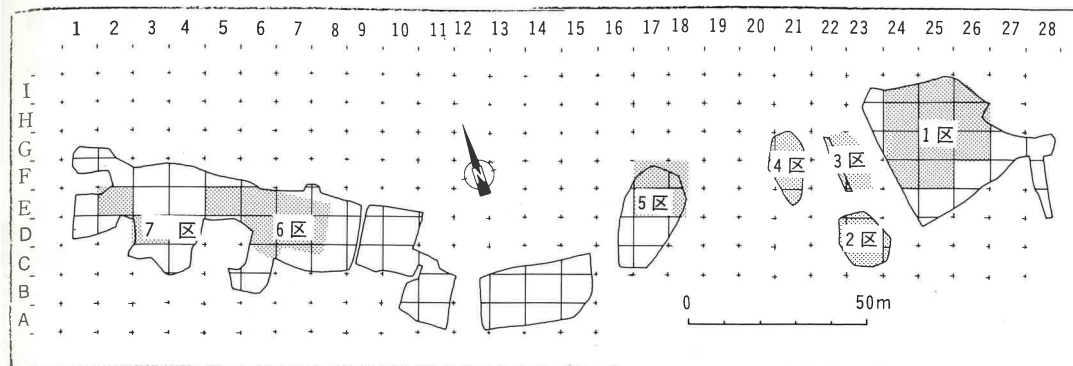
道路予定地が岳ヶ下山の北東裾をかすめるように通るため、調査対象地は舌状の丘陵が4ヵ所と浅い谷が2ヵ所ある複雑な地形をしている。この地区では遺物などの出土は知られておらず、周知の遺跡ではなかったため、遺跡が存在する可能性の高い平坦地に試掘トレンチを設定し掘り下げた。その結果、遺跡の存在が確認されたため、東西約280㍍南北約90㍍にわたり10㍍×8㍍のグリットを設定し、それぞれには第3図のようにグリット番号を付した。また、結果的に遺物が多く出土した地区には地区番号を付けた。それらはやや大きな丘陵のある部分で、東から1、2、3区と呼ぶことにする。(第3図参照)。

ここでは地区ごとに遺構、遺物の概要を説明する。

1区では8㍍×10㍍のグリットを11ヵ所設定し、掘り下げをおこなった。その結果、第IV層（アカホヤ）上部で土器、石器、黒曜石碎片などが出土した。土器は約30点出土したが小破片が多く、図示できるのは2



第2図 須久保遺跡調査区位置図



第3図 須久保遺跡グリッド配置図（網かけ部本調査）

点のみである。石器は石鏃がもっとも多く27点、その他に石匙2点、搔器3点など狩猟関係の石器のほか、尖頭状石器1点、石核6点、剥片40点、姫島産黒曜石の碎片229点が出土した。遺構は確認されなかった。

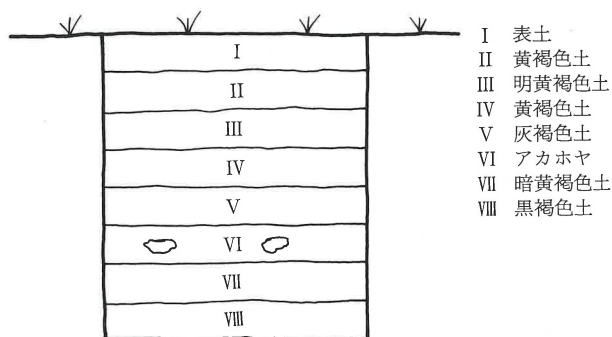
2区では石鏃4点、石核1点、剥片9点、碎片122点が出土しているが、遺構は確認されていない。

3区は浅い谷状のところで、トレンチを入れ調査したが、湧水があり地山まで調査は出来なかった。遺物はA区あるいはD区からの落ち込みかと推定される石鏃3点と石核1点、剥片5点、碎片26点である。

4区では石鏃3点と柳葉型石器1点、石核1点、剥片5点、碎片153点が出土しているが、遺構は確認できなかった。

5区では姫島産黒曜石の大型石核が3個体まとまって出土した。周辺では若干の土器と石鏃2点、石鏃未製品1点、搔器1点、姫島産黒曜石の碎片84点が出土している。土器は1点の手向山式土器を除くとすべて同一個体と思われる船元式土器である。A区同様遺構は確認されなかった。

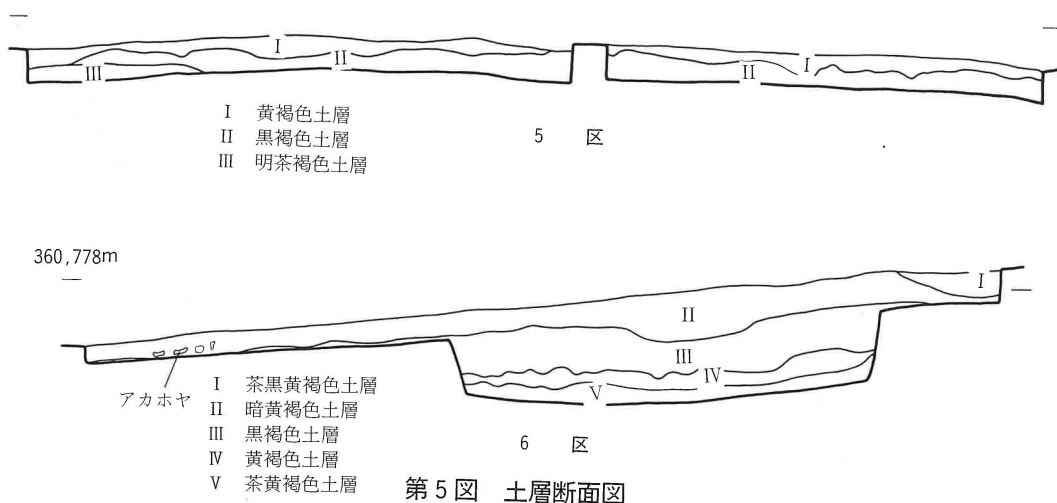
6区では浅い谷の谷頭付近に中世の遺構がある。斜面を削り、段落ちには石垣を積んでテラス状の平坦地を作りだした中に、掘立柱建物2棟、竪穴遺構1、土坑3、溝などが整然とまとまって出土した。出土遺物には坏、椀は少なく鍋等の煮沸形態のものが多い。時期は14世紀代を中心とした時期と



第4図 須久保遺跡基本層序

考えられる。また、1か所グリットを設定し縄文の包含層の調査を行った。そこからは、石鏃11点、搔器、石匙が各1点、剥片18点、碎片29点が出土している。また、中世の遺物包含層から石鏃4点が出土している。

7区はやや広い平坦地が広がる遺跡のなかでは最高所に位置するが、かなりの部分が攪乱で破壊されており、良好に残った部分にグリットを2ヵ所を設定し縄文時代の包含層の調査をおこなった。周辺の表採も含めて石鏃2点、剥片1点、碎片48点が出土し、土器も僅かに出土している。



2. 縄文時代

a. 遺物の出土状況

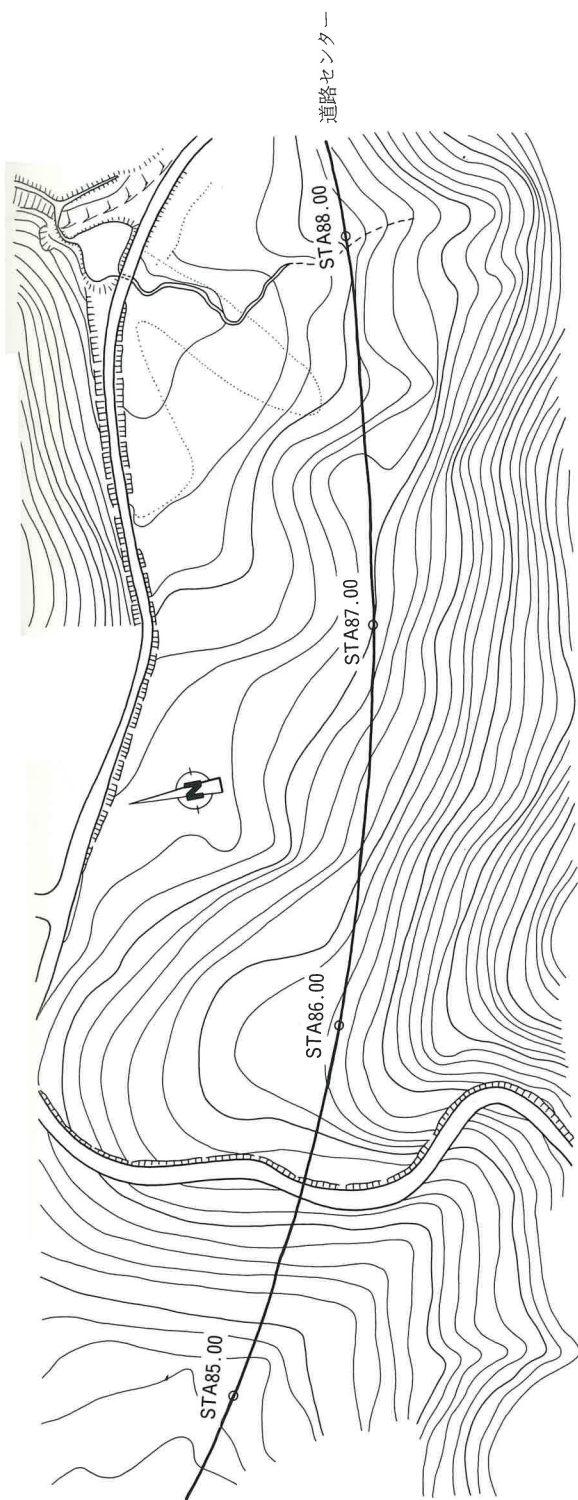
遺物は石鏃を中心とした石器群が中心で、土器は少ない。いずれも遺構に伴うものではなく、いわゆる包含層出土である。その中でも特筆されるのは5区において出土した姫島産黒曜石の大型石核である。ピット等の遺構は確認されなかったものの、3個体がまとまって出土しており原位置を動いていないと考えられる。この事に端的に示されるように、この遺跡では石器を製作していたと考えられる。以下、各区ごとにやや詳細に遺物の出土状況を見ていきたい。

1区においては調査区中央から西側に姫島産黒曜石の碎片的分布が集中する傾向がある。東側はやや傾斜があり、平坦面に剥片、剥片、石核、石器が集中するのである。幾つかのユニットがありそうであるが、明確には指摘できない。

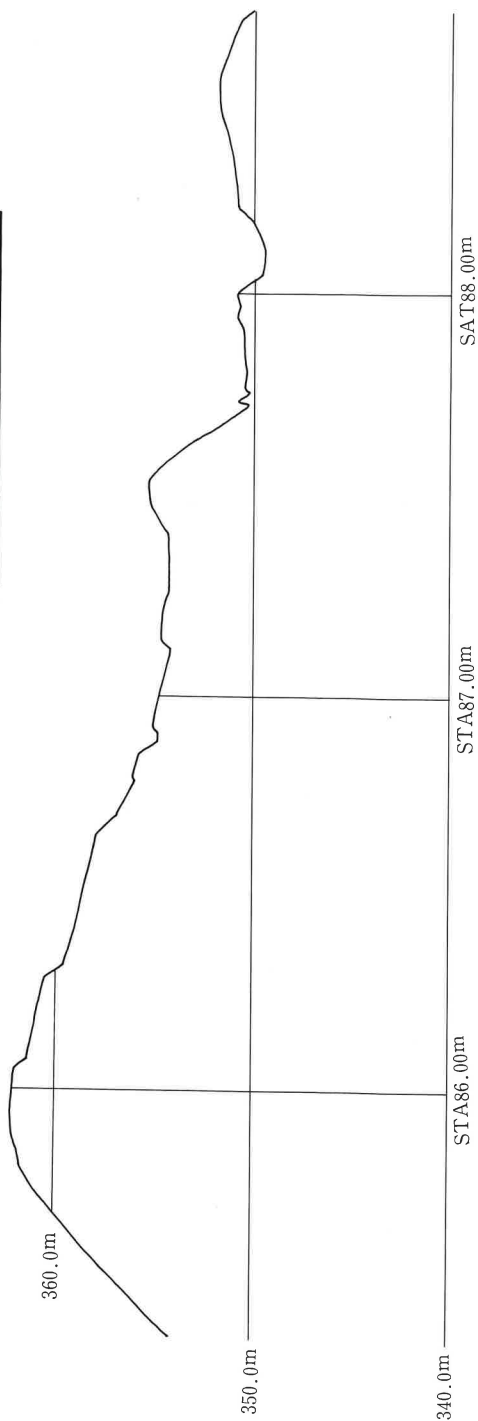
2区は調査区のほぼ全面で姫島産黒曜石の碎片が出土するが、剥片や石核などは2ヵ所にまとまりそうである。

3区は谷の部分に当たり、ここで石器を製作したとは考えられない。しかし、姫島産黒曜石の剥片や剥片は出土する。

4区は調査区の中のほぼ中央部に姫島産黒曜石の碎片などが集中する。



0 10m



第6図 遺跡の地形（道路公団の図面に加筆）

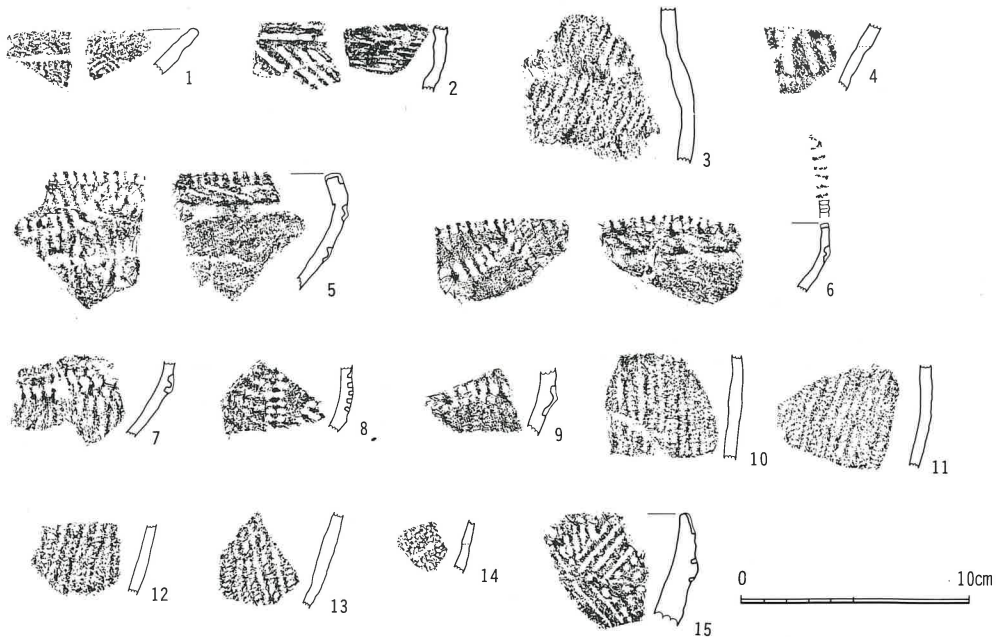
5区は前述のように姫島産黒曜石の大型石核3個が出土している。他の碎片等はその石核を取り巻く形で出土しているのが注目される。土器は、大型石核の南西部からまとまって出土している。

6区は1ヵ所のグリットを設定し縄文の包含層を調査したが、約100㎡から11点の石鏃が出土している。

7区は2ヵ所のグリットを設定した。碎片は出土するが石鏃が2点のみで少ない。姫島産黒曜石の碎片はほぼ均等に出土している。

b. 土 器

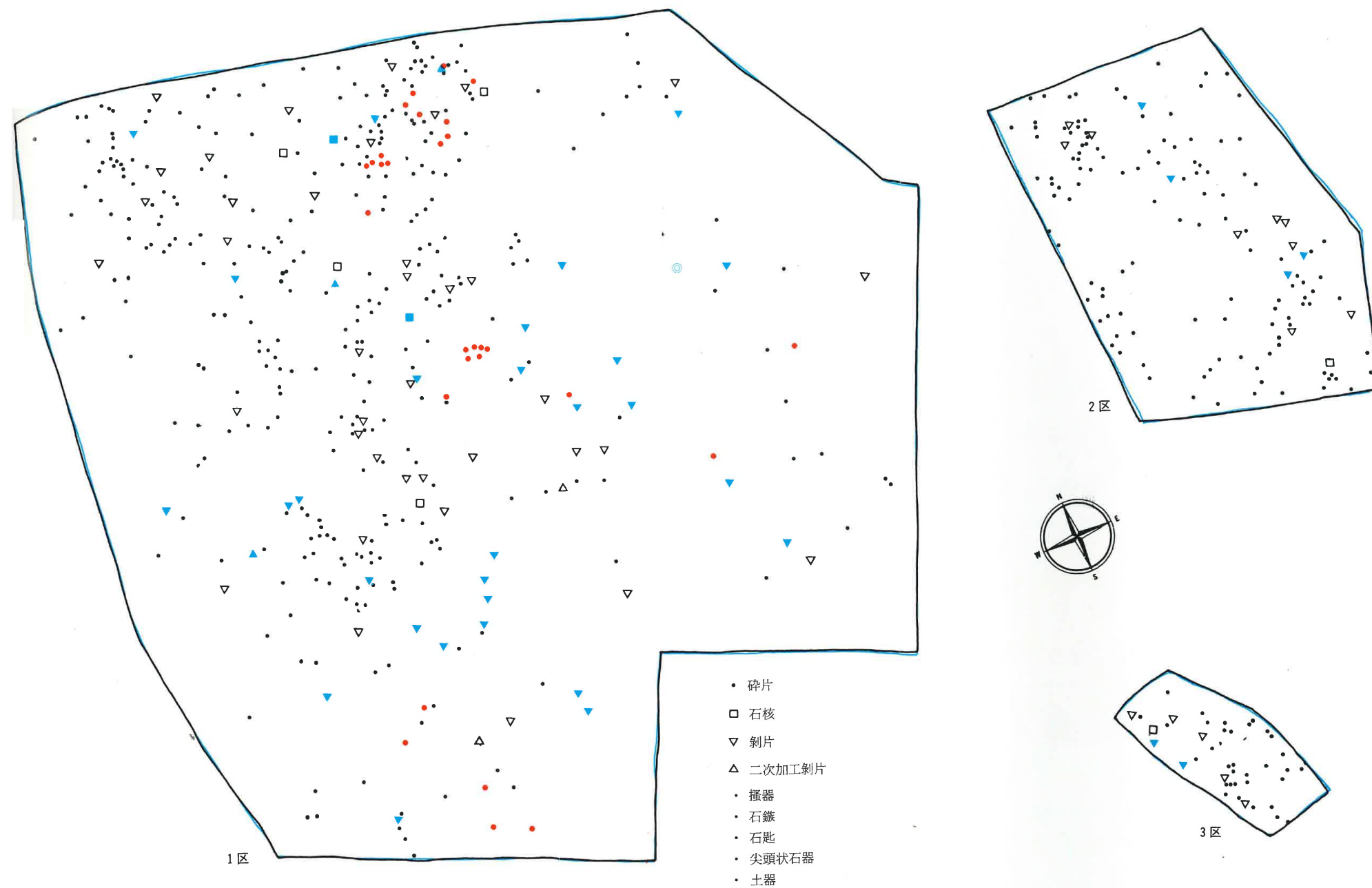
1から3は1区出土。1は地紋に山形押型文を施し、口縁直下に沈線を巡らせる。手向式土器。2は押し引き沈線を施す平椀式土器。3は縄文を施す船元式土器。4から16は5区出土の土器。5から9は船元式土器のキャリパー状に開く口縁部近くの破片。波状口縁になると思われるが、良好な破片がない。口縁内面には段状肥厚が僅かに見られ、外面には隆帯を配し、上下に刺突文を施す。10から14は外面に縄文を施す。15は7区出土。外面口縁下に斜めの沈線を施し、間に列点文、押し引き文を施文する平椀式土器。



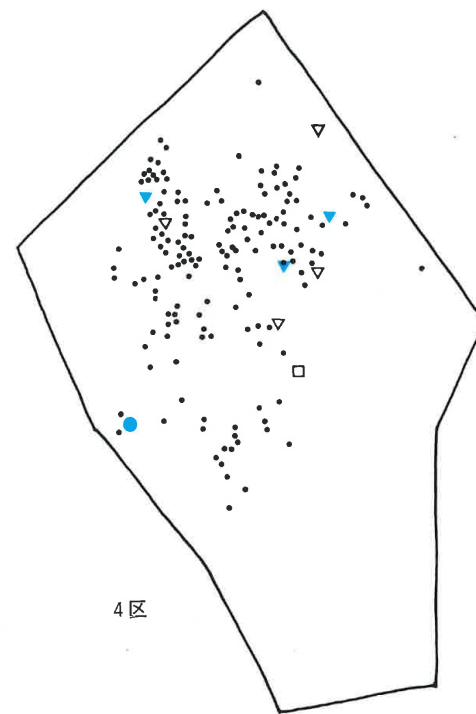
第7図 須久保遺跡出土土器（1）

c. 石 器

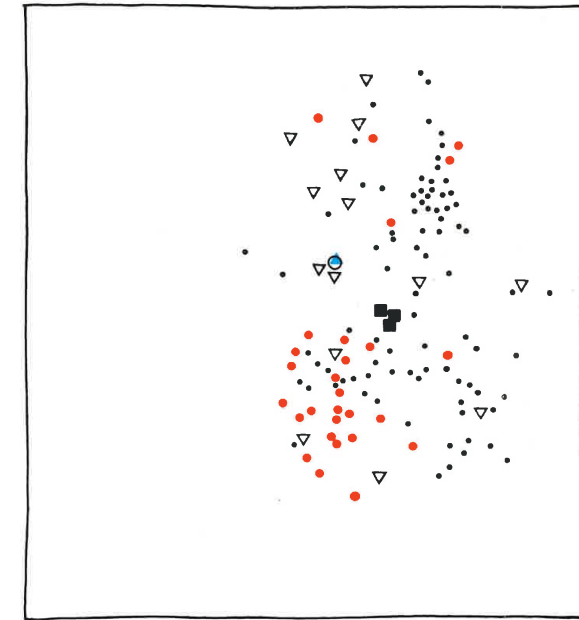
総数計67点出土している。種別の内訳では石鏃57点で最も多く、次いで搔器5点、石匙3点、柳葉型石器と尖頭状石器各1点である。なお、石核は11点、剥片は75点、碎片は641点出土している。



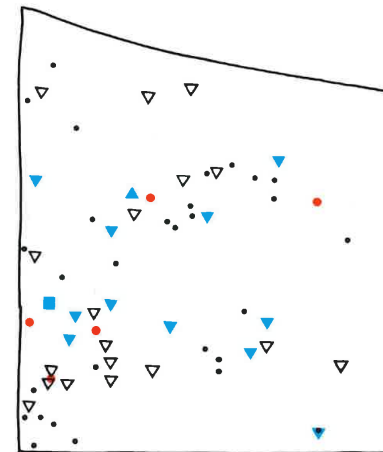
第8図 須久保遺跡各区遺物出土状況図 (1)



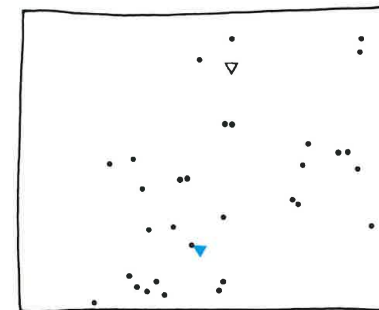
4区



5区



6区

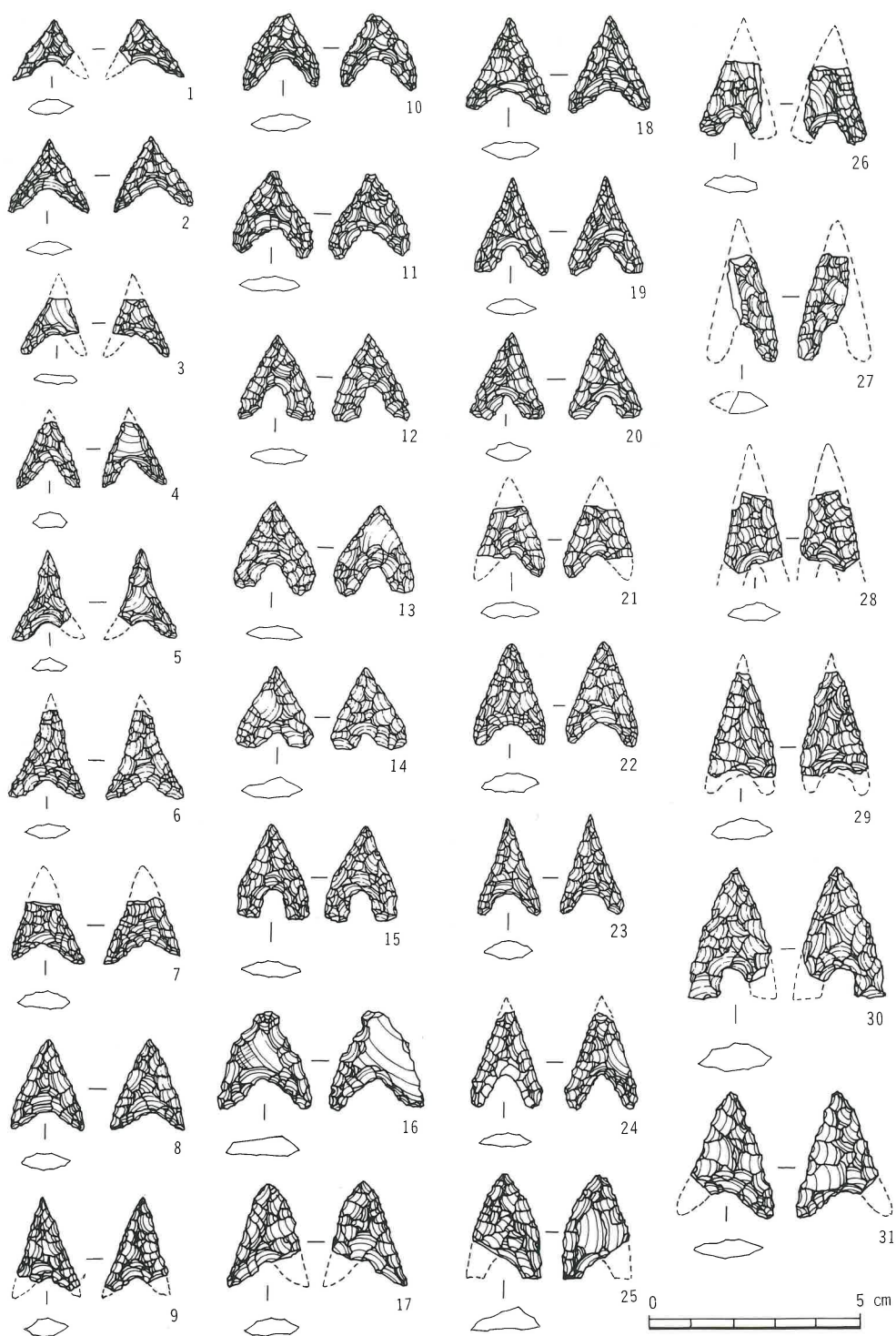


7区

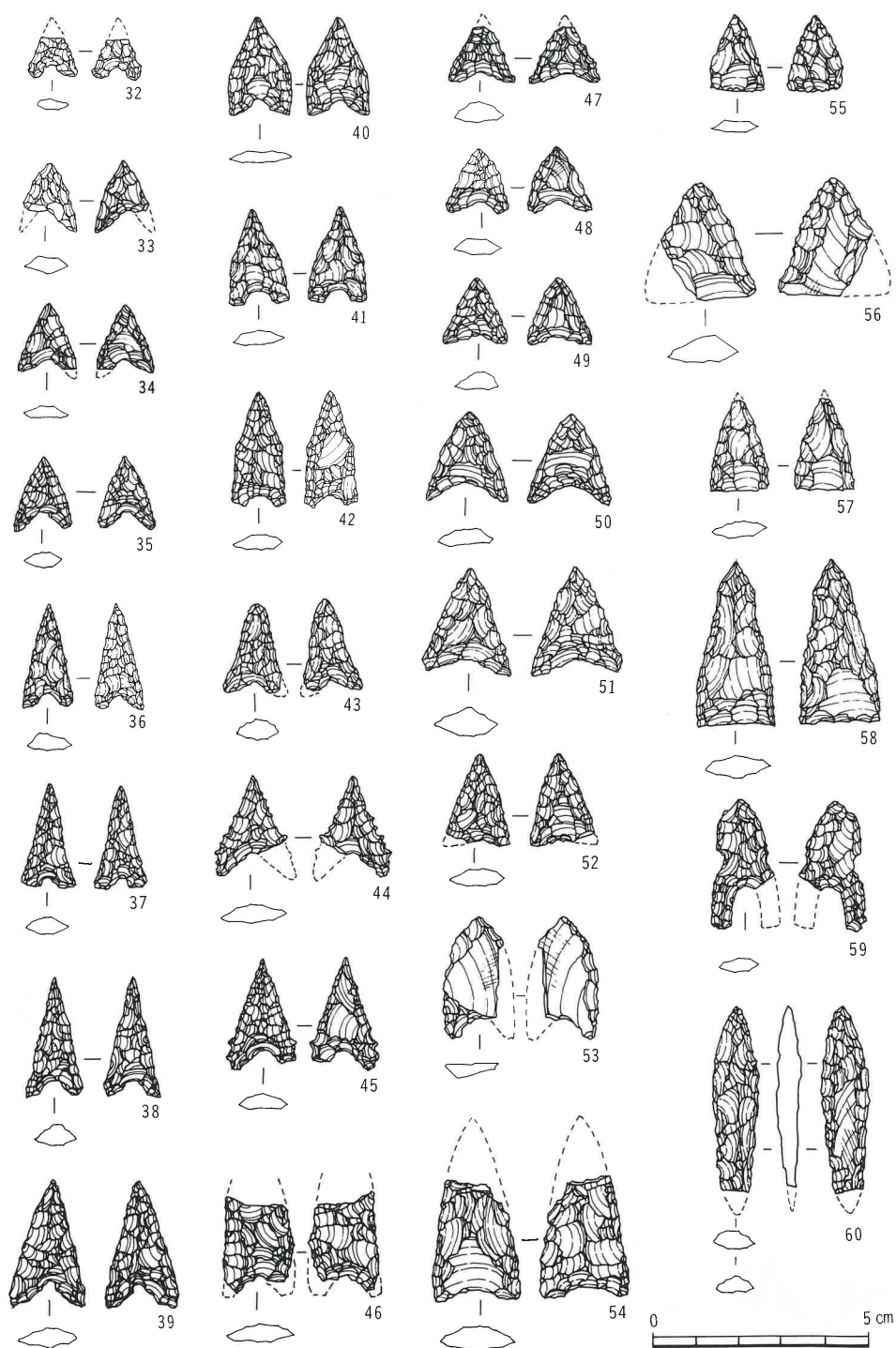
- 碎片
- 石核
- ▽ 剥片
- 大型石核
- 搔器
- 石鏃
- 石匙
- 抑葉形石器
- 土器



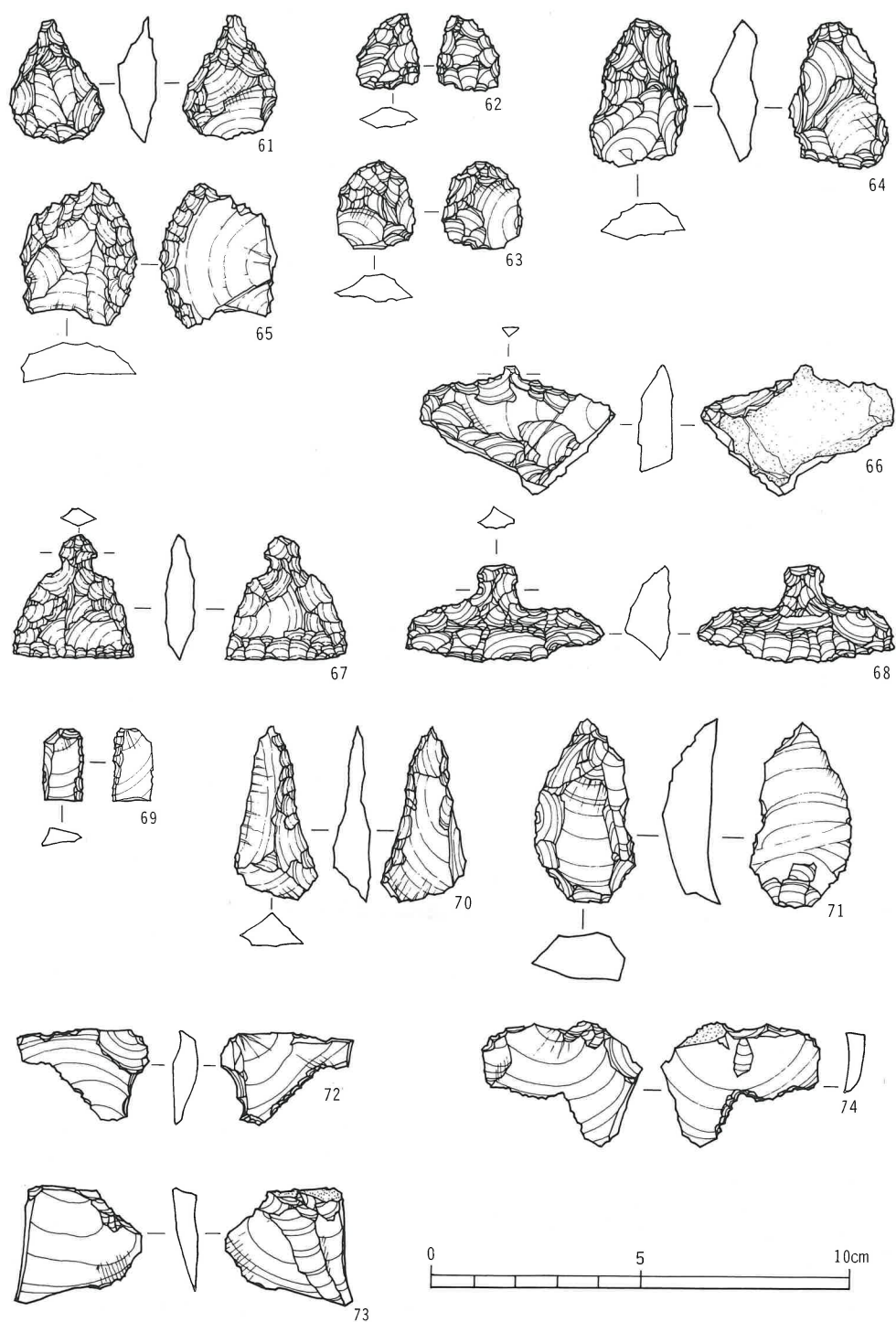
第9図 須久保遺跡各区遺物出土状況図(2)



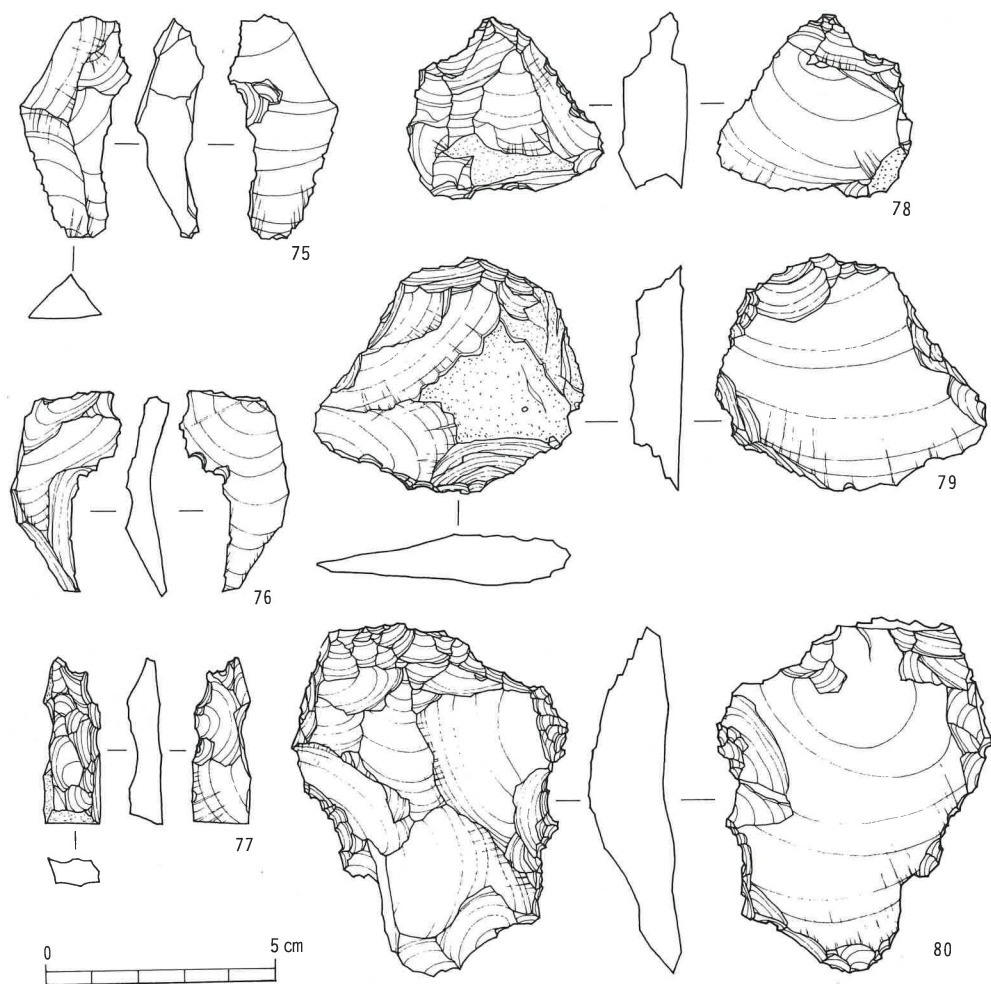
第10図 須久保遺跡出土石器 (1)



第11図 須久保遺跡出土石器（2）



第12図 須久保遺跡出土石器（3）

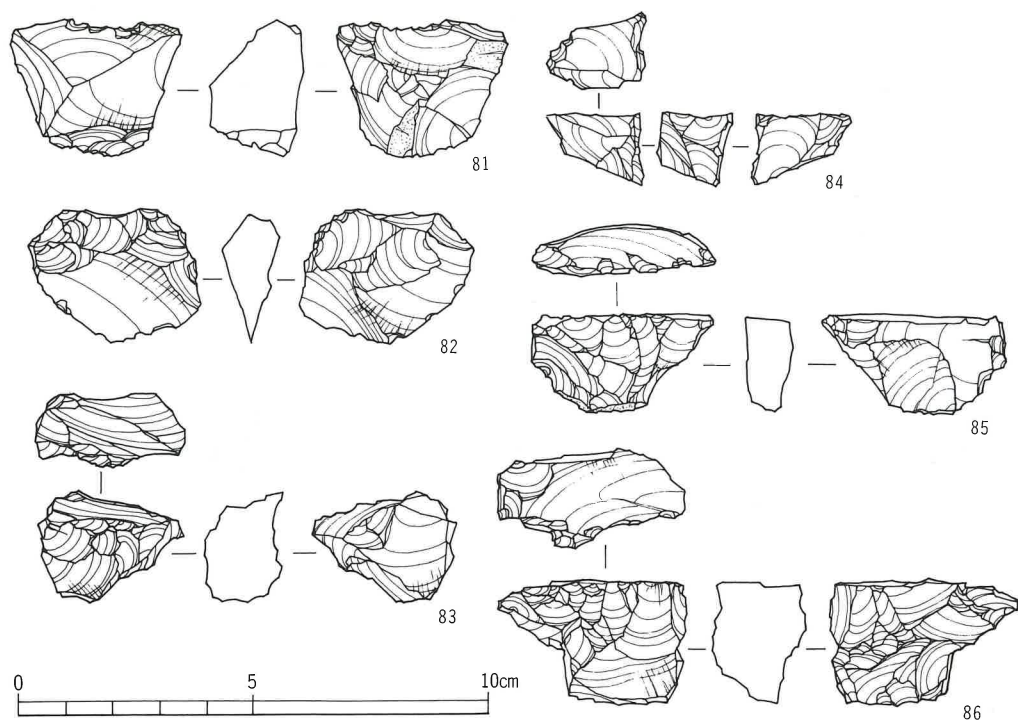


第13図 須久保遺跡出土石器（4）

石器の石材別では第1表に示すとおり、圧倒的に姫島産黒曜石が多い。次いでサヌカイトなどが僅かにある程度である。

石鏃は大きく7つのタイプに分類できる（第15表参照）。極わずかながら出土している土器に見られるように若干の時期差も考慮しなければならないが、最も注目されるのはB形式を除く各形式に姫島産黒曜石とともに、別の石材のものが必ず存在するということである。このことは、サヌカイトやチャート、漆黒色の黒曜石などの石鏃がモデルとして存在したということを示しているのではないかという考えがある。つまり、姫島産黒曜石以外の石鏃は「石器製作時の手本として持ち運ばれていた」可能性が高いのである。

また、石鏃以外ではごく僅かに搔器と石匙の狩猟・解体具が出土しており、遺跡の性格を示していると考えられる。



〔第14図 須久保遺跡出土石器（5）〕

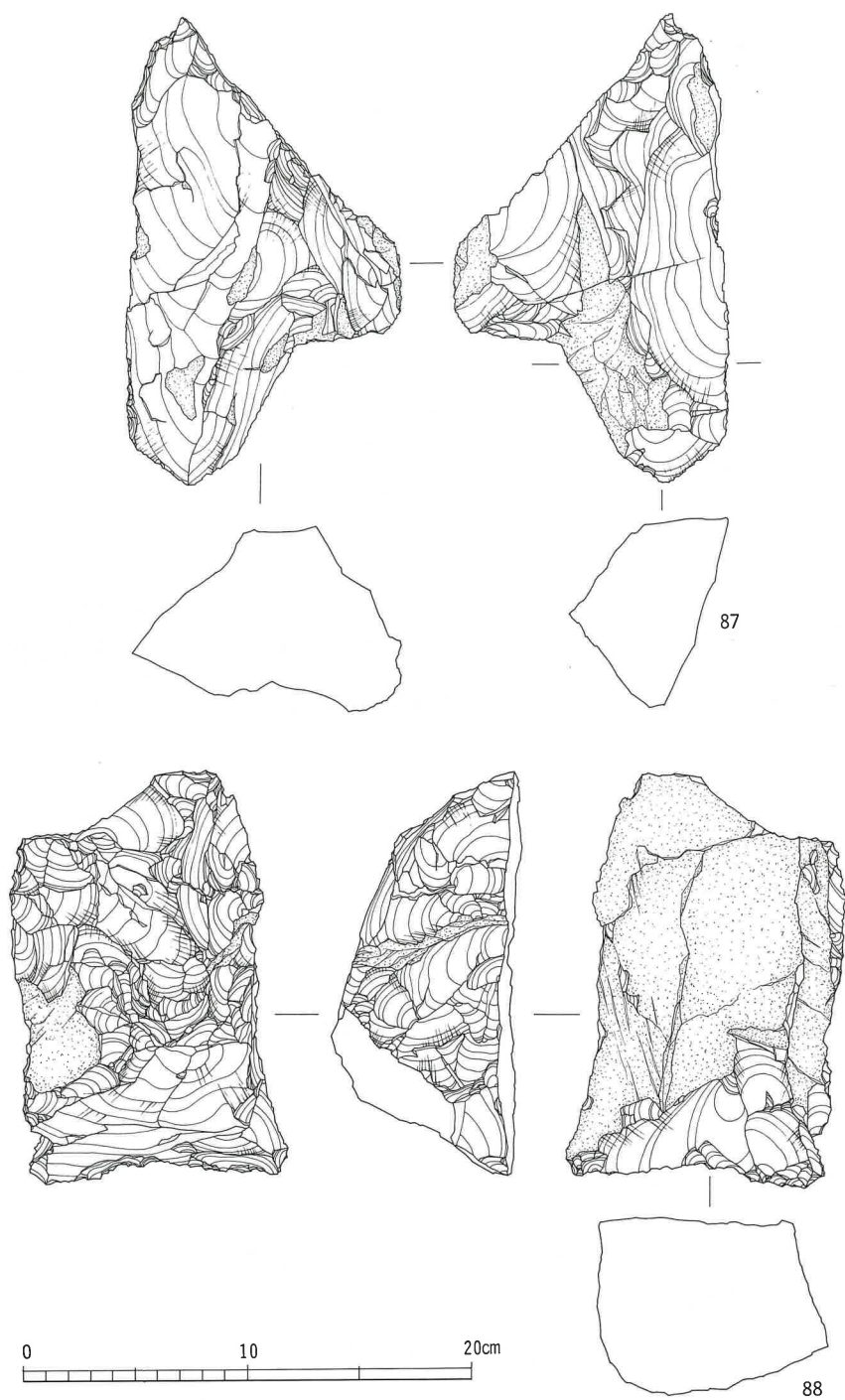
石核は5区から3個体まとめて出土した5.6觔、1.8觔、1.3觔の大型のものの他は、3.8 $\frac{g}{mm^3}$ から17.7 $\frac{g}{mm^3}$ の間におさまる小型のものである。大型の87と88は脈岩採取、89は転礫で接合関係はない。

	...	細身の二等辺三角形状をなし、身が厚い。漆黒色黒曜石・姫島ob
	...	抉りの深い楕円形鎌・姫島Ob
	...	身幅の広い大形鎌・サヌカイト・姫島ob
	...	小形の凹基式鎌・角閃安山岩・姫島ob
	...	二等辺三角形状をなし、脚部付近に鋸歯状の尖りがある。チャート・姫島ob
	...	柳葉形状を呈する。1点のみ・サヌカイト
	...	中胴部に不明瞭な関部有り、駒形鎌とは若干異なる。サヌカイト

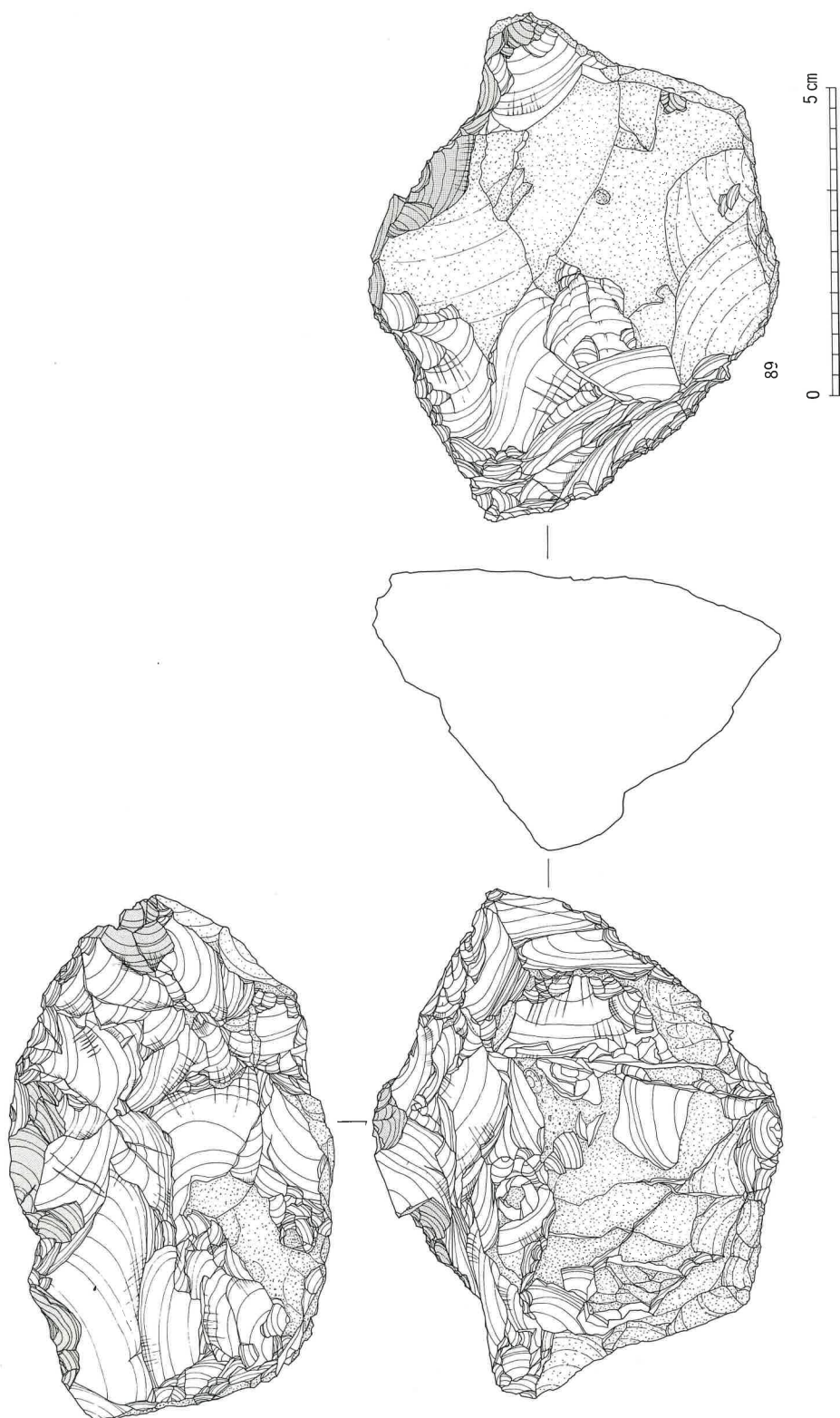
〔第15図 石鎌分類図〕

d. 小 結

まず、注目されるのが3区を除いて、いずれも姫島産黒曜石による石器製作を行っていたと見られることである。他の石材の碎片や剥片、石核などは見つかっておらず、姫島産黒曜石のみが使用されている。それを、さらに補強する資料が5区出土の姫島産黒曜石の大型石核である。ただし、この大型の姫島産黒曜石石核についてはどこかの集落に運ぶ途中の“中継基地”的な意味合いがあるのではないかという意見もあるが、周辺部における碎片や剥片の出土からこの地点で石器製作が行われたことは確実で、ここが最終的な目的地であったと考えられる。



第16図 須久保遺跡出土大型石核（1）

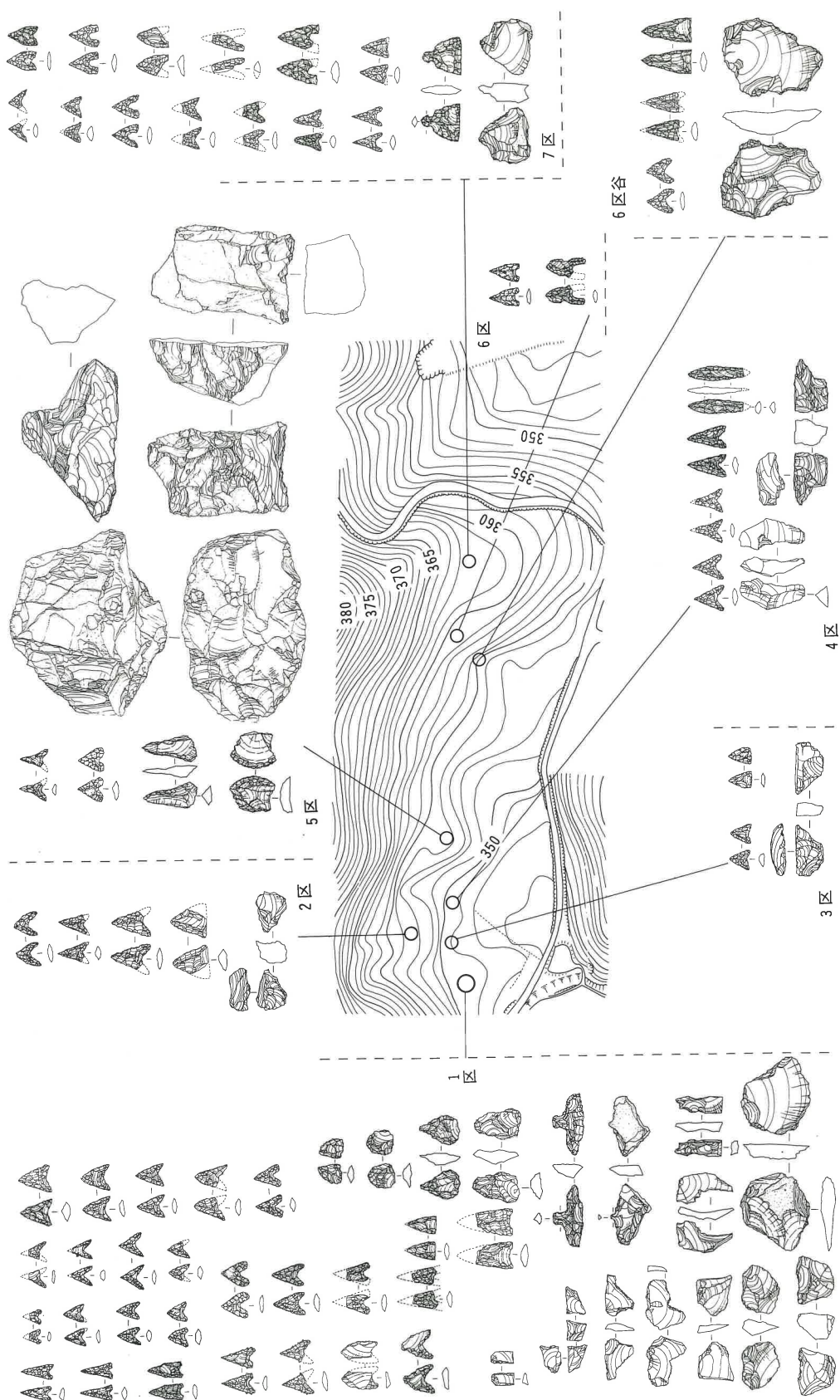


第17図 須久保遺跡出土大型石核 (2)

さらに、出土した石器も狩猟、解体具であり、土器の僅少さからいっても長期の滞在は考えにくい。そうすればこの遺跡は狩猟にあたってのキャンプ地、あるいは狩猟地そのものである可能性が高い。

キャンプ地あるいは狩猟地にデポしておいた石核を必要なときに取り出し、必要な石器を調達する、という形態の石器製作が行われたのではなかろうか。そう考えれば、縄文時代の狩猟の形態にまで迫ることが可能になるが、このような遺跡の類例が無いために、今後の類例の増加を待つてさらに考えていきたい。

これらの時期であるが、土器の出土が少なく明確な時期を決めえないが、5区の大型石核は周辺の土器の状況から見ても、中期前半から中頃の船元式土器に伴うものと考えても良からう。

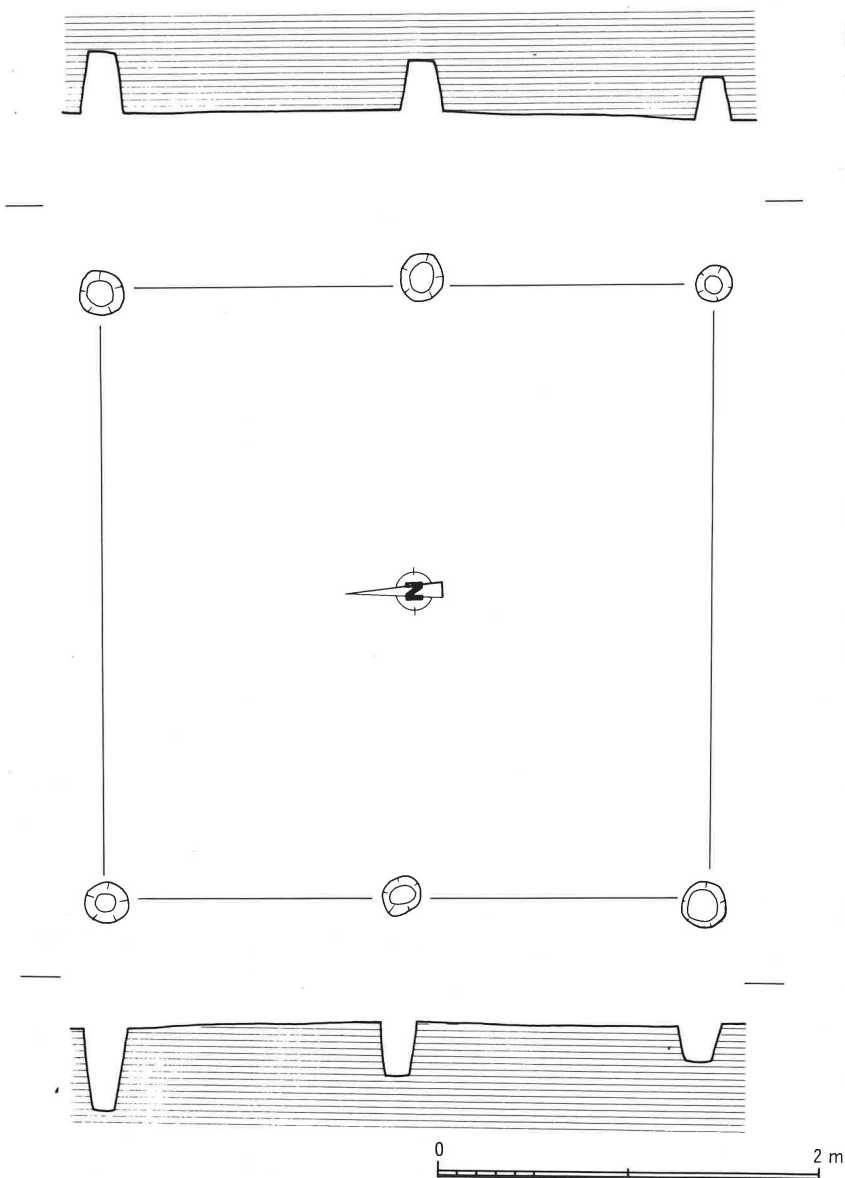


第18図 須久保遺跡各調査区石器出土状況

3. 中 世

a. 遺 構

中世に属する遺構、遺物は6区のみで発見された。6区の東側に入る浅い谷の上部の緩斜面をテラス状に削りだし、約150m²の平坦地を削りだしている。段落ちには石垣を築き、下部に排水のための溝を設けている。平坦地には掘立柱建物2棟、竪穴状遺構1基、土壇3基、柱穴列が発見された。



1号建物跡は1間×2間でほぼ正方形を呈する。南と西側には浅い溝を巡らせる。

2号建物跡は、1号と浅い溝を挟んでほぼ並行するように並んでいる。1間×1間であり、柱穴は浅い。内部には土壇があり、粘土状のものが堆積していたが、建物との関係は不明である。

竪穴状遺構は3.2m×1.6mで深さ10mである。柱穴はすべて浅く、この竪穴状遺構に伴うものであるかどうかは不明である。また、北側の壁際中央付近には焼土がみられた。

第19図 須久保遺跡6区第1号掘立柱建物 (1/40)

1号土坑は径0.7mの円形を呈しており、内部には浅いピットがある。内部には底から焼土、炭化物の順で堆積していた。出土遺物はなく時期は不明である。

2号土坑は0.5m×0.9mの長方形を呈しており、深さは15cm。出土遺物はなく時期、性格は不明である。

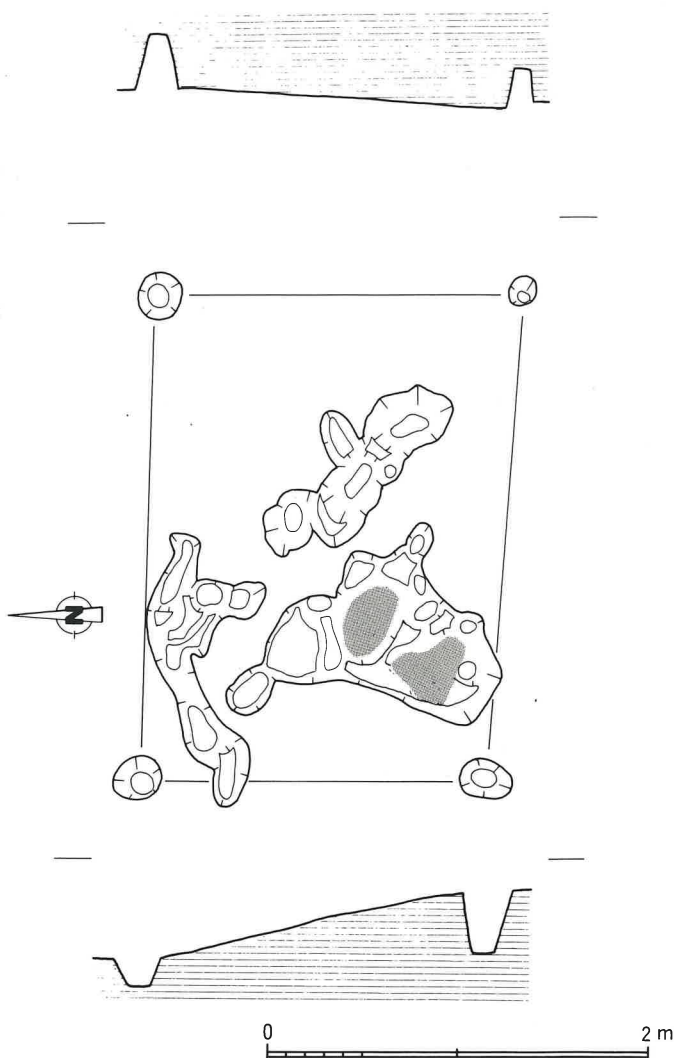
3号土坑は1.1m×0.7m、深さ20cm。出土遺物はなく時期、性格は不明である。

b. 遺物

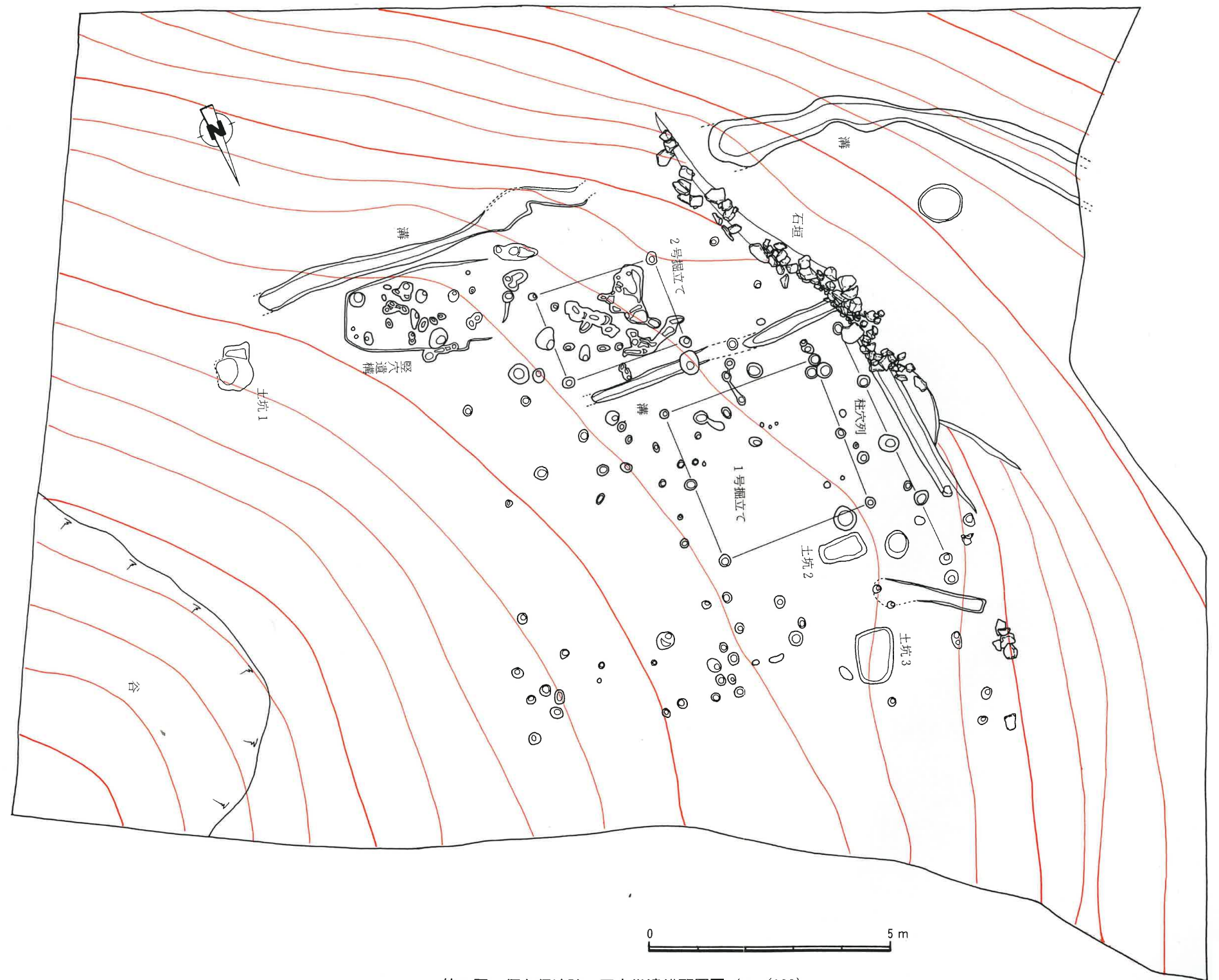
遺構からは土器が出土していない。すべて、遺構上面の土層、および谷状のやや低くなつたところに堆積した土層、及び調査区周囲の試掘調査時の出土である。1は玉縁の白磁。2は口禿の白磁。3は蓮弁文青磁碗。4は内面口縁部に2条、縦に1条の圈線を描く青磁碗。5は土器坏。復元口径12.8cm、器高4.8cm。体部が直線的に伸びる。6

は土器小皿。復元口径7.4cm、器高1.5cm。7は土器小皿。復元口径7.6cm、器高1.4cm。8から11は素焼き土器の鍋。8、9、21は口縁部を小さく外方に屈曲させる。10、11、20は同一形態のもので、口縁端直下を肥厚させ、突帯状に作る。12から15は口縁部が直線的に開く鉢。16、17は口縁端部上方に小さく立ち上がりがある鉢。18、19は口縁部を肥厚させるすり鉢。22は口縁部直下に突帯を巡らす鍋。

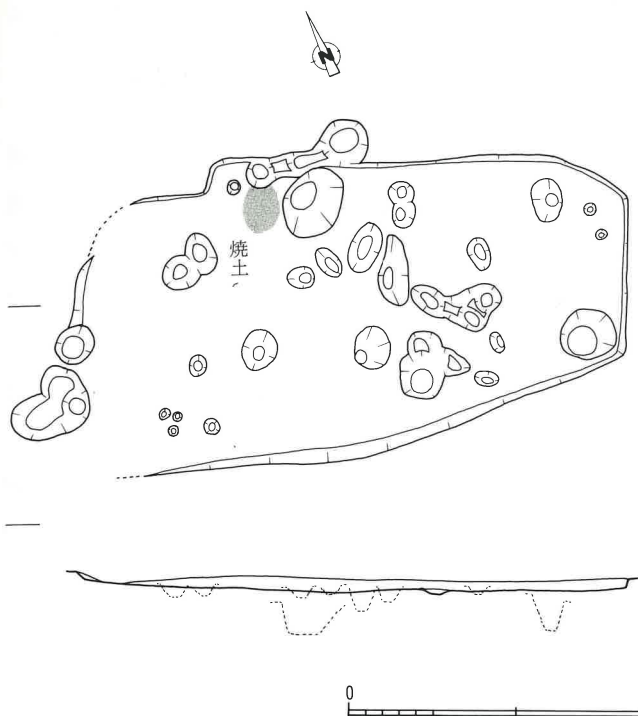
当地域の土器編年は土器坏と小皿を除いてはほとんど手が付けられておらず、他地域の編年に頼らざるを得ないのが現状である。当地域(広く言えば豊後、地域を狭めれば別府湾沿岸地域になろうか)では資料の蓄積はあるものの、雑器類の完形品に乏しく、有効な編年が組めない。



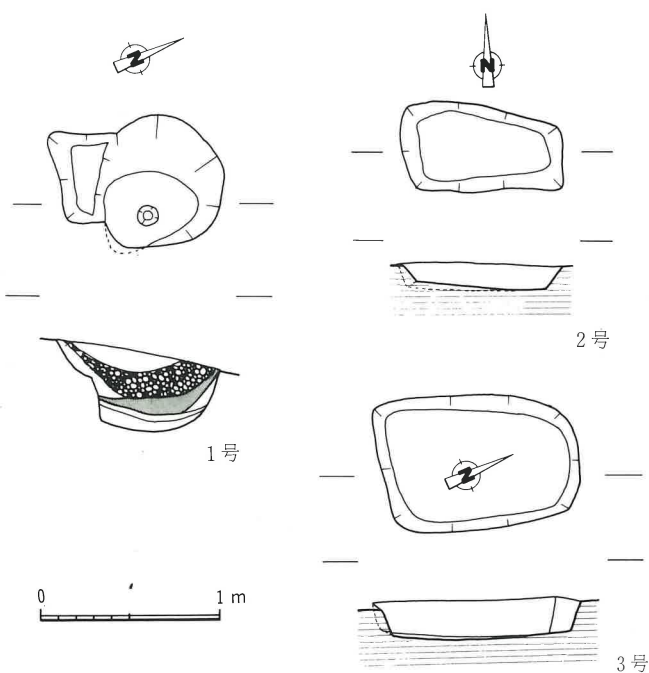
第20図 須久保遺跡6区第2号掘立て柱建物(1/40)



第21図 須久保遺跡6区中世遺構配置図(1/100)



第22図 須久保遺跡 6区竪穴遺構 (1/40)



第23図 須久保遺跡 6区土坑 (1/40)

また、当地域に特有な器形を有する器種が存在するのかどうかさえ、未だに明らかになっていない。そのような中で、須久保遺跡出土土器の編年的位置づけを検討するのはやや無謀の感があるが、以下簡単に検討を加えておきたい。

鍋類は2タイプあるが、豊前地域の雑器に触れた谷口氏の分類によると8、9などは「鍋A類」、10、11などは「釜A類」に分類されている。「鍋A類」は11世紀から見られるが、14世紀になると口縁部の屈曲が明瞭ではなくなるとされ、須久保遺跡出土のものは口縁部が短く曲がるなど13世紀代のものに近い。「釜A類」は口縁下に鐮状の突帯を巡らせるものから、徐々に口縁部を逆L字形に屈曲させるものへ変わり、14世紀には口縁部が肥厚するだけのものになるとされる。そうすると須久保遺跡出土のものは14世紀代に下るものである。22は「釜A類」であるとするれば13世紀代のものであろう。以上から考えると土器類の示す年代は、1から3や6、7、さらに8、9、21、22など13世紀代のものと、鉢類や鍋でも10、

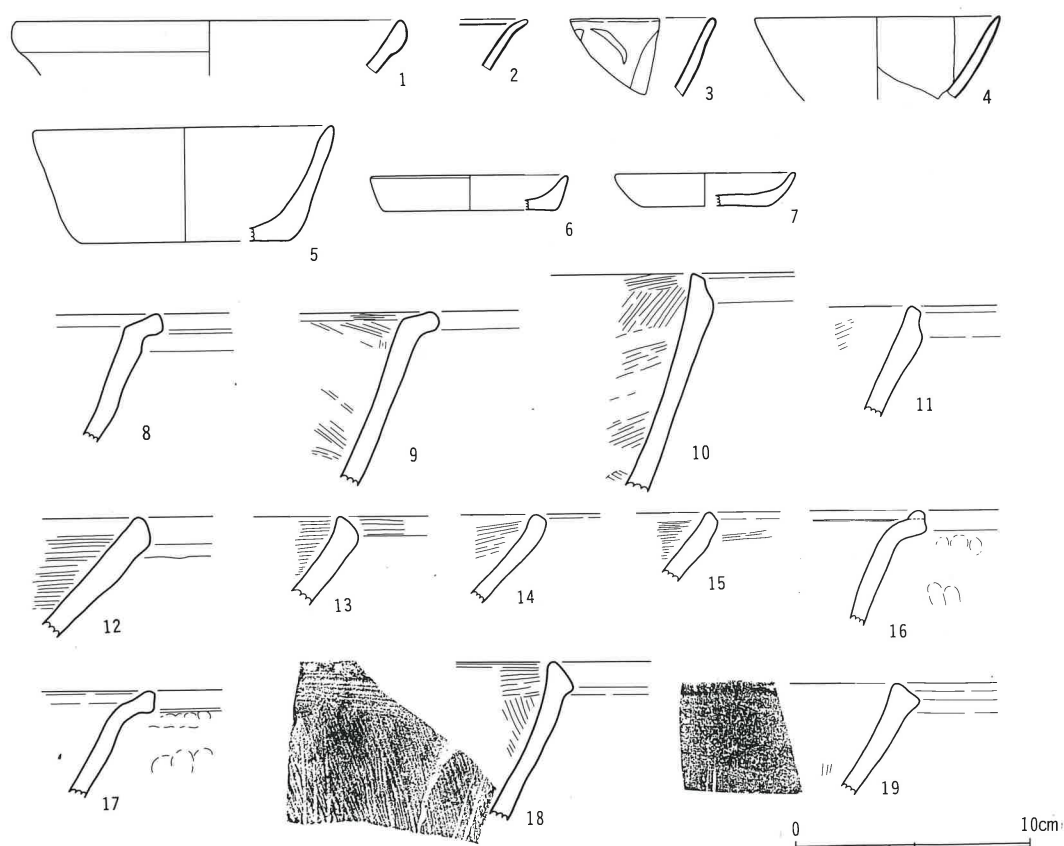
11、20など14世紀以降に下るものがある。さらに4や5などは15世紀にまで下る可能性が高く、出土遺物にはやや幅があると見なければなるまい。

c. 小 結

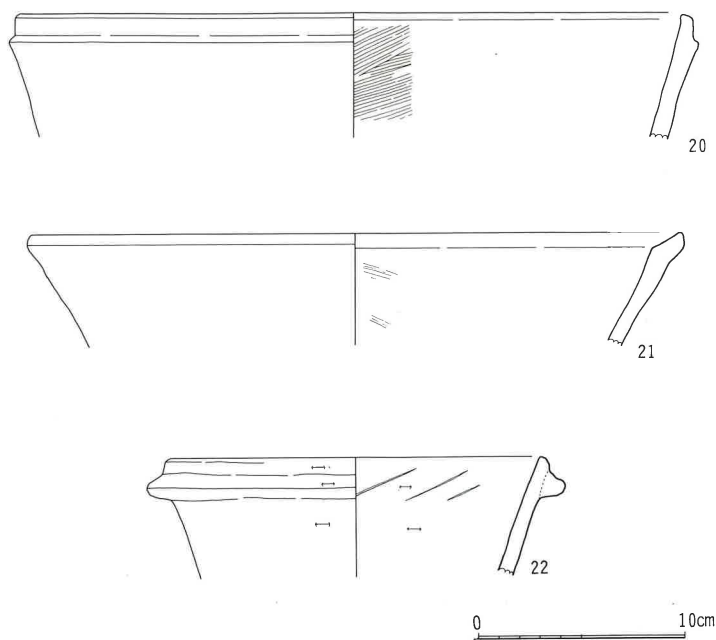
6区で検出された中世の遺構は切り合い関係は無いが、出土遺物にはやや時期差がある。遺物が遺構に伴っていないことから遺構群の時期を決めるのは難しいが、第26図に示すように遺構の近くからは土器坏と小皿が出土しており、その年代観は14世紀後半以降である。それらが遺構の年代を示すとすれば、ひとまとまりの遺構群は14世紀後半以降の比較的短時間存在したものと考えられよう。

周囲には現在集落はなく、また大きな集落が立地するような場所もない。このような場所に短期間存在した遺構群はどのような性格を有するものであろうか。

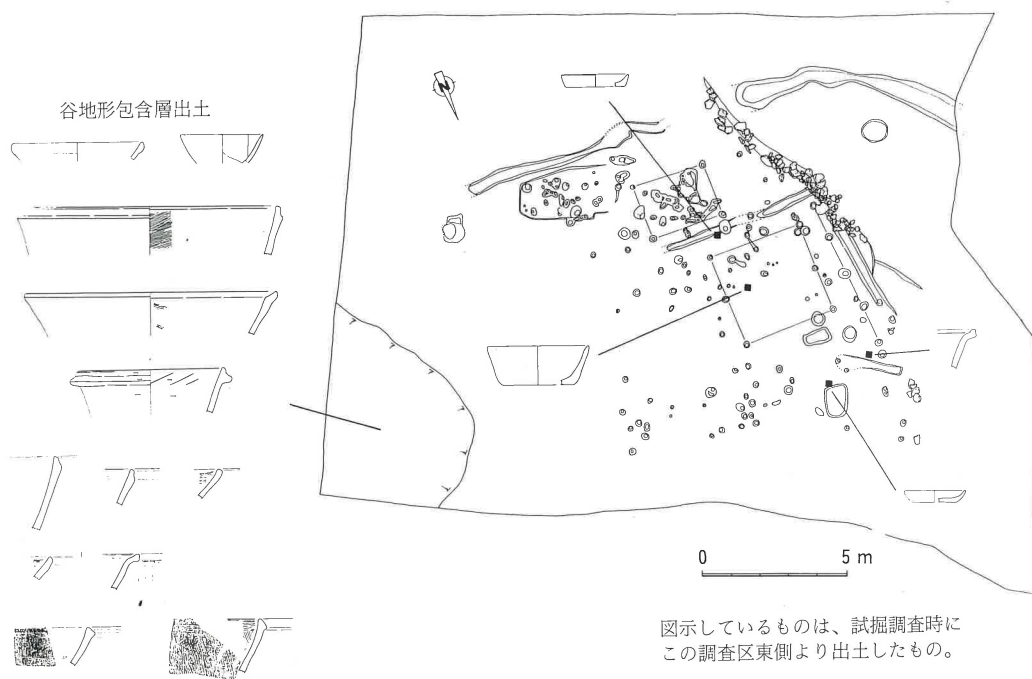
遺跡の歴史的環境の項で述べたように、この遺跡のすぐ隣接地を古道が通っていた可能性があり、そうすると決して“山間僻地”であったわけではなく、主要道沿いに開かれた遺構群であったと考えることが出来る。



第24図 須久保遺跡 6区出土中世土器・磁器 (1)



第25図 須久保遺跡 6 区出土中世土器（2）



図示しているものは、試掘調査時に
この調査区東側より出土したもの。

第26図 須久保遺跡 6 区中世土器出土地点

第3節 ま と め

そそり立った山が、やや傾斜を緩めて平坦部を造りだそうという、その変換点付近に須久保遺跡は立地している。しかも、湿地と小さな尾根が交互に存在するという、遺跡の立地としては非常に希有なものである。そのためか、出土した遺物から想定できる遺跡の性格もまた、居住生活からは離れたものである可能性が指摘できる。

縄文時代についてはすでにこの遺跡の性格について清水宗昭氏と牧尾義則氏の考えが示されている。清水氏は須久保遺跡が別府湾から安心院盆地方面へ通じる峠近くに位置することから姫島産黒曜石の供給にあたっての「中継基地的な性格」が考えられるとしている。一方牧尾氏は「須久保遺跡は土器の出土量から見ても、長期的な居住は考えられず、地形的にも遺物の内容からしても、狩猟を目的としたキャンプ地の一つの拠点であったことが想定される」としている。両者の考えは異なるが、一般的な集落遺跡ではない特殊な性格を与えることでは一致している。ただし、いずれも遺物などの整理が完了する以前の見解であり、今回正式報告を纏めるにあたって若干の事実認定の変更がなされたことから、あらためて調査者の見解を述べておきたい。

結論から言うと、縄文時代はこの須久保遺跡の場所が狩猟に当たったのキャンプ地、あるいはむしろ狩猟地そのものではないかということである。石器製作のための石材の確保、埋納、そして必要になればそのつど取り出して石器を製作する、碎片の飛散、そして再び石核の埋納、という行為が須久保遺跡の石器、およびその他の石材類の解釈のすべてである。勿論、そこからは具体的な狩猟の姿も浮かんでこよう。

湿地は「ヌタ」と呼ばれる猪の集まる場所である。遺跡のある「ヌタ」に猪が集まったかどうかは推測の域をでないが、民俗例で「ヌタ」の風下に葡萄し、猪が現れるのを待つ狩猟の形態があるという。土器の僅少さ、大型石核や多くの石鏃や剝片の存在、そして自然条件は前記の想定を支持するように思われる。今後、同様の立地に同内容の遺跡が発見されたならば、より可能性が高まるであろう。遺跡調査にあたっての場所の選定にも、十分な配慮が必要である。

中世は、道の存在を抜きにしては理解できないような“山の中”である。水田は勿論できる場所はない。そのような山の傾斜地を削ってまで平坦面を確保し、居住地を造作する。これは何かの職人に係わるものではないかという思いが強いが、考古学的にそれを証明する史料を得ることは出来なかった。

註1 清水 宗昭 「姫島産黒曜石」『大分歴史辞典』OBS大分放送 1990

註2 牧尾 義則 「Ⅳ まとめ 3. 石器について」『羽田遺跡（Ⅰ地区）』国東町教育委員会 1990

第1表 須久保遺跡石器観察表

図版番号	No.	器 種	出土区	出土グリット	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 材	備 考
	1	打製石鏃	7	D-3	1.5	1.9+d	0.4	0.4	姫島産黒曜石	凹基無茎式・片脚部欠損
	2	〃	1	H-25	1.7	2.0	0.3	0.5	姫島産黒曜石	凹基無茎式
	3	〃	1	G-25	1.4+d	1.6+d	0.2	0.2	姫島産黒曜石	凹基無茎式・先端・片脚欠損
	4	〃	1	F-25	1.6+d	1.6	0.3	0.4	姫島産黒曜石	凹基無茎式・先端部欠損
	5	〃	5		2.2	1.8+d	0.3	0.6	サヌカイト	凹基無茎式・片脚部欠損
	6	〃	4	G-21	2.0+d	1.9	0.3	0.7	サヌカイト	凹基無茎式・先端部欠損
	7	〃	7	E-2	1.5+d	1.8	0.4	0.6	黒色黒曜石	凹基無茎式・先端部欠損
	8	〃	1	G-24	2.1	1.8	0.3	0.9	姫島産黒曜石	凹基無茎式・基部欠損
	9	〃	2	D-23	2.4+d	1.5+d	0.4	0.8	黒色黒曜石	凹基無茎式・両脚端欠損
	10	〃	2	D-23	1.9+d	1.9	0.4	0.7	姫島産黒曜石	凹基無茎式
	11	〃	6		2.1	2.0	0.3	0.7	姫島産黒曜石	凹基無茎式
	12	〃	6	E-5	2.0	1.9	0.4	0.8	姫島産黒曜石	凹基無茎式
	13	〃	1	F-25	2.0	2.0	0.3	0.9	角閃安山岩	凹基無茎式
	14	〃	5		1.9	1.9	0.5	1.1	サヌカイト	凹基無茎式
	15	〃	6	E-5	2.2	1.7	0.4	0.9	サヌカイト	凹基無茎式・五角形状
	16	〃	1	G-24	2.3	2.3	0.4	1.6	姫島産黒曜石	凹基無茎式
	17	〃	1	G-26	2.4	2.0+d	0.4	1.0	姫島産黒曜石	凹基無茎式・片脚部欠損
	18	〃	4	G-21	2.2	1.9	0.4	0.8	姫島産黒曜石	凹基無茎式
	19	〃			2.4	1.3	0.3	0.8	チャート	凹基無茎式
	20	〃	1	G-25	2.0	1.7	0.4	0.7	姫島産黒曜石	凹基無茎式
	21	〃	6	E-5	1.7+d	1.6+d	0.3	0.5	姫島産黒曜石	凹基無茎式・先端・片脚欠損
	22	〃	1	I-26	2.5	1.7	0.4	1.0	姫島産黒曜石	凹基無茎式
	23	〃	6	E-5	2.4	1.5	0.4	0.9	姫島産黒曜石	凹基無茎式
	24	〃	1	H-25	2.2+d	1.7	0.3	0.6	姫島産黒曜石	凹基無茎式・先端部欠損
	25	〃	6	E-5	2.5	1.6+d	0.5	1.2	姫島産黒曜石	凹基無茎式・片脚部欠損
	26	〃	1	G-25	1.7+d	1.5+d	0.4	0.7	姫島産黒曜石	凹基無茎式・先端・片脚欠損
	27	〃	6	E-5	2.5+d	1.0+d	0.5	0.9	姫島産黒曜石	凹基無茎式・先端・片脚欠損
	28	〃	1	G-24	1.8+d	1.4+d	0.4	0.9	姫島産黒曜石	凹基無茎式・先端・両脚欠損
	29	〃	6		2.5+d	1.6+d	0.5	1.3	姫島産黒曜石	凹基無茎式・先端・両脚欠損
	30	〃	6	E-5	3.1	1.9+d	0.6	2.4	松脂岩	凹基無茎式・片脚部欠損
	31	〃	2	E-23	3.0	2.0+d	0.5	1.5	姫島産黒曜石	凹基無茎式・片脚部欠損
	32	〃	1	H-25	1.0+d	1.1	0.3	0.3	サヌカイト	凹基無茎式・先端部欠損
	33	〃	1	F-25	1.6+d	1.3+d	0.4	0.5	姫島産黒曜石	凹基無茎式・片脚部欠損
	34	〃	1	H-25	1.6	1.3+d	0.3	0.4	姫島産黒曜石	凹基無茎式・片脚部欠損
	35	〃	1	G-24	1.8	1.3	0.3	0.4	姫島産黒曜石	凹基無茎式
	36	〃	1	G-24	2.5	1.2	0.3	0.7	松脂岩	凹基無茎式
	37	〃	1		2.4	1.2	0.4	0.7	不明(ガラス質)	凹基無茎式
	38	〃			2.7	1.3	0.4	1.0	サヌカイト	凹基無茎式
	39	〃	4	G-21	3.0	1.7	0.4	1.4	姫島産黒曜石	凹基無茎式
	40	〃	6	E-5	2.3	1.5	0.2	0.8	サヌカイト	凹基無茎式・五角形
	41	〃	6		2.2	1.4	0.3	0.8	サヌカイト	凹基無茎式・五角形
	42	〃	1	H-26	2.7	1.3	0.3	0.9	姫島産黒曜石	凹基無茎式・五角形

図版番号	№	器 種	出土区	出土グリット	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 材	備 考
	43	〃	6	E-5	2.1+d	1.4+d	0.5	0.8	片麻岩	凹基無茎式・片脚部欠損
	44	〃	1	H-25	2.3+d	1.8+d	0.4	0.7	姫島産黒曜石	凹基無茎式・片脚部欠損
	45	〃	1	I-24	2.6	1.6	0.3	0.9	チャート	凹基無茎式・片脚部欠損
	46	〃			2.3+d	1.6+d	0.4	1.7	姫島産黒曜石	凹基無茎式・先端・脚部欠損
	47	〃	6	E-5	1.3+d	1.6	0.5	0.7	姫島産黒曜石	凹基無茎式・先端部欠損
	48	〃	1	G-26	1.6	1.5	0.4	0.6	姫島産黒曜石	凹基無茎式
	49	〃	3	F-23	1.5	1.5	0.4	0.5	姫島産黒曜石	凹基無茎式
	50	〃	1	H-24	2.1	1.9	0.3	0.9	姫島産黒曜石	凹基無茎式
	51	〃	1	F-24	2.6	2.1	0.7	2.1	サヌカイト	凹基無茎式
	52	〃	6	E-5	2.1	1.5+d	0.4	1.2	チャート	凹基無茎式・片脚部欠損
	53	〃	1	G-25	2.8	1.3+d	0.3	1.1	姫島産黒曜石	凹基無茎式・片脚部欠損
	54	〃	1	I-23	2.8+d	2.1	0.5	3.1	サヌカイト	凹基無茎式・先端部欠損
	55	〃	3	F-23	1.8	1.3	0.2	0.4	角閃安山岩	平基無茎式
	56	〃	2	D-23	2.8	1.5+d	0.6	3.3	姫島産黒曜石	平基無茎式・片脚部欠損
	57	〃	1	G-25	2.1+d	1.4	0.3	1.0	サヌカイト	平基無茎式・先端部欠損
	58	〃	6		3.8	1.8	0.5	3.8	サヌカイト	平基無茎式
	59	〃	6		3.0	1.4+d	0.3	1.0	姫島産黒曜石	異形・片脚欠損
	60	〃	4	F-20	4.3+d	1.1	0.4	2.1	サヌカイト	柳葉形・片端部欠損
	61	尖頭状石器	4	H-26	3.0	2.3	0.9	4.7	サヌカイト	
	62	〃	1		1.8	1.5	0.5	1.3	姫島産黒曜石	
	63	〃	1	I-24	2.1	1.8	0.6	2.3	姫島産黒曜石	
	64	搔 器	1	H-24	3.6	2.4	0.7	6.0	姫島産黒曜石	石鏃未製品?
	65	〃	5	F-17	3.5	2.8	0.7	5.9	サヌカイト	横長剝片
	66	石匙	1	I-24	3.1	4.7+d	0.8	11.3	姫島産黒曜石	横匙
	67	〃	6	E-5	2.9	2.9	0.7	2.4	サヌカイト	縦匙
	68	〃	1	H-25	2.2	4.6+d	1.0	6.2	姫島産黒曜石	横匙
	69	剝片	1	F-25	1.7+d	1.0	0.4	0.9	姫島産黒曜石	二次加工
	70	〃	5	F-17	4.1	2.1	0.8	3.5	サヌカイト	二次加工
	71	〃			4.4	2.5	1.1	10.4	姫島産黒曜石	縦長剝片
	72	〃	1	I-26	2.2	3.2	0.5	2.7	姫島産黒曜石	横長剝片
	73	〃	1	G-24	2.8	3.0	0.5	3.7	姫島産黒曜石	縦長剝片
	74	〃	1	I-24	3.0	3.9	0.3	4.7	姫島産黒曜石	二次加工
	75	〃	4	G-21	4.9	2.0	1.0	12.5	姫島産黒曜石	縦長剝片
	76	〃	1	H-26	4.3	2.2	0.6	3.1	姫島産黒曜石	縦長剝片
	77	〃	1	G-24	3.7	1.2	0.7	4.1	姫島産黒曜石	
	78	〃	6	E-5	4.0	4.3	1.4	20.1	姫島産黒曜石	
	79	〃	1	I-25	5.2	6.0	1.1	36.2	サヌカイト	
	80	〃	6		7.7	6.1	1.7	64.2	姫島産黒曜石	
	81	石核	1	I-25	—	—	—	13.2	姫島産黒曜石	
	82	〃	1	G-24	—	—	—	9.8	姫島産黒曜石	
	83	〃	2	C-24	—	—	—	9.1	姫島産黒曜石	
	84	〃	1	I-24	—	—	—	3.4	姫島産黒曜石	
	85	〃	3	F-23	—	—	—	8.4	姫島産黒曜石	
	86	〃	4	G-21	—	—	—	17.2	姫島産黒曜石	
	87	〃	5	E-17					姫島産黒曜石	
	88	〃	5	E-17					姫島産黒曜石	
	89	〃	5	E-17					姫島産黒曜石	

6 ^{おがた}尾形第1遺跡

第1節 調査の概要

1. はじめに

尾形第1遺跡は大阪府速見郡日出町大字南端に所在する。台地状の山地をなす岳ヶ下山(484.5m)は周辺からは約100m高まっているが、遺跡はその一段低い東側の丘陵地帯にある。同時にここは北・西方向に広がる標高300m強の丘陵地帯の東南の端に位置し、この付近から東は東流する川によって浸食され深い谷が別府湾まで続く。

尾形第1遺跡の本調査に先だって周辺では日出ジャンクションの道路建設予定地内の3ヶ所の地区を試掘調査した。尾形第1遺跡の北側に続く山地の頂上部を試掘したのが尾形第3地区である。ここでは路線中央部に沿って調査したが遺構・遺物は検出できなかった。尾形第1遺跡の南方約200mのところには早や緩やかな斜面地形および独立丘陵状の小丘がある。この場所を尾形第2地区として試掘調査を行ったが遺構・遺物を検出できなかった。

2. 調査の概要

尾形第1遺跡は微地形的には東北方向に開けた谷の周辺にあり、谷の中には小川があるが通常は幅数mの涸れ沢状態のままで水は存在しない。川を挟んで北側をA地区、南側をB地区とした。A地区は標高349m～361mにあり、東北側・北側・南西側を急な上りの斜面によって囲まれた緩やかな斜面状の地形である。B地区は標高357m～368mにある。やや北側の試掘トレンチを設けた標高352m前後の川沿いの場所では礫層が多く遺物包含層はなかった。

調査に際し発掘区を10m×8mの区画に分け、東から西の方向にA～Jとし北から南の方向に向かって1～14の番号を付けた。

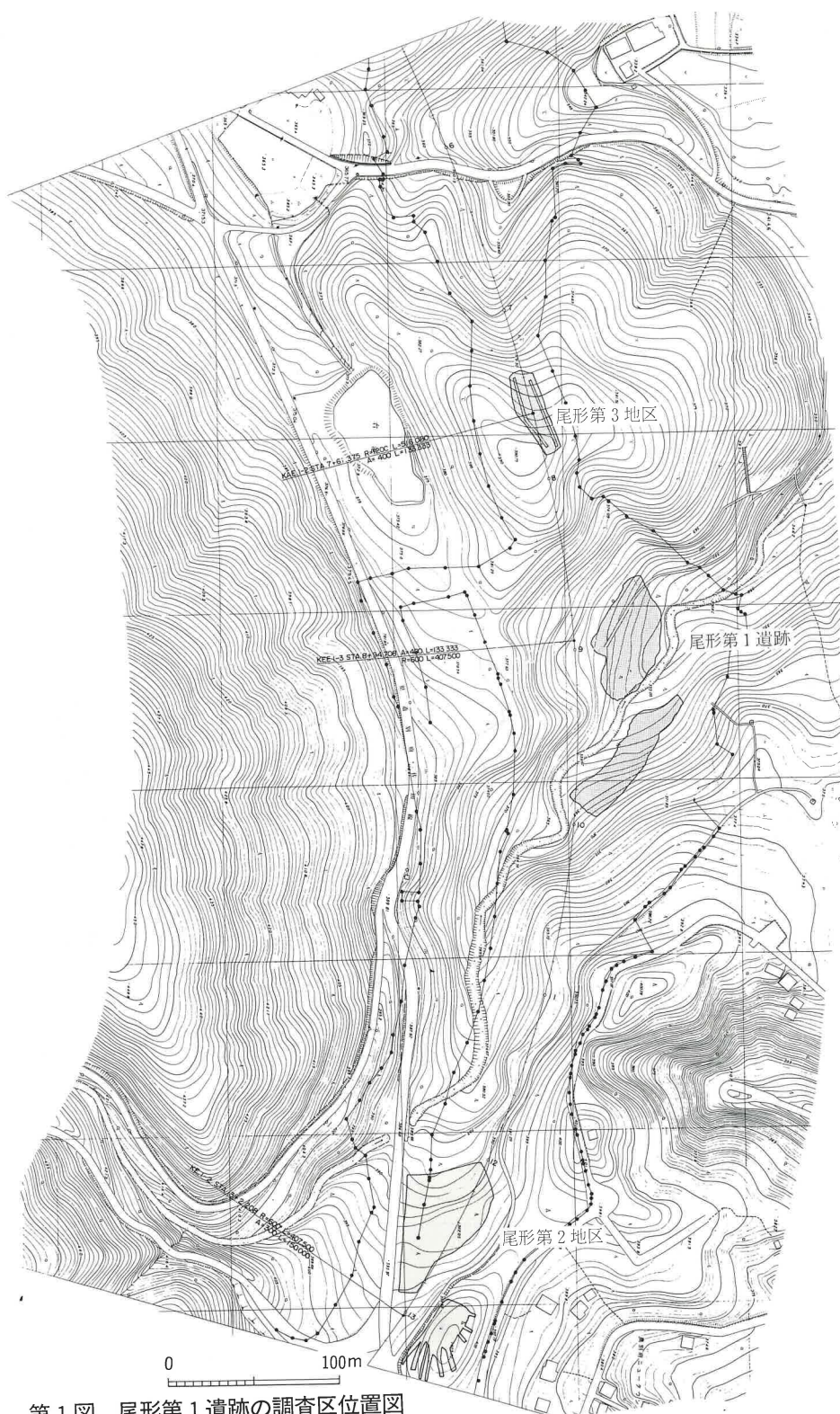
調査区内にある段落ちは一時期耕地として利用していた頃の名残である。

調査の結果、A地区において縄文時代早期の遺物包含層を斜面の中でも高い部分から検出した。土層の堆積状態から見て本来はもっと広範囲に包含層が存在したようである。また、時期不詳の土坑2基を検出した。

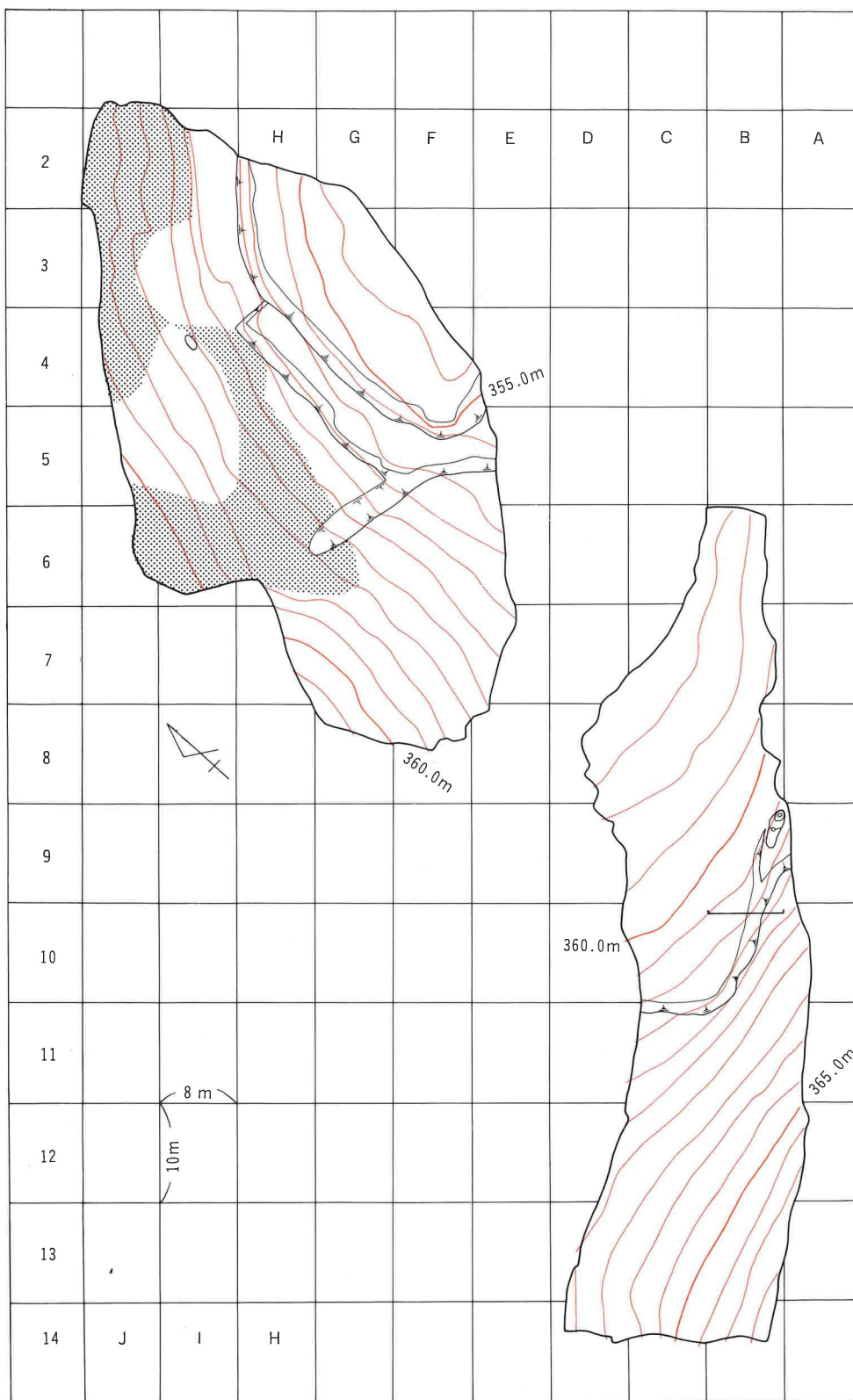
第2節 調査の結果

1. 層 序

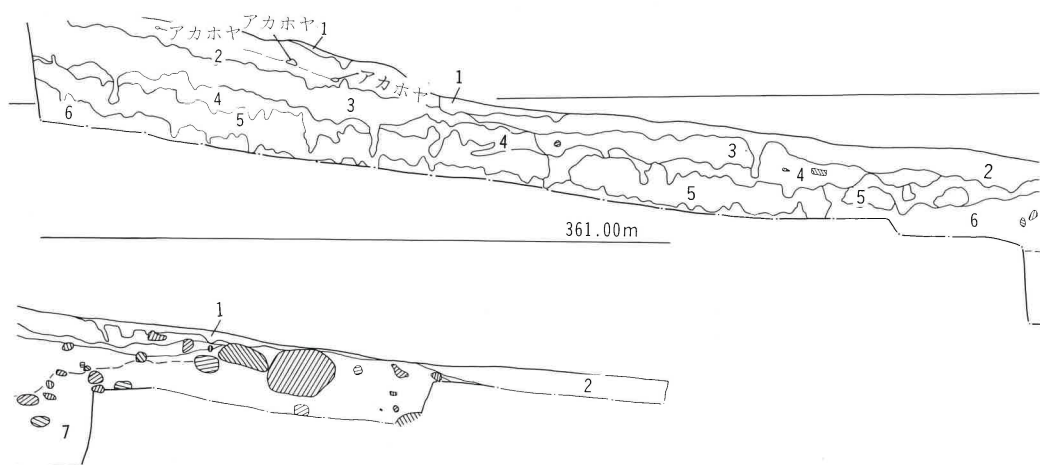
第3図は10B区北端に設けた幅1mトレンチの南壁土層図である。層序は第1層が表土(土層図作成時には重機による表土剥ぎが終了していた。)、第2層が黄褐色土層でアカホヤの土壌化したものである。厚さは20cm前後ある。山寄りの部分には第2層の下半部に部分的に純粋な



第1図 尾形第1遺跡の調査区位置図
(上が北)



第 2 図 尾形第 1 遺跡の遺構配置図

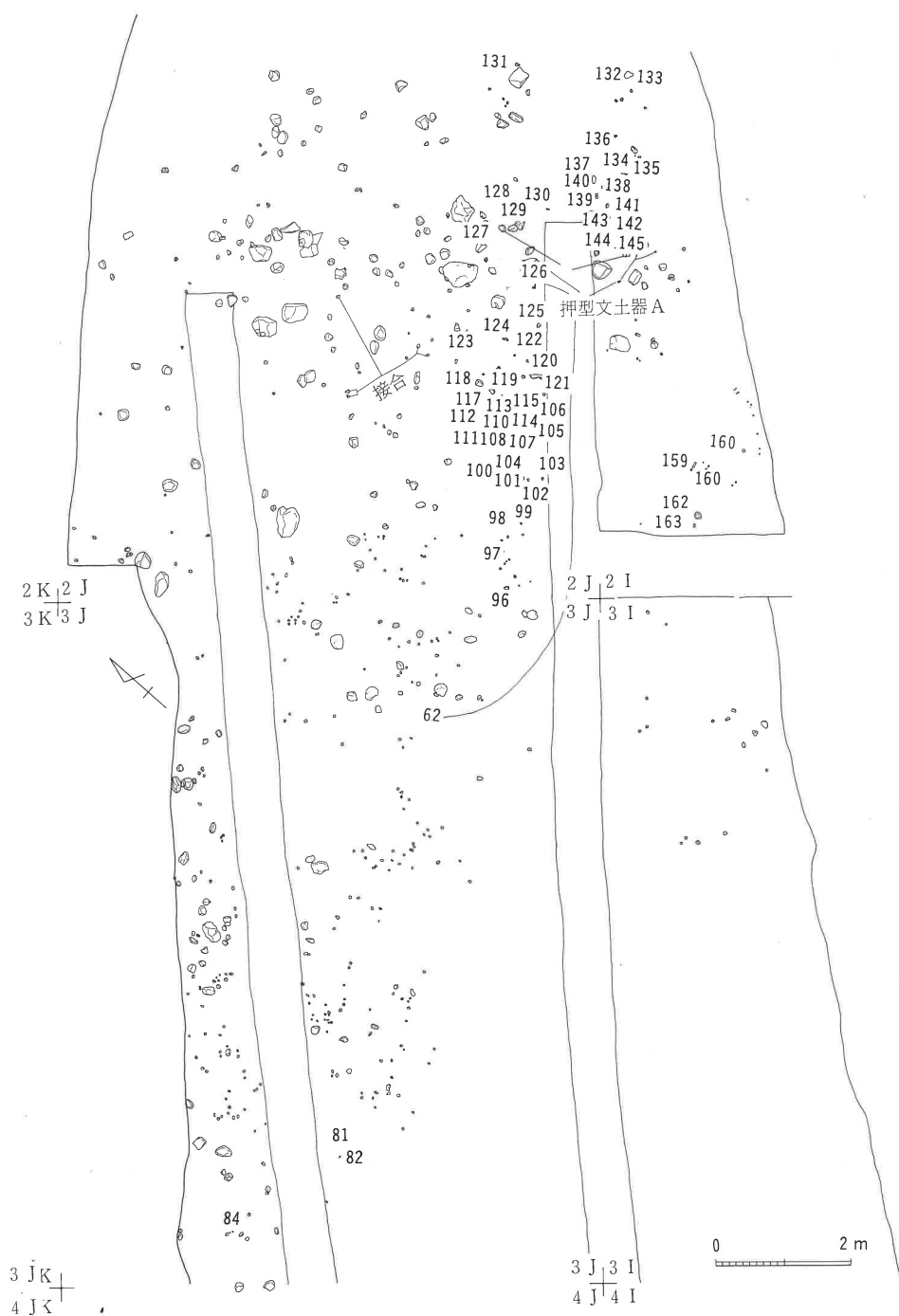


第3図 尾形第1遺跡IOB区北トレンチ(南壁)土層図

状態のアカホヤ火山灰が残るがそれを境に上下を分層することはできなかった。第3層はやや硬い褐色土層で縄文時代早期の遺物包含層である。高い場所では40cm前後の層厚だが第3層は低地部分には存在しない。第4層は上下の層の漸移層である第5層は黒色土層で30cm前後の厚さがある。無遺物層。第6層は硬い茶褐色の土層で丸い小礫が少し混ざる。第7層は礫混じりの土層である。1m前後の大きさの礫も含まれている。3G区から6F区あたりには表土の下にこの層が現れる。



第4図 尾形第1遺跡の押型文土器



第5図 尾形第1遺跡縄文時代早期の遺物出土状態(1)

2. 遺構と遺物

調査区内のうちA地区の山寄りの場所で縄文時代早期の遺物が出土したほか、B地区の南部で散漫な早期頃の遺物包含層を認めた。遺構は2基の土坑を検出しただけであった。A地区の包含層の分布範囲は第2図の網部の部分である。第4～6図には早期の包含層においての遺物の出土状態を示している。3J区や2J区の出土状態の図にみられるような小礫が散漫に集まったものは早期の包含層の下層に見られる状態に類似し、その可能性がある。A地区の東部にある段落ちは畑として利用した際のもので5～6Gにみられる細長い攪乱は道路の痕跡らしい。

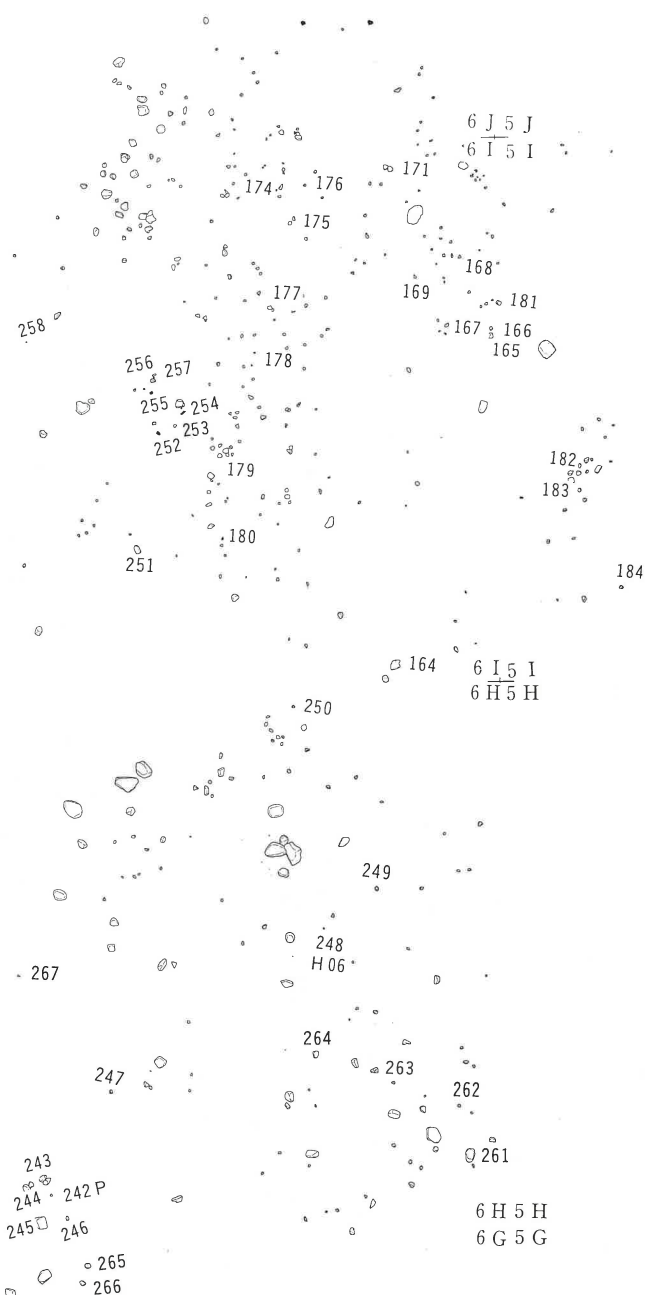
出土した遺物は縄文時代早期の押型文土器と打製石鏃と姫島産黒曜石の剝片である。

土 器 (第4図1～11)

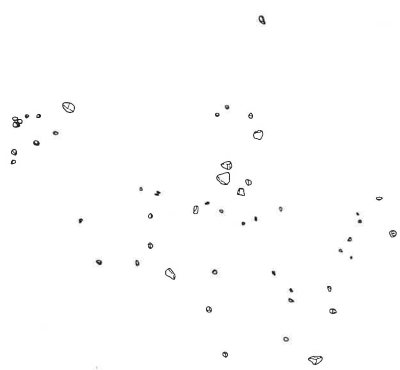
押型文土器A

(第4図1～10)

1～10は同一個体の山形の押型文土器である。2I区と2J区の境界付近に大部分の破片は存在し1点だけ3J区の北東部に出土した。1～3は口縁端部の破片で、4・5は口縁部内面の部分である。7～10は胴部で、



第6図 尾形第1遺跡縄文時代早期の遺物出土状態(2)



4 I | 4 H
5 I | 5 H

そのうち10は底部に近い部分である。胎土には角閃石と長石を多量に混入し、表面の色は赤茶色で割れ口に見える内部は黒色である。施文原体は2の内面の観察によれば器面の山形突部の数は10段、1段の中の山の数3個である。推定による最短の原体の長さは4.6cmであり、直径は5.1mmである。内面上端の直線状のいわゆる刻み目部分は長さ1.6cmである。

押型文土器B（第4図11）

11は押型文土器Aとは別個体の山形の押型文土器である。6J区で出土した。これも胎土に角閃石と長石を多量混入している。

土 坑（第8図）

1号土坑は9B区の東部において等高線と同じ方向に長軸を向けた状態で検出した。平面形は長楕円で北部の深い穴の部分と南部の浅い穴の部分とからなる。長さ406cm、幅は北部で132cm、南部で110cm、深さは北部で155cm、南部で47cmである。2ヶ所で土壤断面図を作成した。①は浅い部分の断面で、層は1が灰褐色の軟らかい土で炭化物の粒を少量混入する。2は暗褐色の軟らかい土で炭化物を多量含む。2'は2に比べて暗さが無い。

3は軟らかい灰色で
3'は軟らかな

5 I | 5 H
6 I | 6 H

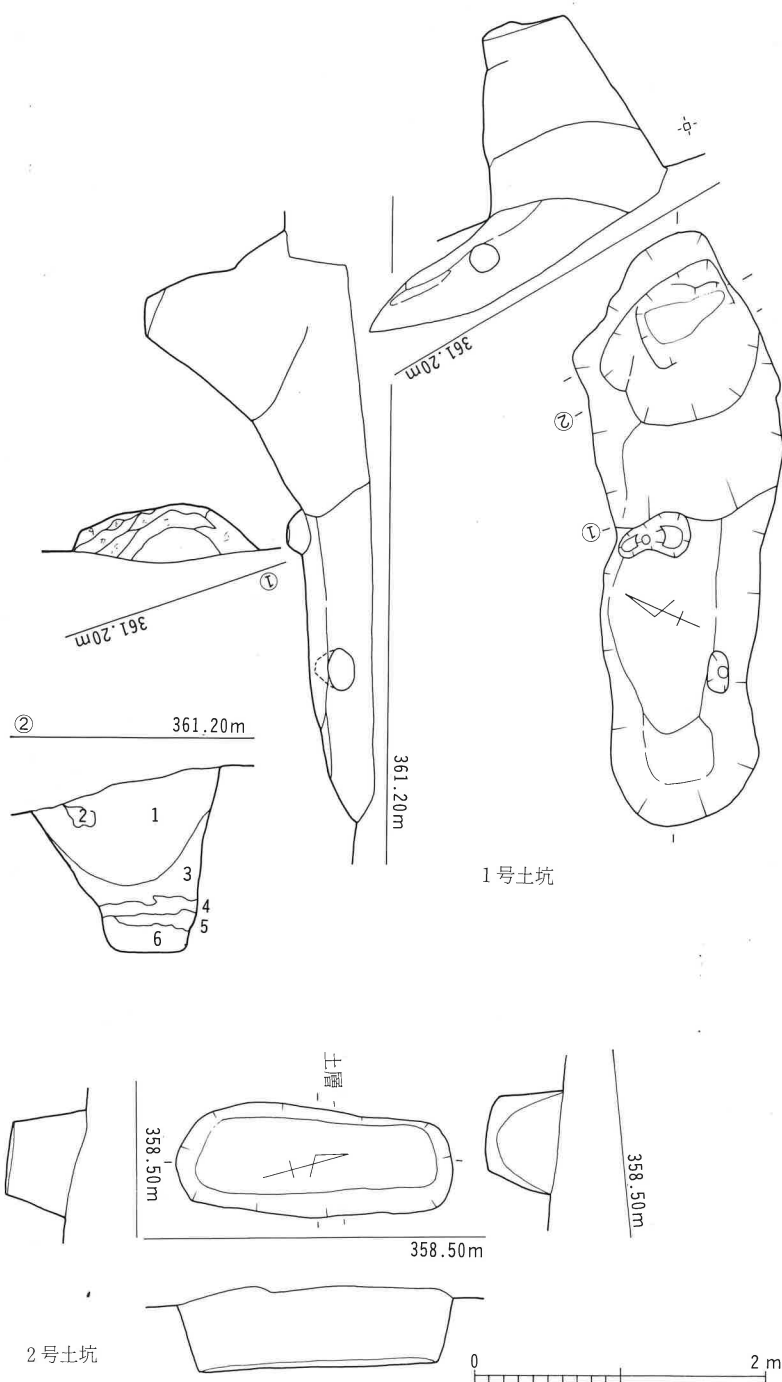
5 H | 5 G
6 H | 6 G

第7図 尾形第1遺跡縄文時代早期の遺物出土状態（3）

褐色土である。4は軟らかい暗褐色土、5は軟らかい褐色土、6は軟らかい茶褐色土である。
②の断面では1が軟らかい褐色土、2が基本層序の6層と同じもの、3と5が赤茶色の粘土層、

4が①断面の3と同じものの、4が黒茶色の粘土層である。1号土坑の性格は分らない。

2号土坑は4Ⅰ区において検出した。これも等高線に平行な長軸をもち、平面形は楕円形で、規模は長さ192cm・幅76cm・深さ57cmである。土層断面は上層が黄褐色土で下層が暗褐色土である。検出した場所の付近には早期の包含層に相当するものが存在せず、基本土層の第6層が表土の次に現れる状態で、2号土坑はこの層の上面で見つけた。人為的な埋め戻しが行われてないことと形態から陥し穴であろうと思う。付近に同類のものはないかと捜したが見つからなかった。



第8図 尾形第1遺跡の土坑

第3節 ま と め

尾形第1遺跡は狭く小さな谷地形に立地する遺跡である。土の流失や攪乱により原地形を留めていない部分が多かったが、東向き斜面には縄文時代早期の遺物包含層が存在した。焼けた石が多数分布する状態を示すので、ここで石を焼いて食料を調理したのであろう。調査範囲内からはやや大型の石を組み合わせた炉である集石遺構は検出しなかった。なお、どちらも土器型式は早水台式であり、約9,000年前のものである。遺構と遺物の出土状態が示す以上の事実からみて、尾形第1遺跡は年間を通してここで生活するような長期間の定住地ではなかったと考えられる。数人の狩猟採集を目的とした人々が、水の便がよく日当たりのよいこの場所で短期間生活した遺跡であろう。